

Oracle® Universal Content Management

Content Server インストレーション・ガイド

10g リリース 3 (10.1.3.3.3) for UNIX Systems

部品番号 : B51294-02

2009 年 5 月

Oracle Universal Content Management Content Server インストール・ガイド, 10g リリース 3
(10.1.3.3.3) for UNIX Systems

部品番号 : B51294-02

原本名 : Oracle Universal Content Management Content Server Installation Guide for UNIX, 10g Release 3
(10.1.3.3.3)

原著者 : Ron van de Crommert

協力者 : Bruce Silver

Copyright ©1996, 2008, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図していません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がありえます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
関連ドキュメント	viii
表記規則	viii
サポートおよびサービス	viii
 1 Content Server について	
1.1 製品の概要	1-2
1.2 このガイドについて	1-2
1.3 役に立つその他のドキュメント	1-2
 2 インストールの概要	
2.1 ハードウェア要件	2-2
2.2 ハードウェア要件のガイドライン	2-2
2.3 メモリー使用量のガイドライン	2-4
2.4 CPU パフォーマンスのガイドライン	2-4
2.5 ソフトウェア要件	2-5
2.5.1 オペレーティング・システム	2-5
2.5.2 Java 仮想マシン (JVM)	2-6
2.5.3 Web サーバー	2-6
2.5.4 データベース	2-6
2.6 Web ブラウザ	2-7
2.6.1 ブラウザに関する一般的な考慮事項	2-7
2.6.2 Windows クライアントの推奨ブラウザ	2-8
2.6.3 UNIX クライアントの推奨ブラウザ	2-9
2.6.4 Mac クライアントの推奨ブラウザ	2-9
2.7 検索ソリューション	2-10
2.8 電子メール構成	2-10
2.8.1 サポートされる電子メール・サーバー	2-10
2.8.2 サポートされる電子メール・クライアント	2-10
2.9 ソフトウェア配布パッケージ	2-11
2.10 基本的なインストール手順	2-12
2.10.1 新規インストール	2-12
2.10.2 インストールの更新	2-13

3 インストール前のタスクおよび考慮事項

3.1	UNIX および Linux オペレーティング・システム	3-2
3.2	Java 仮想マシン (JVM)	3-2
3.3	Content Server の作業環境	3-3
3.4	Web サーバー	3-4
3.4.1	すべての Web サーバー	3-4
3.4.2	Sun Web サーバー	3-5
3.4.3	Apache	3-5
3.4.4	IBM HTTP Server	3-6
3.5	データベース	3-6
3.5.1	すべてのデータベース	3-6
3.5.2	SQL Server	3-8
3.5.3	Oracle	3-9
3.5.4	Sybase	3-11
3.5.5	DB2	3-12
3.6	検索ソリューション	3-13
3.7	JDBC ドライバおよび設定	3-13
3.7.1	Oracle	3-13
3.7.2	Sybase	3-14
3.7.3	SQL Server	3-14
3.7.4	DB2	3-14
3.8	Content Server の UNIX ログイン	3-15
3.9	マスター・サーバーおよびプロキシ・サーバーのユーザー ID	3-15
3.10	Content Server インタフェースのアクセシビリティ	3-16

4 新規 Content Server のインストール

4.1	コマンドライン・インストール	4-2
4.2	自動インストール	4-10
4.2.1	スクリプト・ファイルの作成	4-10
4.2.2	自動インストールの実行	4-11

5 インストール後のタスクおよび考慮事項

5.1	インストール・ログ・ファイル	5-2
5.2	日付書式	5-2
5.3	タイムゾーン	5-2
5.4	各国語環境	5-3
5.5	ローカライズ・ユーザー・インタフェース	5-4
5.6	検索ソリューションの設定	5-5
5.7	アクティブなウィルス・スキャンおよび Content Server	5-5
5.8	Web サーバーの構成	5-5
5.8.1	Web サーバーの手動構成	5-5
5.8.2	Sun Web サーバーの構成ファイル	5-6
5.9	データベースの構成	5-6
5.9.1	データベースの手動構成	5-6
5.9.2	Content Server より前に SQL Server を起動	5-6
5.9.3	メタデータ検索 / 索引付けを行うための Sybase の準備	5-7
5.9.4	全文検索 / 索引付けを行うためのデータベースの設定	5-7
5.10	7.x からアップグレードした場合の従来の変数定義	5-7

6 既存のインストールの更新

6.1	サポートされている更新バージョン	6-2
6.2	開始する前に	6-2
6.3	Content Server の更新	6-4
6.4	プロキシ・サーバーの更新	6-7
6.5	Verity からデータベースの検索 / 索引付けへの移行	6-8

7 Content Server の起動および停止

7.1	Content Server の起動	7-2
7.1.1	UNIX コマンド	7-2
7.1.2	管理サーバー	7-2
7.2	Content Server の停止	7-2
7.2.1	UNIX コマンド	7-2
7.2.2	管理サーバー	7-3
7.3	Content Server の再起動	7-3
7.3.1	UNIX コマンド	7-3
7.3.2	管理サーバー	7-3
7.4	Content Server へのログオン	7-3

A Web サーバーの設定

A.1	Sun Web サーバーの設定	A-2
A.1.1	ドキュメント・ディレクトリの追加	A-2
A.1.2	obj.conf ファイルの変更	A-2
A.1.3	magnus.conf ファイルの変更	A-3
A.1.4	フィルタの名前および場所の指定	A-4
A.1.5	プロキシ・インスタンス用の Sun Web サーバーの設定	A-4
A.2	Apache の設定	A-5
A.2.1	マスター・インスタンス用の Apache の構成	A-5
A.2.2	プロキシ・インスタンス用の Apache の構成	A-7
A.2.3	Apache でのデバッグの有効化	A-7
A.2.4	ログ・ダンプ・ファイルの作成	A-7
A.2.5	正規名の無効化	A-8
A.2.6	ポータル・ページの索引付け	A-8
A.3	IBM HTTP Server の設定	A-8
A.3.1	マスター・インスタンス用の IBM HTTP Server の構成	A-9
A.3.2	プロキシ・インスタンス用の IBM HTTP Server の構成	A-10
A.3.3	IBM HTTP Server でのデバッグの有効化	A-10
A.3.4	ログ・ダンプ・ファイルの作成	A-10
A.3.5	正規名の無効化	A-11

B データベースの設定

B.1	データベース・スクリプト	B-2
B.2	SQL Server の設定	B-3
B.2.1	Content Server データベースの作成	B-3
B.2.2	データベース表の作成	B-4
B.2.3	JDBC 設定の構成	B-5

B.2.4	クラスパスの指定	B-6
B.2.5	コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築	B-6
B.2.6	サーバーの再起動	B-6
B.3	Oracle の設定	B-6
B.3.1	Content Server データベースの作成	B-7
B.3.2	データベース表の作成	B-7
B.3.3	JDBC 設定の構成	B-7
B.3.4	クラスパスの指定	B-8
B.3.5	コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築	B-8
B.3.6	サーバーの再起動	B-8
B.3.7	Oracle OCI ドライバの設定 (Oracle9i)	B-9
B.3.7.1	Oracle Client のインストール	B-9
B.3.7.2	Oracle JDBC ドライバのコピー	B-9
B.3.7.3	tnsnames.ora ファイルの編集	B-10
B.3.7.4	intradoc.cfg ファイルの編集	B-10
B.3.7.5	Oracle 共有ライブラリ・ファイルのコピー	B-10
B.3.7.6	データベース設定の変更	B-11
B.3.8	Oracle OCI ドライバの設定 (Oracle 10g)	B-11
B.3.8.1	Oracle Instant Client のインストール	B-11
B.3.8.2	Oracle JDBC ドライバのコピー	B-12
B.3.8.3	intradoc.cfg ファイルの編集	B-12
B.3.8.4	データベース設定の変更	B-13
B.4	Sybase の設定	B-13
B.4.1	Content Server データベースの作成	B-13
B.4.2	データベース表の作成	B-14
B.4.3	JDBC 設定の構成	B-15
B.4.4	クラスパスの指定	B-15
B.4.5	コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築	B-16
B.4.6	サーバーの再起動	B-16
B.5	DB2 の設定	B-16
B.5.1	DB2 JDBC ドライバ・ファイルのコピー	B-17
B.5.2	Content Server データベースの作成	B-17
B.5.3	データベース表の作成	B-18
B.5.4	JDBC 設定の構成	B-18
B.5.5	クラスパスの指定	B-19
B.5.6	ネクスト・キー・ロックの無効化	B-19
B.5.7	データベースの大 / 小文字の保存	B-20
B.5.8	コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築	B-20
B.5.9	サーバーの再起動	B-20

C Content Server コンポーネント

C.1	Content Server コンポーネントについて	C-2
C.2	コンポーネントのインストール状況	C-2
C.3	ActiveDirectoryLdapComponent	C-4
C.4	ArchiverReplicationExceptions	C-4
C.5	CheckOutAndOpenInNative	C-5
C.6	CheckSCSHealth	C-5
C.7	CIS_Helper	C-5

C.8	ComponentTool	C-6
C.9	ConfigMigrationUtility	C-6
C.10	ContentAccess	C-6
C.11	ContentFolios	C-7
C.12	CoreUserInterfaceLibrary	C-7
C.13	CoreWebDav	C-7
C.14	DBSearchContainsOpSupport	C-8
C.15	FCKEditor	C-8
C.16	FileStoreProvider	C-8
C.17	Folders_g	C-9
C.18	FormEditor	C-9
C.19	InboundRefinerySupport	C-10
C.20	iTextComponent	C-10
C.21	LinkManager8	C-10
C.22	Localization	C-10
C.23	NativeOsUtils	C-11
C.24	OracleQueryOptimizer	C-11
C.25	OracleTextSearch	C-11
C.26	PopUpCalendar	C-11
C.27	ProxyConnections8	C-12
C.28	SecurityProviders	C-12
C.29	ThreadedDiscussions	C-12
C.30	UserProfileSchemaLoader	C-12
C.31	WebUrlMapPlugin	C-13
C.32	WsdGenerator	C-13
C.33	YahooUserInterfaceLibrary	C-13

D データベースの検索および索引付けの設定

D.1	データベースの検索および索引付けに関する考慮事項	D-2
D.1.1	すべてのデータベース	D-2
D.1.2	Oracle	D-3
D.1.3	SQL Server	D-3
D.2	全文検索 / 索引付けを行うためのデータベースの設定	D-4
D.2.1	Oracle	D-4
D.2.2	SQL Server	D-5
D.3	メタデータのための検索 / 索引を行うためのデータベースの設定	D-6

E インストール・スクリプト・ファイル

E.1	スクリプト・ファイルについて	E-2
E.2	スクリプト・ファイルの構造	E-2
E.3	スクリプト・ファイルのエントリ	E-3
E.4	自動インストール用のスクリプト・ファイルの使用	E-10
E.5	スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド	E-11

F 分離インストール

F.1	メリットとデメリット	F-2
F.2	インストール手順	F-2
F.2.1	RedirectUrls フィルタ・プラグインの入手	F-2

F.2.2	Content Server の構成	F-2
F.2.3	Web サーバー・システムの構成	F-3
F.3	実装に関する考慮事項	F-4
F.3.1	JSP の有効化	F-4
F.3.2	静的リクエストの HTTP キャッシング	F-5
F.3.3	PDF バイト・ストリーミング	F-5
F.3.4	コンテンツ・サーバーの変更が Web サーバーにプッシュされない	F-5

G Content Server のアンインストール

G.1	ソフトウェアのアンインストール	G-2
-----	-----------------------	-----

索引

はじめに

Content Server のインストレーション・ガイドには、UNIX で Content Server ソフトウェアのインストールおよびコンテンツ・サーバーの環境の設定を行う管理者に役立つ情報が含まれています。このガイドには、概要、インストール手順および構成上の注意が含まれています。

対象読者

このドキュメントは、システム管理者およびシステム構築者を対象としています。エンドユーザーは対象としていません。

関連ドキュメント

詳細は、Oracle Content Server 10gR3 ドキュメント・セットの次のドキュメントを参照してください。

- 『Getting Started With Content Server』
- 『Content Server Planning and Implementation Guide』
- 『Using Content Server in International Environments』
- 『Clustering Concepts Guide』
- 『Cluster Configuration Guide for UNIX』
- Content Server のリリース・ノート

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック体	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

注意：ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Content Server について

この項の内容は、次のとおりです。

- 1-2 ページの「[製品の概要](#)」
- 1-2 ページの「[このガイドについて](#)」
- 1-2 ページの「[役に立つその他のドキュメント](#)」

1.1 製品の概要

Content Server は、Oracle の様々なコンテンツ管理製品の基礎となる製品です。作成や承認から、公開、検索、有効期限、アーカイブ、破棄まで、コンテンツのライフ・サイクルのフェーズをすべて管理する、柔軟で安全かつ集中管理された Web ベースのリポジトリを提供します。組織全体のすべてのコントリビュータが、ネイティブのデスクトップ・アプリケーションから簡単にコンテンツを投稿でき、豊富なライブラリ・サービスを介してビジネス・コンテンツを効率的に管理できます。また、Web ブラウザを使用して、そのコンテンツにどこからでも安全にアクセスできます。

コンテンツ・タイプにかかわらず、すべてのコンテンツは、管理、再利用およびアクセスを目的として Web リポジトリまたはデータベースに格納されます。リポジトリに格納されている間、電子メール、ディスカッション、ドキュメント、レポート、スプレッドシートおよびレコードから、画像、マルチメディアまたはその他のデジタル形式まで、すべてのタイプのコンテンツで、ライブラリ・サービス、セキュリティ、ワークフロー、パーソナライズ、索引 / 検索、レプリケーションおよび管理など、基本的な同一のコア・サービス・セットを利用できます。

オラクル社のソリューションおよび製品の詳細は、<http://www.oracle.com> を参照してください。

1.2 このガイドについて

このインストール・ガイドには、UNIX オペレーティング・システム (Sun Solaris、HP-UX、IBM AIX または Linux) が稼働するコンピュータに、Content Server 10gR3 をインストールするために必要なすべての情報が記載されています。

このガイドに記載されている情報は、製品技術の進化、ハードウェア、オペレーティング・システム、サード・パーティ・ソフトウェアの作成および変更に伴い変更されます。

1.3 役に立つその他のドキュメント

このインストール・ガイドの他に、次のドキュメントも Content Server ソフトウェアの設定に役立ちます。

- **リリース・ノート** : Content Server ソフトウェアのインストールを進める前に、Content Server ソフトウェアに同梱されているリリース・ノートをよく読んでください。このインストール・ガイドに記載できなかった、インストールの重要な考慮事項が記載されている場合があります。リリース・ノートは PDF ファイルで、Content Server ドキュメント・パッケージの **integrator** ディレクトリにあります。
- **『Using Content Server in International Environments』** : このドキュメントは、Content Server を国際的な多言語環境にデプロイする場合に便利です。英語以外のオペレーティング・システムへの Content Server ソフトウェアのインストールに関する重要な考慮事項が記載されています。また、多言語コンテンツを処理するには、Content Server をどのように設定する必要があるかも説明されています。このドキュメントは PDF ファイルで、Content Server ドキュメント・パッケージの **integrator** ディレクトリにあります。
- **『Clustering Concept Guide for UNIX』** および **『Clustering Installation Guide for UNIX』** : このドキュメントは、Content Server をクラスタ環境にデプロイする場合に便利です。クラスタ化された Content Server 製品の背景、概念およびインストール情報が記載されています。また、様々なクラスタ・サーバー・プラットフォームの推奨ハードウェアおよびソフトウェアについても説明されています。このドキュメントは PDF ファイルで、Content Server ドキュメント・パッケージの **integrator** ディレクトリにあります。

インストールの概要

この項の内容は、次のとおりです。

- 2-2 ページの「ハードウェア要件」
- 2-2 ページの「ハードウェア要件のガイドライン」
- 2-4 ページの「メモリー使用量のガイドライン」
- 2-4 ページの「CPU パフォーマンスのガイドライン」
- 2-5 ページの「ソフトウェア要件」
 - 2-5 ページの「オペレーティング・システム」
 - 2-6 ページの「Java 仮想マシン (JVM)」
 - 2-6 ページの「Web サーバー」
 - 2-6 ページの「データベース」
- 2-7 ページの「Web ブラウザ」
- 2-10 ページの「検索ソリューション」
- 2-10 ページの「電子メール構成」
- 2-11 ページの「ソフトウェア配布パッケージ」
- 2-12 ページの「基本的なインストール手順」

2.1 ハードウェア要件

UNIX 用の Content Server 10gR3 には、次のハードウェアが必要です。

- **Sun Solaris:** Sun Microsystems SPARC または Intel ベースの Solaris ハードウェア
- **HP-UX:** HP9000 (PA-RISC) または Intel Itanium ベースのシステム
- **IBM AIX:** IBM eServer pSeries
- **Linux Red Hat:** x86 ベースの PC
- **Oracle Enterprise Linux:** x86 ベースの PC
- **Linux SuSe:** IBM eServer zSeries/xSeries または x86 ベースの PC

考慮事項

ハードウェアに関する次の考慮事項に注意してください。

- サポートされているすべてのハードウェアに、使用可能な任意のオペレーティング・システムを組み合わせる Content Server を実行できるわけではありません。詳細は、2-5 ページの「[オペレーティング・システム](#)」を参照してください。
- IBM eServer ハードウェア上で稼働している Sun Solaris および SuSe Linux には、Sun JVM ではなく IBM JRE が必要です。
- Intel Itanium ベースのシステム上の HP-UX には、データベースベースの検索ソリューションが必要です (2-10 ページの「[検索ソリューション](#)」を参照)。このハードウェア・プラットフォームでは、Verity 検索エンジンはサポートされていません。

複数言語についての考慮事項

Content Server のインストール用にハードウェアを設定する際、サーバーのキャラクタ・セットとして適切なものを選択することが重要です。たとえば、イントラネットでヨーロッパ言語とアジア言語の両方を扱う場合、両者を同時にサポートできるキャラクタ・セットは Unicode 以外にないため、Unicode のサーバーが必要です。

2.2 ハードウェア要件のガイドライン

Content Server を実行するコンピュータの正確なハードウェア要件は、様々な要因によって異なります。

- コンピュータで、いくつの**コンテンツ・サーバー・インスタンス**を実行しますか。コンピュータで複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスを実行する場合、一般的にハードウェア要件は高くなります。
- Content Server ソフトウェアを実行するコンピュータで、**変換**や**公開** (PDF コンバータ、XML コンバータ、または Dynamic Converter の使用など)を行いますか。実行する場合、一般的にハードウェア要件は高くなります。
- Content Server ソフトウェアを実行するコンピュータは、**本番**用に使いますか。または**開発 / テスト**目的で使いますか。コンピュータを本番環境で使用する場合、一般的にハードウェア要件は高くなります。
- Content Server ソフトウェアを実行するコンピュータの**コンテンツ管理の負荷**はどの程度になりますか。負荷が高くなるのが予想される場合、一般的にハードウェア要件は高くなります。また、管理対象コンテンツ・アイテムまたはユーザーの数、あるいはその両方が多いなど、負荷の種類も影響します。

次の表に、様々なコンテンツ管理シナリオのハードウェアに関する一般的な推奨事項を示します。

注意： この表のすべてのシナリオでは、コンテンツ管理の負荷が低度から中度であると仮定しています。それより高い負荷が予想される場合には、特定アプリケーションをさらに分析する必要があり、別のハードウェア要件が要求される場合もあります。

すべてのインストールにおいて、CPU のプロセッサ速度は 1GHz 以上であることが必要です。ディスク領域要件は Content Server ソフトウェアのみに対応しています。ネイティブおよび Web で参照可能なファイル・リポジトリのデータベース領域または増加領域（Content Server コンピュータに配置されている場合）は含まれていません。

サード・パーティの全文検索 / 索引エンジンを使用するとき（たとえば Verity）は、索引付けによって CPU 負荷が発生するため、理想的には 2 つの CPU の使用をお勧めします。

CS の インストール	変換および公開	本番または開発	CPU	RAM	ディスク領域
1	X	開発	1CPU	1GB	約 750MB
1	X	本番	理想的には 2CPU	2GB	約 750MB
1	○	開発	1CPU	2GB	約 750MB
1	○	本番	理想的には 2CPU	2GB	約 750MB

次の表は、複数のマスター・サーバーと 1 つ以上のプロキシ・サーバーをインストールする場合に対応します。

10gR3 より前 (7.x を含む) のリリースの Content Server からアップグレードしたプロキシ・サーバーに必要なハード・ディスク領域は、10MB のみです。10gR3 形式のプロキシ・サーバーには専用の共有ディレクトリがありますが、プロキシ・サーバーではマスター・サーバーと共有ディレクトリを共有するためです。

CS の インストール	変換および 公開	本番または 開発	CPU	RAM	ディスク領域
>1	X	開発	1CPU	1GB 以上	各サーバー（マスターまたはプロキシ）に約 750MB
>1	X	本番	インスタンスごとに 1CPU（理想的にはインスタンスごとに 2CPU）	1GB 以上	各サーバー（マスターまたはプロキシ）に約 750MB
>1	○	開発	理想的には 2CPU	1GB 以上	各サーバー（マスターまたはプロキシ）に約 750MB
>1	○	本番	理想的にはインスタンスごとに 2CPU	理想的には 2GB 以上	各サーバー（マスターまたはプロキシ）に約 750MB

2.3 メモリー使用量のガイドライン

この項では、Content Server によるメモリー使用量の概要を説明します。

注意：次の表では、負荷は低度から中度であると仮定しています。負荷がそれより高い場合には、通常、RAM の使用量に対する要求も高くなります。

次の表の RAM の合計に関しては、これより少ない RAM でも動作しますが、スワッピングや不適切なキャッシュの使用によりパフォーマンスが低下する傾向があります。必要な RAM の合計は 475MB です。

コンポーネント	RAM	説明およびコメント
UNIX のコア・コード	100MB	RAM。有効化されている機能により異なる。
UNIX のコア・コード	150MB	システム・キャッシュ。様々な要因により異なる。
UNIX のコア・コード	100MB	空き RAM。多いほどよい。
管理サーバー Java	15MB	管理サーバーは、マスターの Content Server インスタンスごとに 1 つにすることを推奨。プロキシ・インスタンスの場合には、管理サーバー Java 用の 15MB を省略することも可能。
Content Server コア Java	100MB	ユーザー数とユーザーの作業内容に依存。50MB まで下げることが可能だが 100MB 準備する必要がある。
Content Server インデクサ	10MB	

Content Server にはデータベースも必要です。データベースは、Content Server とは別のコンピュータに配置することをお勧めします。データベースのコアおよびデータの RAM 使用量は大幅に変動し、システム内のファイル数、使用量およびチューニングによって異なります。使用するデータベースおよび運用条件により、50MB から数百 MB の間で変動します。

2.4 CPU パフォーマンスのガイドライン

次に、1GHz の CPU の大まかなパフォーマンスの見積りを示します（数値はすべて CPU ごとで、その他の CPU アクティビティは除外されています）。

- 1 秒当たり 2 つの小さなファイルのチェックイン（データベース、ネットワークおよびファイルシステムによって多少制限される。）
- 1 秒当たり 5 つの簡単な検索（検索キャッシュ・ヒットを使用した場合は 1 秒当たり 40 まで可能）
- 1 秒当たり 30 の単純な動的ページの配信
- 1 秒当たり 300 の小さな統計ページ

2.5 ソフトウェア要件

この項の内容は、次のとおりです。

- 2-5 ページの「オペレーティング・システム」
- 2-6 ページの「Java 仮想マシン (JVM)」
- 2-6 ページの「Web サーバー」
- 2-6 ページの「データベース」

重要：ブラウザ、データベース、Web サーバーやオペレーティング・システムの技術的な性質により、Oracle はすべてのバージョンとの互換性およびサード・パーティ製品の機能を保証できません。

2.5.1 オペレーティング・システム

次に示す任意の UNIX オペレーティング・システムが、Content Server ソフトウェアのターゲット・コンピュータに正しくインストールされ、稼働している必要があります。

- Sun Solaris9 または 10 (32 ビット /Intel ベースの Solaris ハードウェア)
- Sun Solaris9 または 10 (64 ビット /Sun Microsystems SPARC ハードウェア)
- HP-UX 11i v2 (64 ビット /HP9000 または Intel Itanium ベースのハードウェア)
- IBM AIX 5L バージョン 5.2 または 5.3 (IBM eServer pSeries ハードウェア)
- Red Hat Enterprise Linux ES 3 (32 ビット)、ES 4 (32 ビットおよび 64 ビット)、AS 3 (32 ビット) または AS 4 (32 ビットおよび 64 ビット) (すべて x86 ベースの PC)
- Oracle Enterprise Linux4 (32 ビット)
- SuSe Linux Enterprise Server 9 (32 ビット /IBM eServer zSeries/xSeries または x86 ベースのハードウェア)
- SuSe Linux Enterprise Server 10 (32 ビットまたは 64 ビット /x86 ベースのハードウェア)

考慮事項

オペレーティング・システムに関する次の考慮事項に注意してください。

- Solaris の完全インストールが必要です。エンドユーザーまたは開発者インストールでは不十分です。
- IBM eServer ハードウェア上で稼働している Sun Solaris および SuSe Linux には、Sun JVM ではなく IBM JRE が必要です。
- HP-UX には Sun JVM ではなく HP JRE が必要です。
- オペレーティング・システムが、最新の公式パッチで更新されていることを確認してください。
- インストールおよび実装上の最新の考慮事項については、Content Server ソフトウェアに同梱のリリース・ノートを参照してください。
- Content Server ソフトウェアは、提供された配布媒体 (CD-ROM など) からインストールすることを強くお勧めします。ISO イメージをダウンロードした場合は、CD に書き込むか、インストールする ISO イメージをマウントします。zip ファイルを入手した場合は、そのファイルを一時的なインストール場所に解凍します。

2.5.2 Java 仮想マシン (JVM)

Content Server 10gR3 では、サーバー・サイド Java プログラムを Web サーバー上で実行するには、Java 仮想マシン (JVM) 1.5 が必要です。新規インストールの場合には、JVM が Content Server ソフトウェアとともに自動的にインストールされます。インストールされるデフォルトの JVM は、オペレーティング・システムによって異なります (第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」を参照)。必要な場合には、Content Server 用に使用するコンピュータで、互換性のある既存の JVM を指定できます。

注意： Content Server の管理アプレットを実行するには、クライアント・サイド Java プラグインが必要です。詳細は、2-7 ページの「Web ブラウザ」を参照してください。

2.5.3 Web サーバー

Content Server 10gR3 では、次の Web サーバーがサポートされています。

- Sun Java System Web Server 6.1 (最新の Service Pack を適用済)
- Apache 2.0.x (2.0.42 以降) または 2.2.x
- IBM HTTP Server 2.0.x (2.0.42 以降) または 6.02 (IBM AIX のみ)

考慮事項

次の重要な考慮事項に注意してください。

- 選択する Web サーバーによっては、いくつかの重要なインストール前の考慮事項が該当する場合があります。詳細は、第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」を参照してください。
- 各国語環境で Apache が正常に機能するには、Apache の AddDefaultCharset 構成の設定を変更する必要があります (第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」を参照)。
- 英語以外のオペレーティング・システムを使用している場合は、Web サーバー・ソフトウェアの各国語バージョンを使用する必要があります。
- インストールおよび実装上の最新の考慮事項については、Content Server ソフトウェアに同梱のリリース・ノートを参照してください。

2.5.4 データベース

Content Server 10gR3 では、次のデータベースがサポートされています。

- Microsoft SQL Server 2000 (Service Pack 4 適用済)
- Microsoft SQL Server 2005 (Service Pack も含む)
- SQL*Plus、SQL*Net および Oracle JDBC (Java Database Connectivity) ドライバを含む Oracle Database 10g Standard Edition または Enterprise Edition リリース 2
- SQL*Plus、SQL*Net および Oracle JDBC (Java Database Connectivity) ドライバを含む Oracle9i Database Standard Edition または Enterprise Edition リリース 2 (リリース 9.2)

注意： Content Server 10gR3 でサポートされているのは Oracle9i Database リリース 2 (リリース 9.2) のみで、それより前のリリース 9.x はサポートされていません。リリース 9.2 より前の Oracle9i には、複数のデータ行を破損する可能性のある日付フィールドを含む UPDATE 文に関する既知の問題 (Oracle 既知の問題 2446039) があります。

- Sybase Adaptive Server Enterprise (ASE) 15
- IBM DB2 8.1 または 8.2

考慮事項

次の重要な考慮事項に注意してください。

- 選択するデータベースによっては、いくつかの重要なインストール前の考慮事項が該当する場合があります。詳細は、[第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)を参照してください。
- データベースは、Content Server ソフトウェアとは別のコンピュータに配置することをお勧めします。
- 一般的に、特定のコンテンツ管理アプリケーションに必要なデータベースのライセンス数を決定するのはユーザーの責任です。ライセンスの詳細は、データベース・ベンダーにお問合せください。
- データベースに、公式で最新の重要な更新を適用することをお勧めします。
- インストールおよび実装上の最新の考慮事項については、Content Server ソフトウェアに同梱のリリース・ノートを参照してください。

2.6 Web ブラウザ

標準の Web ブラウザは、コンテンツ・サーバーのコンテンツおよびプラットフォーム管理タスクの表示に使用されます。この項の内容は、次のとおりです。

- 2-7 ページの「[ブラウザに関する一般的な考慮事項](#)」
- 2-8 ページの「[Windows クライアントの推奨ブラウザ](#)」
- 2-9 ページの「[UNIX クライアントの推奨ブラウザ](#)」
- 2-9 ページの「[Mac クライアントの推奨ブラウザ](#)」

注意：最新の考慮事項については、Content Server ソフトウェアに同梱のリリース・ノートを参照してください。

2.6.1 ブラウザに関する一般的な考慮事項

すべてのクライアント・プラットフォーム（Windows、UNIX および Mac）上のすべての Web ブラウザに、次の考慮事項が該当します。

- この項で特に記載のないブラウザやバージョンにも該当する場合がありますが、一般的に、サポートされているレイアウト、およびビューに基づくオプション・リストなどの高度なインタフェース機能に関連する問題がある場合もあります。たとえば、一部のバージョンのブラウザでサポートされているのは、トレー・レイアウトや上部メニュー・レイアウトではなく、クラシック・レイアウトのみです。通常、これらのブラウザでは、ビューに基づくオプション・リストのオプションが表示されません。
- Content Server の管理アプレットを実行するには、クライアント・サイド Java ブラウザ・プラグインが必要です。「Administration」ページに管理アプレットへのリンクが表示されない場合には、Java ブラウザ・プラグインが必要です。Java プラグインは、<http://www.java.com> でダウンロードできます。

次の内容に注意してください。

- Microsoft JVM および Java プラグインは使用しないことをお勧めします。Content Server 10gR3 の「administration」ページのアプレットには、この JVM との互換性はありません。Sun プラグインではなく Microsoft Java プラグインを使用すると、「administration」ページにアクセスした際に表示されるのは灰色のボックスのみです。
- Internet Explorer 6.0 を Sun JVM とともに使用している場合、適用した Microsoft セキュリティ・アップデートによっては、アプレット画像を 2 回クリックする必要があります。まず、アプレットとの対話を可能にするためにアプレット画像をクリックする必要があります。2 回目にクリックすると、実際にアプレットが起動されます。アプレットを起動すると、認証を求めるプロンプトが表示されます。

Web ブラウザに関するその他の考慮事項は、その都度サポート Web サイトを参照してください (特に新しくリリースされたブラウザ・バージョンの場合)。

2.6.2 Windows クライアントの推奨ブラウザ

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システムで稼働するクライアント・コンピュータで、Content Server 10gR3 との併用をお薦めする Web ブラウザを示します。

サポートされる Web ブラウザ	バージョン
Microsoft Internet Explorer	5.5 SP2、6.0 SP2 または 7.0 (次の注意書きを参照)
Firefox	1.5 または 2.0

重要な考慮事項

Windows クライアント上の Web ブラウザに関する次の重要な考慮事項に注意してください。

- 2-7 ページの「**ブラウザに関する一般的な考慮事項**」も参照してください。
- Internet Explorer で、Microsoft JScript エンジン 5.5 以上が使用されていることを確認してください。それ以外の場合、JavaScript のレンダリング・エラー (「Object Not Found」など) がレポートされる可能性があります。Windows XP SP2 では JScript エンジン 5.6 が、Windows Vista では 5.7 が使用されています。
- Internet Explorer 5.5 SP1 は、管理機能にも、コンシューマ / コントリビュータ機能にも使用しないでください。このサービス・パックは安定性に欠け、Content Server の正常な動作に支障をきたす不具合が含まれています。
 1. Internet Explorer 5.5 SP1 のコンシューマがファイルのディスクへの保存を試みると、Internet Explorer は、ネイティブ・ファイルまたは Web 表示可能ファイルではなく、Web フィルタ (HTML ページ) を保存します。これを回避するには、右クリックして「対象をファイルに保存」オプションを使用します。
 2. 強制リフレッシュ (Internet Explorer の「更新」ボタンまたは [F5]) が機能しない場合があります。この場合、画面はリフレッシュされたように見えますが、実際はリフレッシュされていません。
 3. ステータス・バーにステータス・メッセージが正しく表示されない場合があります。実行されたブラウザの処理がステータス・バーに表示されません。

Internet Explorer 5.5 SP1 を使用しているかどうかは、ブラウザを起動し、「ヘルプ」→「バージョン情報」で確認します。SP1 を使用している場合、「更新バージョン」フィールドに SP1 と表示されます。

注意：これらは、Content Server ではなく、Internet Explorer 5.5 SP1 の問題であることに注意してください。この問題は、Microsoft 社で認識されています。

- NT セキュリティを使用する Content Server 構成の場合、特定の状況でログイン・プロセスが予測どおりに動作しないことがあります。Internet Explorer 6.0 を使用して Content Server にログオンする場合、ログイン・ダイアログで何も入力せずに「OK」をクリックすると、プロンプトが表示されない場合と同様にシステムにログインできます。コンピュータに現在ログインしているユーザーとしてログインします。その他のブラウザの場合、Microsoft のログイン・ダイアログで何も入力しないと、3 回の試行後、エラー・メッセージが表示されます。

注意：これは、Content Server の問題ではなく、Internet Explorer 6.0 の問題であることに注意してください。

- 検索エンジンとして Verity 4.5 を使用する場合は、Verity 4.5 と Internet Explorer 7.0 の互換性の問題があるため、コンテンツ・サーバーのコンピュータに Internet Explorer 7.0 をインストールしないことをお勧めします。Verity 5.5 または 6.x の場合は問題ありません。

2.6.3 UNIX クライアントの推奨ブラウザ

次の表に、UNIX オペレーティング・システムで稼働するクライアント・コンピュータで、Content Server 10gR3 との併用をお薦めする Web ブラウザを示します。

サポートされる Web ブラウザ	バージョン
Firefox	1.5 以上
Mozilla	1.7.12 以上 (Sun Solaris および Linux)

重要な考慮事項

2-7 ページの「[ブラウザに関する一般的な考慮事項](#)」を参照してください。

2.6.4 Mac クライアントの推奨ブラウザ

次の表に、Apple Macintosh オペレーティング・システムで稼働するクライアント・コンピュータで、Content Server 10gR3 との併用をお薦めする Web ブラウザを示します。

サポートされる Web ブラウザ	バージョン
Firefox	1.5 以上
Safari	3.1 以上

重要な考慮事項

Mac クライアント上の Web ブラウザに関する次の重要な考慮事項に注意してください。

- 2-7 ページの「[ブラウザに関する一般的な考慮事項](#)」も参照してください。
- Mac クライアントを Content Server とともに使用する場合には、固有の考慮事項があります。詳細は、サポート Web サイトを参照してください。
- Mac OS 9 以前の場合、Netscape 7.0 以上をお薦めします。Mac OS X 10.1 以上の場合、前述の表内のブラウザをどれでも使用できます。

2.7 検索ソリューション

Content Server 10gR3 では、デフォルトで、検索および索引付け機能のためにデータベースが使用されます。データベースはメタデータ検索用にのみ設定されますが、SQL Server および Oracle では、全文検索も行えます。これは、Content Server のインストール後に、手動で設定する必要があります（付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」を参照）。また、検索ソリューションを決定する前に、D-2 ページの「データベースの検索および索引付けに関する考慮事項」も参照してください。

異なる検索ソリューションの使用を可能にするアドオンを使用できます。

- Verity
- FAST

注意： Verity 4.5.1 を使用した旧リリースから Content Server 10gR3 にアップグレードする場合、10gR3 へのアップグレード後も Verity 検索エンジンは機能し続けます。必要な場合には、データベースの検索および索引付けに切り替えることができます。Content Server 10gR3 では Verity 2.7 はサポートされていないことに注意してください。

2.8 電子メール構成

ワークフローやサブスクリプションなど、Content Server の様々な機能では、ファイルの処理が必要な場合やファイルを表示できる場合に、電子メールを使用してユーザーに通知します。この項の内容は、次のとおりです。

- 2-10 ページの「サポートされる電子メール・サーバー」
- 2-10 ページの「サポートされる電子メール・クライアント」

2.8.1 サポートされる電子メール・サーバー

Content Server では、Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) を使用して電子メール・メッセージを送信します。SMTP ベースの任意のメール・サーバーおよび SMTP ゲートウェイを使用した大部分のメール・サーバーとの互換性があります。

2.8.2 サポートされる電子メール・クライアント

Content Server は、ユーザーにイベントまたは保留中の処理を通知するために電子メール・メッセージを送信します。業界標準のすべての電子メール・クライアントがサポートされています。ユーザーが（ユーザー・プロファイルで）HTML 形式の電子メール・メッセージの受信を選択した場合には、電子メールで HTML 形式を処理できる電子メール・クライアントを使用する必要があります。

2.9 ソフトウェア配布パッケージ

Content Server ソフトウェアは、サポートされている各プラットフォームに 1 つずつ、一連の配布パッケージ (zip ファイル、ISO イメージまたは CD) として提供されています。次の表に、各パッケージ内での関連する場所とともに、Content Server ソフトウェアの配布パッケージに含まれる UNIX 関連の主なアイテムを示します。

Content Server ソフトウェア	場所
Sun Solaris (Sun Microsystems SPARC ハードウェア) 用の Content Server ソフトウェア	Solaris (SPARC) 用のパッケージ: /UCM/ContentServer/solaris
Sun Solaris (Intel ベースの Solaris ハードウェア) 用の Content Server ソフトウェア	Solaris (Intel) 用のパッケージ: /UCM/ContentServer/solaris-x86
IBM AIX 用の Content Server ソフトウェア	AIX 用のパッケージ: /UCM/ContentServer/aix
HP-UX (HP9000 ハードウェア) 用の Content Server ソフトウェア	HP-UX (HP9000) 用のパッケージ: /UCM/ContentServer/hpux
HP-UX (Intel Itanium ベースのハードウェア) 用の Content Server ソフトウェア	HP-UX (Itanium) 用のパッケージ: /UCM/ContentServer/hpux-ia
Red Hat, Oracle Enterprise および SuSe Linux (x86 ベースのハードウェア) 用の Content Server ソフトウェア	Linux (x86) 用のパッケージ: /UCM/ContentServer/linux
SuSe Linux (IBM eServer zSeries ハードウェア) 用の Content Server ソフトウェア	Linux (eServer) 用のパッケージ: /UCM/ContentServer/linux-s390

Java 仮想マシン	場所
Sun Solaris (Microsystems SPARC) 用の Java 仮想マシン (JVM)	Solaris (SPARC) 用のパッケージ: /3rdParty/solaris/jdk1.5.0_11
Sun Solaris (Intel ベースの Solaris ハードウェア) 用の Java 仮想マシン (JVM)	Solaris (Intel) 用のパッケージ: /3rdParty/solaris-x86/jdk1.5.0_11
IBM AIX 用の Java 仮想マシン (JVM)	AIX 用のパッケージ: /3rdParty/aix/jdk1.5.0
HP-UX (HP9000 ハードウェア) 用の Java 仮想マシン (JVM)	HP-UX (HP9000) 用のパッケージ: /3rdParty/hpux/jre1.5.0.03
HP-UX (Intel Itanium ベースのハードウェア) 用の Java 仮想マシン (JVM)	HP-UX (Itanium) 用のパッケージ: /3rdParty/hpux-ia/jre1.5.0.03
Red Hat, Oracle Enterprise および SuSe Linux (x86 ベースのハードウェア) 用の Content Server ソフトウェア	Linux (x86) 用のパッケージ: /3rdParty/linux/jdk1.5.0_11
SuSe Linux (IBM eServer zSeries) 用の Content Server ソフトウェア	Linux (eServer) 用のパッケージ: /3rdParty/linux-s390/jre1.5.0

ドキュメント

Content Server ソフトウェアには、広範なドキュメントのセットが付属しています。ドキュメントは、Content Server ソフトウェアとともに `[CS-Install]/weblayout/help` にインストールされます。そのディレクトリにある `index.htm` ファイルを起動すると、完全管理のオンライン・ヘルプ・システムを起動できます。PDF 形式のガイドは、`[CS-Install]/weblayout/help/documentation` にあります。

2.10 基本的なインストール手順

この項では、インストール・シナリオに応じて、Content Server 10gR3 の基本的なインストール手順を簡単に説明します。

- 2-12 ページの「[新規インストール](#)」

2.10.1 新規インストール

Content Server 10gR3 の新規インストールの基本的な手順は、次のとおりです。

1. ソフトウェア・インストールの前に、情報を収集してタスクを実行します。詳細は、[第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)を参照してください。
2. インストール言語を選択します。
3. 実行する必要があるインストール・タスクを指定します。
4. Content Server のインストール場所を指定します。
5. Java 仮想マシン (JVM) を指定します。
6. ネイティブ・ファイル・リポジトリ (Vault) の場所を指定します。
7. Web 表示可能ファイル・リポジトリ (Web Layout) の場所を指定します。
8. 認証設定 (マスターまたはプロキシ) を指定します。
9. 管理サーバーをインストールするかどうかを指定します。
10. Web ブラウザ実行可能ファイルの場所を指定します。
11. システム・ロケールを指定します。
12. タイムゾーンを指定します。
13. Content Server のポート番号を指定します。
14. 管理サーバーのポート番号を指定します (管理サーバーを設定する場合)。
15. 着信接続アドレスのセキュリティ・フィルタを指定します。
16. URL 接頭辞 (Web サーバーの相対ルート) を指定します。
17. 基本的なメール設定を指定および構成します。
18. Web サーバーの HTTP アドレスを指定します。
19. コンテンツ・サーバー・インスタンスの名前を指定します。
20. Content Server とともに使用する Web サーバーを指定および構成します。
21. JDBC およびデータベース接続設定を含め、Content Server とともに使用するデータベースを指定および構成します。
22. インストールするオプションのコンポーネントを選択します。
23. ソフトウェア・ファイルをインストールします。
24. ソフトウェアのインストール後にタスクを実行します (選択した Web サーバーまたはデータベースあるいはその両方により異なります)。詳細は、[第5章「インストール後のタスクおよび考慮事項」](#)を参照してください。
25. コンピュータを再起動します。
26. Content Server を起動します。
27. インストールを検証します。

2.10.2 インストールの更新

Content Server 10gR3 の既存のインストールを更新する基本的な手順は、次のとおりです。

1. ソフトウェア・インストールの前に、情報を収集してタスクを実行します。詳細は、[第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)を参照してください。
2. インストール言語を選択します。
3. 更新する Content Server のインストール場所を指定します。
4. インストールするオプションのコンポーネントを選択します。
5. ソフトウェア・ファイルをインストールします。
6. ソフトウェアのインストール後にタスクを実行します（選択した Web サーバーまたはデータベースあるいはその両方により異なります）。詳細は、[第5章「インストール後のタスクおよび考慮事項」](#)を参照してください。
7. コンピュータを再起動します。
8. Content Server を起動します。
9. インストールを検証します。

インストール前のタスクおよび考慮事項

Content Server ソフトウェアのインストール前に、検討する必要があるタスクおよび考慮事項が多数あります。それらは次の項目に関連しています。

- 3-2 ページの「[UNIX および Linux オペレーティング・システム](#)」
- 3-2 ページの「[Java 仮想マシン \(JVM\)](#)」
- 3-3 ページの「[Content Server の作業環境](#)」
- 3-4 ページの「[Web サーバー](#)」
- 3-6 ページの「[データベース](#)」
- 3-13 ページの「[検索ソリューション](#)」
- 3-13 ページの「[JDBC ドライバおよび設定](#)」
- 3-15 ページの「[Content Server の UNIX ログイン](#)」
- 3-15 ページの「[マスター・サーバーおよびプロキシ・サーバーのユーザー ID](#)」
- 3-16 ページの「[Content Server インタフェースのアクセシビリティ](#)」

3.1 UNIX および Linux オペレーティング・システム

次に、UNIX および Linux オペレーティング・システムに関連するタスクおよび考慮事項を示します。Content Server ソフトウェアをインストールする前に読んで理解し、これらに準拠してください。

Sun Solaris

- Solaris の完全インストールが必要です。エンドユーザーまたは開発者インストールでは不十分です。
- 次の Solaris カーネル構成エントリを使用して、Internet Explorer から Solaris 上で稼働するコンテンツ・サーバーへのファイルのアップロード・パフォーマンスを向上できます。

```
ndd -set /dev/tcp tcp_deferred_acks_max 0
ndd -set /dev/tcp tcp_deferred_ack_interval 10
```

Linux

- Content Server 10gR3 を Linux にインストールする場合、C++ の下位互換パッケージがコンテンツ・サーバーに（別のマシンで稼働する場合は Web サーバーにも）インストールされていることを確認します。そうでない場合、Content Server のインストール時、または Web サーバーの起動時にエラー（NativeOsUtils 例外、共有オブジェクト・ファイルの起動の失敗など）が起こる場合があります。パッケージは、通常、`compat-<version_info>.rpm` または `compat-libstdc++-<version_info>.rpm` という名前で、Linux の配布メディアに含まれています。

3.2 Java 仮想マシン (JVM)

次に、Java 仮想マシン (JVM) に関連するタスクおよび考慮事項を示します。Content Server ソフトウェアをインストールする前に読んで理解し、これらに準拠してください。

- デフォルトでは、プラットフォームに応じて、次の JVM バージョンが Content Server とともに使用されます。
 - Sun Solaris (SPARC) : Sun JVM 1.5.0_11
 - Sun Solaris (Intel) : Sun JVM 1.5.0_11
 - HP-UX (HP9000) : HP JVM 1.5.0.03
 - HP-UX (Itanium) : HP JVM 1.5.0.03
 - IBM AIX: IBM JVM 1.5.0
 - Linux (x86) : Sun JVM 1.5.0_11
 - Linux (IBM zSeries) : IBM JVM 1.5.0

新規インストールの場合、別の JVM を使用することを指定しないかぎり、これらのバージョンの JVM が Content Server ソフトウェアとともに自動的にインストールされます。

- テストされているのは、Content Server ソフトウェアとともに提供される JVM のみです。Content Server のデフォルトの JVM（前述の内容を参照）を使用しない場合は、注意してください。Content Server ソフトウェアのインストール前に、JDK 1.5 準拠の Java 仮想マシン (JVM) を Content Server システムに必ずインストールしてください。テストされていない JVM は問題の原因になる場合があります。
- Content Server に必要な JVM 以外の JVM がコンピュータに存在しても、問題はありません。同じコンピュータで、複数の JVM が共存できます。
- x86 ベースのコンピュータ上の Linux 用のデフォルトの JVM は、Sun JVM 1.5 です。この JVM を使用し、IBM JVM は使用しないことをお勧めします（パフォーマンス上の問題のため）。パフォーマンス上の問題を許容できる場合は IBM JVM を使用できますが、`[CS-Install]/bin/intradoc.cfg` 構成ファイルに次の行を追加して、最適化をオフにする必要があります（`[CS-Install]` はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ）。

JVMFLAGS=-Djava.compiler=off

この変更を行った後には、Content Server を必ず再起動してください。

- Solaris の場合には、1.5 JVM 用の適切な Solaris パッチをインストールする必要があります。

3.3 Content Server の作業環境

次に、Content Server の作業環境に関連するタスクおよび考慮事項を示します。Content Server ソフトウェアをインストールする前に読んで理解し、これらに準拠してください。

- このリリースの Content Server では、このインストール・ガイドに説明されている一部のアドオンやコンポーネントなどを使用できない場合があります。それらは、今後のリリース・サイクルで使用できるようになります。
- Content Server 10gR3 のプロキシ・サーバー・インスタンスは、旧リリースのプロキシ・サーバーよりはるかに多くのディスク領域を使用します。これは、10gR3 形式のプロキシ・サーバーには専用の共有ディレクトリがありますが、10gR3 より前のプロキシ・サーバーではマスターと共有ディレクトリを共有するためです。

注意： 旧リリースから Content Server 10gR3 にアップグレードしても、プロキシ・サーバーはマスターと共有ディレクトリを共有し続けます。

- ネイティブ・ファイル・リポジトリ (Vault) および Web で表示可能なファイル・リポジトリ (Web Layout) を配置する場所を指定します。Content Server ソフトウェアのインストール中に、それぞれの場所のパス名を要求されます。その場所に十分なディスク領域があることを確認してください。また、それらのディレクトリがその他の Content Server とは別のシステムにある場合は、ドライブがアクセス可能で、適切な権限があることを確認してください。
- 企業の電子メール・サーバー・アドレス (mail.companyname.com など) を確認します。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。
- 企業の Content Server のシステム管理者の電子メール・アドレス (sysadmin@companyname.com など) を確認します。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。
- 企業の Content Server 用の HTTP アドレスを確認します。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。
- Content Server のネットワーク IP アドレス (61.45.14.104 など) を確認します。ローカル・ホストの IP アドレス (127.0.0.1) では十分ではありません。Content Server ソフトウェアのインストール中に、IP アドレス・セキュリティ・フィルタのローカル・ホストの IP アドレスに Content Server の IP アドレスを追加する必要があります (使用するアドオンまたはカスタマイズにより異なります)。
- Content Server のポート番号を確認します。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。同じコンピュータ (マスターおよびプロキシの両方) で複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスを使用する場合は、各インスタンスに異なるポート番号を使用してください。
- 管理サーバーのポート番号を確認します。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。同じコンピュータで複数のマスター・コンテンツ・サーバーを使用する場合は、各マスター・インスタンスに異なるポート番号を使用してください。プロキシ・インスタンスは、関連するマスター・インスタンスと、管理サーバーのポート番号を共有することに注意してください。

- Content Server に使用する **Web サーバー** (Sun、Apache または IBM HTTP Server) を確認します。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。

Content Server でサポートされている正確なソフトウェア・バージョンの詳細は、2-5 ページの「[ソフトウェア要件](#)」を参照してください。

特に Web サーバーに関連するインストール前のタスクおよび考慮事項は、3-4 ページの「[Web サーバー](#)」を参照してください。

- Content Server とともに使用する**データベース** (Microsoft SQL Server、Oracle、Sybase または DB2) を確認します。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。

Content Server でサポートされている正確なソフトウェア・バージョンの詳細は、2-5 ページの「[ソフトウェア要件](#)」を参照してください。

特にデータベースに関連するインストール前のタスクおよび考慮事項は、3-6 ページの「[データベース](#)」を参照してください。

- 負荷の高いバッチのロードまたは多数のチェックイン・アクティビティを含む Inbound Refinery 接続のある UNIX システムの場合は、ファイル・サービスに Samba を使用することをお勧めします。テストの際に、非常に信頼性が高いことが証明されました。

3.4 Web サーバー

Content Server とともに使用する Web サーバーによっては、検討する必要のあるタスクおよび考慮事項が多数あります。

- [すべての Web サーバー](#)
- [Sun Web サーバー](#)
- [Apache](#)
- [IBM HTTP Server](#)

Content Server ソフトウェアをインストールする前に読んで理解し、これらに準拠してください。

3.4.1 すべての Web サーバー

Content Server ソフトウェアとともに使用するすべての Web サーバーに、次の考慮事項が該当します。

- このガイドのインストール手順では、Content Server ソフトウェアを Web サーバーと同じ物理コンピュータにインストールすると仮定しています。Content Server と Web サーバーを別々の物理システムに配置する場合は、[付録 F「分離インストール」](#)を参照してください。
- Content Server ソフトウェアをインストールする前に、Web サーバー・ソフトウェアが正常にインストールおよび実行されていることを確認し、[フルパス](#)をメモしてください。
- **Web サーバーのルート**を確認してメモします。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。

重要：Enterprise Search を使用する場合は、各コンテンツ・サーバー・インスタンスに異なる Web ルート (Server1、Server2 など) を使用してください。そうしない場合、一意の相対 Web ルート (HttpRelativeWebRoot 値) を割り当てるために、各コンテンツ・サーバー・インスタンスの構成を変更する必要があります。すべてのコンテンツ・サーバー・インスタンスの Web ルート・ディレクトリの名前が同一の場合、Enterprise Search は機能しません。すでにコンテンツ・サーバー・インスタンスをインストール済で、その Web ルートを変更する必要がある場合には、Oracle サポート・サービスに連絡することをお勧めします。

- Web サーバーのアプリケーション・セキュリティを強化するために設計された特定のサード・パーティ製品により、Content Server の機能が無効化される場合があります。特に、Content Server には長い CGI パラメータ（最大 20,000 文字になる場合があります）が必要であり、Content Server の CGI URL パスには任意のパス接尾辞が必要であることに留意してください。
- Web サーバーの管理ユーザー名およびパスワードを確認してメモします（IIS の場合は不要）。Content Server ソフトウェアのインストール中に要求されます。（システム管理者から情報を入手する必要がある場合もあります。）
- Content Server ソフトウェアのインストール中に、DDL ファイルを上書きする必要があるかどうかを確認されます。必要がある場合は上書きします。

3.4.2 Sun Web サーバー

3-4 ページの「すべての Web サーバー」に指定されている一般的な考慮事項に加え、Sun Web サーバーに関する次の考慮事項にも注意してください。

- root ユーザーを使用して Web サーバーをインストールします。
- 次の内容が設定されていることを確認してください。
 - Content Server のユーザー・ログインにサーバー・ユーザーを設定します。
 - Web サーバーの IP アドレスにバインド先アドレスを設定します。
- 同じコンピュータに複数のマスター・コンテンツ・サーバーをインストールする場合は、各マスター・コンテンツ・サーバーに別々の Sun Web サーバー・インスタンスを作成する必要があります。Web サーバー・インスタンスに 80 以外のポート番号を使用する場合は、そのポート番号を Web サーバーの HTTP アドレスの一部に含める必要があります（server:81 など）。

3.4.3 Apache

（3-4 ページの「すべての Web サーバー」に指定されている一般的な考慮事項に加え、）Apache に関する次の考慮事項にも注意してください。

- Apache 1.x は、Content Server ではサポートされていません。
- 動的にロード可能なモジュールのサポートを有効化します。特に、DSO モジュール化を行うための Apache サーバーのビルドを構成します。
- Apache 構成スイッチを構成します。
- 各国語環境で Apache 2.x が正常に機能するには、Apache の AddDefaultCharset 構成の設定を変更する必要があります。一部のブラウザ（特に Mozilla ベースのブラウザ）では、HTML ページがページに指定されたキャラクタ・セットで表示されません。これは、Apache に、Apache が戻すすべてのページのキャラクタ・セットを指定する HTTP Content-Type の戻りヘッダーを増やす構成エントリがあり、一部のブラウザではページに指定されたキャラクタ・セットではなくヘッダーが信頼されるためです。標準の内部キャラクタ・セット・エンコーディングとして UTF-8 を使用している Content Server のヘルプ・ページでは特に問題になる場合があります。デフォルトのキャラクタ・セットが iso-8859-1 であるため、この問題は英語以外のサイトでのみ発生する傾向があります。

この問題を回避するには、Apache 構成エントリ AddDefaultCharset を使用して、Web ページに指定されているキャラクタ・セットと一致させます。この値は、HTML タグ内の値 %pagecharset% を検索して決定できます。

```
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=%pagecharset%">
```

Web サイトで複数のキャラクタ・セットのページが戻された場合は、AddDefaultCharset の値を Off に設定するか、Location または Directory ディレクティブを使用して使用する有効範囲を設定します。コンテンツ・サーバーではページ・コンテンツのソースに応じて、異なるキャラクタ・セットが使用されている場合があることに注意してください。次に、ネイティブの SJIS キャラクタ・セットが使用されている日本語のコンテンツ・サーバーのサンプル構成を示します。

```
<Location /idcm1>
AddDefaultCharset shift_jis
</Location>
<Location /idcm1/help>
AddDefaultCharset utf-8
</Location>
```

UTF-8 エンコードのページを配信するために、ヘルプ・ページの有効範囲が個別に設定されていることに注意してください。

3.4.4 IBM HTTP Server

(3-4 ページの「すべての Web サーバー」に指定されている一般的な考慮事項に加え、) IBM HTTP Server に関する次の考慮事項にも注意してください。

- IBM HTTP Server がサポートされているのは IBM AIX オペレーティング・システムのみです。
- 動的にロード可能なモジュールのサポートを有効化します。特に、DSO モジュール化を行うための IBM HTTP Server のビルドを構成します。
- IBM HTTP Server 構成スイッチを構成します。

3.5 データベース

Content Server とともに使用するデータベースによっては、検討する必要があるタスクおよび考慮事項が多数あります。

- [すべてのデータベース](#)
- [SQL Server](#)
- [Oracle](#)
- [Sybase](#)
- [DB2](#)

Content Server ソフトウェアをインストールする前に読んで理解し、これらに準拠してください。

3.5.1 すべてのデータベース

Content Server ソフトウェアとともに使用するすべてのデータベースに、次の考慮事項が該当します。

- データベースは、Content Server とは別のコンピュータに配置することをお勧めします。
- Content Server ソフトウェアをインストールする前に、データベース・ソフトウェアが正常にインストールおよび実行されていることを確認してください。
- Content Server ソフトウェアをインストールする前に、使用されるデータベース・ユーザー（パスワード付き）を各データベース・インスタンスに作成してください。
- Content Server がデータベースに接続して対話するには、JDBC ドライバが必要です。一部のデータベース用にデフォルトの JDBC ドライバが用意されていますが、カスタム JDBC ドライバを選択することもできます。そのドライバが、JDBC 3.0 に準拠していることを確認してください。ソフトウェアのインストール中に、デフォルトの JDBC ドライバを使用するか、カスタム・ドライバを指定するかを選択します。様々なデータベースに使用可能な JDBC ドライバの詳細は、3-13 ページの「[JDBC ドライバおよび設定](#)」を参照してください。

- Content Server インストーラによるデータベースの自動設定を行う場合は、Content Server ソフトウェアをインストールする前に、各コンテンツ・サーバー・インスタンス（マスターおよびプロキシ）にデータベースを作成してください。必要な場合には、Content Server インストーラによりデータベース表が設定されますが、データベースはデータベース領域内に作成されません。データベースは、Content Server ソフトウェアのインストール前に存在している必要があります。コンテンツ・サーバー・インスタンスのデータベースが存在しない場合、インストールは失敗します。
- データベースの手動設定を選択した場合は、Content Server ソフトウェアのインストール前または後に行います。詳細は、[付録 B「データベースの設定」](#)を参照してください。
- 各 Content Server ソフトウェア配布パッケージには、`/UCM/ContentServer/database/[db_name]` という名前のディレクトリが含まれています。このディレクトリには、データベース表を手動でインストールする（必要な場合）ための SQL スクリプトが含まれています。データベース表で Unicode テキスト・フィールドを使用する必要がある場合には、前述の場所の unicode サブディレクトリのスクリプトを使用してください。詳細は、[付録 B「データベースの設定」](#)を参照してください。
- Content Server は、デフォルトで、検索および索引付け機能を提供するためにデータベースを使用するように設定されます。使用するデータベースと、索引付けする言語に応じて、メタデータまたは全文検索あるいはその両方がサポートされます。全文検索には、いくつかの構成手順を手動で行う必要があります。索引付けの言語は、使用するデータベースでサポートされている必要があります（[付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」](#)を参照）。

異なる検索ソリューションの使用を可能にするアドオン（Verity や FAST など）を使用できます。サポートされている検索ソリューションごとに、個別の統合ドキュメントが使用可能です。
- （デフォルトの状況で）データベースが検索および索引付けに使用され、全文索引付け用に設定されている場合、各コンテンツ・アイテムのテキストは全文検索用にデータベースに格納されます。このため、データベースのサイズを適切に設定することが重要です。索引付け可能なドキュメントの数によっては、IdcColl1 表および IdcColl2 表が非常に大きくなることがあります。
- Content Server で西ヨーロッパ以外の言語（ロシア語や日本語など）をサポートするように設定できます。その場合は、Unicode データベース、または言語固有のオペレーティング・システムとデータベースを使用してください。また、サポートするすべての言語と互換性のあるエンコーディング・スキーマを使用してください。詳細は、『Using Content Server in International Environments』を参照してください。このガイドは PDF ファイル（`/integrator/internat_environments_10en.pdf`）で、Content Server ドキュメント・パッケージにあります。
- Content Server ソフトウェアをインストールするには、データベース関連の情報が必要です（次を参照）。Content Server インストーラによるデータベースの設定が可能な場合、Content Server ソフトウェアのインストール中にこの情報を要求されます。それ以外の場合は、手動によるデータベースの設定中に必要です。

データベース管理者ではない場合、必要な情報を取得するために管理者との作業が必要な場合があります。
- データベース・ソフトウェアへのインストールのフルパスを確認してメモします。
- データベース・サーバーの名前を確認してメモします。
- Content Server のデータベース名を確認してメモします。
- リスナーのポート番号を確認してメモします。
- データベースへの接続に使用されるユーザー ID とパスワードを確認してメモします。

3.5.2 SQL Server

(3-6 ページの「すべてのデータベース」で説明されている一般的な考慮事項に加え、) Microsoft SQL Server に関する次の考慮事項にも注意してください。

- Content Server ソフトウェアには、SQL Server 用の JDBC ドライバは用意されていません。独自に JDBC ドライバを入手して、ソフトウェアのインストール時にそのファイルを使用可能にする必要があります。Java Runtime Environment (JRE) 1.4 以上のバージョンで稼働する SQL Server には、JDBC 3.0 に準拠している任意のドライバを使用できます。次に、テスト済で、Content Server と確実に連携することが検証されているドライバを示します。
- **jTDS ドライバ:** Microsoft SQL Server (2000 および 2005 の両方) 用のオープン・ソースの JDBC ドライバで、JDBC 仕様を完全に実装します。jTDS ドライバは、<http://jtds.sourceforge.net> からダウンロードできます。

Content Server ソフトウェアをインストールする前に、ドライバの配布ファイルを解凍してください。インストーラは、圧縮された zip ファイル内のドライバ・ファイル进行处理できません。

- SQL Server 2000 では、アラビア語の全文索引付けはサポートされません。Content Server データベースの全文検索機能は、使用するデータベースでサポートされている機能に限定されます。SQL Server 2005 では、アラビア語の全文索引付けはサポートされます。
 - Content Server のデータベースは、(少なくとも) 25MB のログのある 100MB のデータベースである必要があります。
 - データベースが 10%の間隔で自動的に増大するように設定します。
 - ログを自動的に切り捨てるようにデータベースを設定します。
 - Content Server は、デフォルトで、SQL Server 認証を使用して SQL Server データベースにアクセスします。Content Server インストーラによる SQL Server データベースの自動設定を行う場合は、SQL Server のデフォルトの認証方法が正しく設定されていることを確認してください。
1. SQL Server Enterprise Manager を起動します。
 2. データベース・サーバーを選択します。
 3. 右クリックして、メニューから「**Properties**」を選択します。
 4. 「Security」タブを開きます。
 5. 「Security」領域で、認証が「SQL Server and Windows」に設定されていることを確認します。(これはデフォルト値ではありません。)

重要: Content Server インストーラにより、SQL Server が Windows 認証に設定されていることが検出されると、SQL Server のログイン警告が報告されます。また、データベースとの接続を確立できないためインストールが失敗します。

注意: SQL Server 認証ではなく Windows 認証を使用する必要がある場合は、SQL Server データベースを手動で設定することをお勧めします。
[付録 B 「データベースの設定」](#) を参照してください。

- Content Server とともに使用する SQL Server が、サービスとして実行されていて使用可能であることを確認してください。
- 標準の SQL Server データベースの管理者 (sa または dbo) は、データベースの管理者である必要はありません。

必要な場合には、所有者として異なるユーザーを割り当てられます。

1. SQL Server Enterprise Manager を使用して、データベース (これより前の手順で確認済) を作成します。

2. 覚えやすいパスワードを使用して SQL Server ログイン (dbadmin など) を作成します。
3. 「New Login」ダイアログの「General」タブで、新しいログイン用のデフォルトのデータベースとして、新しく作成されたデータベースをドロップダウン・リストから選択します。
4. 「Database Access」タブで、新しく作成されたデータベースへの新規ログイン・アクセスを指定します。
5. 「same」タブで、「Database Roles」セクションの「Public」および「Db_Owner」を選択します。
6. 「OK」をクリックして、新規ログイン情報を保存します。

次のスクリプトを使用して、手順 2 ～ 6 を実行することもできます (必要に応じて変数を変更してください)。

```
EXEC sp_addlogin 'dbadmin', 'password', 'mypassword'
GO
USE CS_DB
GO
EXEC sp_adduser 'db_admin', 'db_admin'
GO
EXEC sp_addrolemember 'db_datareader', 'db_admin'
GO
EXEC sp_addrolemember 'db_datawriter', 'db_admin'
GO
EXEC sp_addrolemember 'db_ddladmin', 'db_admin'
GO
```

3.5.3 Oracle

(3-6 ページの「すべてのデータベース」で説明されている一般的な考慮事項に加え、) Oracle データベースに関する次の考慮事項にも注意してください。

- 次のソフトウェアとともに Oracle Enterprise Server をインストールします。
 - SQL*Plus
 - オプション: Net9 (Oracle9i) または Net10 (Oracle 10g)
- Oracle との通信には、JDBC シン・クライアントまたは Oracle の OCI ドライバを使用できます。デフォルトでは、JDBC シン・クライアントが使用されますが、インストール後に変更することができます。詳細は、B-6 ページの「Oracle の設定」を参照してください。
- 一時およびデフォルトの表領域 / データベース領域を作成します。デフォルトの表領域に 300MB、一時表領域に 100MB 使用します。また、Content Server で使用される各インスタンスにデータベース・ユーザー (パスワードあり) を作成します。作成する表領域はこのユーザーが使用します。

次に、表領域に Oracle データベース・ユーザーを作成する例を示します。例に示されている SQL コマンドで、各セミコロンの後に [Enter] を押してください。SQL*Plus が実行されていることを確認してください。各ユーザーの固有の条件に合うように、パスおよびファイル情報を変更する必要があります。

```
REM Create a new temp tablespace for the temp.
REM Set the parameters to the defaults.
create temporary tablespace idc_temp
  tempfile '/u1/orant/oradata/oracle9/idc_temp.dbf'
  size 100m;
REM Create new system tablespace for the CS data.
REM Set the parameters to the defaults.
create tablespace idc_system
  datafile '/u1/orant/oradata/oracle9/idc_system.dbf'
  size 300m
  minimum extent 1M
```

```

default storage ( initial      1m
                  next         1m
                  pctincrease 0);
REM Create the Oracle user and assign tablespace
REM and temporary tablespace from the above files.
create USER db_admin IDENTIFIED by db_admin
        temporary tablespace idc_temp
        default tablespace idc_system
        quota unlimited on idc_system;

```

コンテンツ・サーバーには、サポートされるコンポーネントのすべての機能を使用するために必要な最小限の権限のセットがあります。これらの権限によって、データベースの全文索引付けを行うことができます。ただし、全文索引付けオプションの使用を選択しない場合でも、これらの権限は必要です。これらの権限の管理を容易にするには、**stellent** という名前のロールを作成して権限を直接付与することをお勧めします。

[CS-Install]/database/oracle/admin ディレクトリのスクリプト・ファイル **stellentrole.sql** を実行すると、**stellent** ロールへの適切な権限の付与が簡単に行えます。

- デフォルトのロールバック・セグメントへの変更には、要件はありません。
- **Content Server** アプリケーションでは、Oracle 一時領域を最大 100MB まで使用できますが、通常は 25MB までです。
- **Content Server** では、挿入、更新または削除で各トランザクションが発生するたびにコミットされます。
- UTF-8 で実行されている **Content Server** では、Oracle 10g ALT 32 UTF-8 エンコーディングがサポートされています。
- 必須ではありませんが、ドキュメントが 500,000 を上回る場合は、データおよび索引に別々の表領域を設定することをお勧めします。問合せが実行された際にパフォーマンスを最適化するには、これらの表領域を別々の物理ディスクに作成します。これにより、システムで索引と表データを同時にスキャンできます。デフォルトのスクリプトでは、個別の表領域は想定されていません。
- **Content Server** を、英語以外の言語環境をサポートするよう設定できます。その場合は、Unicode データベース、または言語固有の Windows オペレーティング・システムとデータベースを使用してください。また、次の内容を考慮してください。
 - シングルバイト言語（英語や西ヨーロッパ言語）では、デフォルトのキャラクタ・セットを使用して Oracle データベースを作成します。
 - マルチバイト言語（アジア言語）では、ネイティブのキャラクタ・セットまたは UTF-8（複数の言語をサポートする場合）を使用して Oracle データベースを作成するか、Unicode スクリプトを使用してデータベース内に Unicode 表を作成します。
- データベースに Oracle を使用する場合、コンテンツ ID はすべて大文字に変更されます。

3.5.4 Sybase

(3-6 ページの「すべてのデータベース」で説明されている一般的な考慮事項に加え、) Sybase に関する次の考慮事項にも注意してください。

- 一時およびデフォルトの表領域 / データベース領域を作成します。デフォルトの表領域に 300MB、一時表領域に 100MB 使用します。
- データベース・ユーザーにリソース権限および接続権限を付与します。
- Sybase を次のように設定する必要があります。
 - Sybase Adaptive Server がインストールされていること
 - マスター・デバイスのサイズ = 250MB
 - システム・プロシージャ・デバイスのサイズ = 300MB
 - 接続数 = コンテンツ・サーバー・ノード当たり 25 ～ 30
- Sybase をインストールしていない場合は、インストールを実行する際に「Interactive SQL」チェック・ボックスを選択してください。
- 論理ページ・サイズを 16K に設定してください (デフォルトの設定は 2K)。論理ページ・サイズを増やさないと、コンテンツ・サーバーはデータベースに長い文字列 (長い URL など) を保存できません。
- 必須ではありませんが、ドキュメントが 500,000 を上回る場合は、データおよび索引に別々の表領域を設定することをお薦めします。問合せが実行された際にパフォーマンスを最適化するには、これらの表領域を別々の物理ディスクに作成します。これにより、システムで索引と表データを同時にスキャンできます。デフォルトのスクリプトでは、個別の表領域は想定されていません。
- Sybase のメモ・フィールドの最大の長さは 255 文字です。これより長いメモ・フィールドが必要な場合には、Oracle のサポート機関に連絡してください。
- Content Server ソフトウェアのインストール前に、Sybase のシステム表を更新する必要があります。これは、Sybase データベースへの JDBC 接続性を設定するために実行する必要があります。これを行うために、Sybase 社により、JDBC 接続性パッケージの一部としてスクリプトが提供されています。このスクリプトにより、データベースが更新され、JDBC インタフェースによるデータベース情報の取得を可能にする JDBC 機能がサポートされます。スクリプト・ファイルは `sql_server15.0.sql` という名前で、各 Content Server ソフトウェア配布パッケージのディレクトリ `/Ucm/ContentServer/database/sybase/admin/150` にあります。
- JDBC 接続性を設定するには、次の手順を実行します。
 1. シェル・ウィンドウを開きます。
 2. Sybase インストール・ディレクトリの `bin` サブディレクトリ (`/u1/sybase/bin` など) に移動します。
 3. 次のパラメータを使用して、そのディレクトリで `isql.exe` を実行します。


```
isql -U sa -i [path]/database/sybase/admin/150/sql_server15.0.sql
```

ここで、`[path]` は Content Server インストール・ファイルのルート・ディレクトリへのパスです。(前述のコマンドラインは、Sybase データベースへのログイン名が `sa` でパスワードがない場合に有効です。)
 4. スクリプトの実行が終了したら、Sybase SQL Server を再起動します。
- Sybase の表を変更する権限を有効化するには、次の手順を実行します。
 1. シェル・ウィンドウを開きます。
 2. Sybase インストール・ディレクトリの `bin` サブディレクトリ (`/u1/sybase/bin` など) に移動します。

3. 次のパラメータを使用して、そのディレクトリで `isql.exe` を実行します。

```
isql -U
```

4. プロンプトでパスワードを入力します。次に、コマンド・プロンプトで、次のコードを 1 回に 1 行ずつ入力します。

```
USE Master
go
exec sp_dboption '<database_name>' , 'select into/bulkcopy/pllsort' , true
go
USE database_name
go
checkpoint
go
exit
```

5. 終了したら、Sybase SQL Server を再起動します。

```
/UCM/ContentServer/database/sybase/admin/rowlocking.sql
```

- ロック・スキームとしてデータ行を使用するように Sybase データベースを構成します。(詳細は、Sybase のドキュメントを参照してください。) デフォルトのロック・スキーム (全ページ) は、Content Server ソフトウェア配布パッケージの次のスクリプトを実行することで、データ行に変更できます。

```
/ContentServer/database/sybase/admin/rowlocking.sql
```

作成されるすべての表で、ロック・スキームとして、全ページではなくデータ行が使用されます。この変更は、負荷が高い状況でのデッドロックを回避するために必要です。

3.5.5 DB2

(3-6 ページの「すべてのデータベース」で説明されている一般的な考慮事項に加え、) DB2 に関する次の考慮事項にも注意してください。

- DB2 には再配布可能な JDBC ドライバがないため、Content Server ソフトウェアのインストール中に、このデータベースにドライバを手動で指定する必要があります。DB2 には、通常次の 2 つの Universal JDBC ドライバ・ファイルを使用します。

```
- [DB2_Dir]/sqllib/java/db2jcc.jar
```

```
- [DB2_Dir]/sqllib/java/db2jcc_license_XX.jar
```

XX はプラットフォームを表す 2 文字のコードです (通常、UNIX は「CU」です)。

Content Server がインストールされているマシンのディレクトリに .jar ファイルをコピーします。インストール時に JDBC ドライバのパスを要求されたら、ライセンス・ファイルへのパス (/u1/temp/db2cc.jar;/u1/temp/db2cc_licenseCU.jar など) を指定します。各ファイルはセミコロンで区切ります。

- DB2 を全文検索および索引付け (付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」を参照) に使用する場合は、DB2 の Net Search Extender がインストールされていることを確認してください。
- DB2 データベースでは、デフォルトで、4KB のページ・サイズが使用されます。関連する一部の製品 (Collaboration Manager および Content Tracker を含む) には、32KB のページ・サイズが必要です。コンテンツ・サーバーにこれらの製品のいずれかをインストールする場合は、Content Server ソフトウェアをインストールする前に、DB2 のページ・サイズを 32KB に増加する必要があります。そうしない場合、コンテンツ・サーバーに Collaboration Manager または Content Tracker をインストールする前に、コンテンツ・サーバーの表を削除し、32KB のページ・サイズを使用して再作成する必要があります。これにより、データベース表にすでに存在するすべてのデータが削除されるため、データベース表を削除する前にデータを適切にバックアップしてください。表を再作成した後に、データをリストアできます。

- DB2 では、データベース・フィールドの削除はサポートされていません。表からフィールドが削除された場合は、データベース表のコンテンツ全体を一時表にダンプする必要があります。その後、表を再作成して、データを新しいデータベース表にダンプしなおす必要があります。表の索引は再作成できません。つまり、構成マネージャを使用して Content Server のデータベース表にカスタムのメタデータ・フィールドを追加し、任意の時点でそのフィールドを削除すると、カスタム・フィールドが削除されたフィールドに関連していない場合でも、そのデータベース表のカスタム・フィールドの索引がデータベースから削除されます。

3.6 検索ソリューション

Content Server 10gR3 でサポートされている検索ソリューションに関する次の考慮事項に注意してください。

- Content Server 10gR3 で使用可能な検索ソリューションの詳細は、2-10 ページの「[検索ソリューション](#)」を参照してください。
- データベースの検索および索引付けに関連する考慮事項の詳細は、3-6 ページの「[すべてのデータベース](#)」を参照してください。
- 全文検索および索引付け用にデータベースを設定する方法の詳細は、[付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」](#)を参照してください。
- Verity を使用した旧リリースの Content Server から Content Server 10gR3 にアップグレードする場合、10gR3 へのアップグレード後も Verity 検索エンジンは機能し続けます。Content Server インスタンスのアップグレード後に、データベースの検索と索引付けを切り替える場合は、6-8 ページの「[Verity からデータベースの検索 / 索引付けへの移行](#)」を参照してください。

3.7 JDBC ドライバおよび設定

Content Server がデータベースに接続して対話するには、JDBC ドライバが必要です。一部のデータベース用にデフォルトの JDBC ドライバが用意されていますが、カスタム JDBC ドライバを選択することもできます。独自の JDBC ドライバを指定する必要があるデータベースもあります。Content Server で使用されるデータベースによって、JDBC の要件およびデフォルトは異なります。

- [Oracle](#)
- [Sybase](#)
- [SQL Server](#)
- [DB2](#)

3.7.1 Oracle

次のデフォルト JDBC ドライバ設定が、Oracle に使用されます。

- JDBC ドライバのクラス名 : `oracle.jdbc.driver.OracleDriver`
- JDBC ドライバのインストール元 : `/packages/allplatform/oracle_jdbc/10.2.0.4.0/ojdbc14.jar`
- JDBC ドライバのインストール先 : `[CS-Install]/shared/classes/ojdbc14.jar`

Content Server ソフトウェアのインストール時に、カスタム JDBC ドライバを使用するよう選択できます。

3.7.2 Sybase

次のデフォルト JDBC ドライバ設定が、Sybase に使用されます。

- JDBC ドライバのクラス名 : `com.sybase.jdbc3.jdbc.SybDriver`
- JDBC ドライバのインストール元 : `/packages/allplatform/sybase_jdbc/jconn_6.0.5/jconn3.jar`
- JDBC ドライバのインストール先 : `[CS-Install]/shared/classes/ojdbc14.jar`

Content Server ソフトウェアのインストール時に、カスタム JDBC ドライバを使用するよう選択できます。

3.7.3 SQL Server

Content Server ソフトウェアには、SQL Server 用の JDBC ドライバは用意されていません。ユーザー自身が JDBC ドライバを取得して、ソフトウェアのインストール中にそのファイルを使用可能にする必要があります。Java Runtime Environment (JRE) 1.4 以上のバージョンで稼働する SQL Server には、JDBC 3.0 に準拠している任意のドライバを使用できます。次に、テスト済で、Content Server と確実に連携することが検証されているドライバを示します。

- **jTDS ドライバ**: Microsoft SQL Server (2000 および 2005 の両方) 用のオープン・ソースの JDBC ドライバで、JDBC 仕様を完全に実装します。jTDS ドライバは、<http://jtds.sourceforge.net> からダウンロードできます。

Content Server のインストール時、要求に応じて次の情報を指定します。

- JDBC ドライバのクラス名 : `net.sourceforge.jtds.jdbc.Driver`
- JDBC 接続文字列 : `jdbc:jtds:sqlserver://[DB-Host]:[Port]/[DB-Name]`

3.7.4 DB2

DB2 には再配布可能な JDBC ドライバがないため、このデータベースにはドライバを手動で指定する必要があります。DB2 には、通常次の 2 つの Universal JDBC ドライバ・ファイルを使用します。

- `[DB2-Dir]/sqllib/java/db2jcc.jar`
- `[DB2-Dir]/sqllib/java/db2jcc_license_XX.jar`

ここで、XX はプラットフォームを表す 2 文字のコードです (通常、UNIX は「CU」です)。

Content Server がインストールされているマシンのディレクトリに jar ファイルをコピーします。これを、Content Server ソフトウェアのインストール時に JDBC ドライバのパスとして指定します。

3.8 Content Server の UNIX ログイン

Content Server の UNIX ログインは、Web サーバーのサーバー・ユーザー・ログインと同一にすることをお勧めします。（最低要件は、少なくとも同一グループであることです。）ログインを同一にすることで、ユーザーがオペレーティング・システムから（Content Server にチェックインされた）セキュアなドキュメントにアクセスするのを防ぐことができます。

- Content Server の UNIX ログインおよびグループを作成してメモします。
- 次の手順を実行して、UNIX ログインの Content Server ユーザー・プロファイルを作成します。

1. すべてのファイルがモード 775 で作成されるように `umask` を設定します。

```
umask 002
```

2. 使用しやすいパスを設定します。

```
set path=(/bin /usr/bin sbin /usr/sbin /usr/ccs/bin /usr/local/bin /usr/  
openwin/bin /usr/dt/bin)
```

（このすべてを 1 行に記述します。）

Content Server の UNIX ログインのホーム・ディレクトリは、Content Server のインストール中に指定したデフォルトの場所です。

3. Content Server ユーザーの環境が、特定のデータベースを使用するために適切に設定されていることを確認してください。

3.9 マスター・サーバーおよびプロキシ・サーバーのユーザー ID

次の項で説明する標準のインストール手順では、マスター・サーバーとすべてのプロキシ・サーバーで同じユーザー ID を使用します。この構成により、すべてのサーバーの起動、停止および構成を、管理サーバーで直接制御できるようになります。

ただし、各サーバーに個別にディスクが割り当てられているなど、製品以外の理由から、各コンテンツ・サーバーに異なるユーザー ID を使用する必要がある場合もあります。

マスター・サーバーおよび新しいプロキシ・サーバー用の管理サーバーをインストーラが構成するために、各プロキシ・コンテンツ・サーバーをマスター・サーバーと同じユーザー ID でインストールすることをお勧めします。インストールが完了したら、UNIX スーパーユーザーは、インストール全体をプロキシ・サーバーが実行中に使用する必要のあるユーザー ID に変更する `chown(1)` を実行できます。異なるユーザー ID で実行されているサーバーを（マスター・サーバーのユーザー ID で稼働している）管理サーバーが起動、停止または再構成するには、UNIX スーパーユーザーがファイル `admin/bin/UnixProcCtrl` を所有していて、`setuid` に設定されている必要があります。

次の例のようにすることをお勧めします。

```
% cd [Content_Server_Master_Install_Dir]/admin/bin  
% su  
Password: [Superuser_Password]  
# chown 0 UnixProcCtrl  
# chmod 4550 UnixProcCtrl  
# exit  
%  
s
```

3.10 Content Server インタフェースのアクセシビリティ

すべての製品のアクセシビリティに対するオラクル社の宣言に従い、このバージョンの Content Server ではアクセシビリティの問題に対応しています。これには次のものが含まれます。

- トップ・メニューおよびトレイ・メニューのすべてのインタフェースに、キーボードからアクセスできるようになり、スクリーン・リーダーでも見えるようになりました。この変更を実装するには、CoreUI および YahooUserInterfaceLibrary コンポーネントをインストールし、config.cfg ファイルで EnableAccessibilityMode=1 と設定してください。
- 色に依存していた必須フィールドの識別が、フィールドが必須であることを示すアスタリスク (*) によって補完されました。
- すべての表でサマリーを使用できます。
- ページが第一言語に設定されるようになりました。
- フォーム・フィールドにラベルが追加されました。
- 複数選択のオプションが、キーボードでアクセスできるようになりました。
- 「Skip to content」ナビゲーション・リンクが用意されています。
- すべての画像に alt タグを使用できるようになりました。

注意： これらすべての変更は、現時点ではコア Content Server のみです。コンポーネントはまだ準拠していない場合があります。

新規 Content Server のインストール

新規 Content Server インスタンスのインストール手順は、選択するインストール方法によって異なります。

- **コマンドライン・インストール**: このインストール方法では、Content Server ソフトウェアはテキストベースのコマンドライン・インタフェースを使用してインストールされます。
- **自動インストール**: このインストール方法では、Content Server ソフトウェアはスクリプト・ファイルを使用してインストールされます。このスクリプトは、ユーザーの操作なしでインストーラによって実行されます。

4.1 コマンドライン・インストール

このインストール方法では、新規コンテンツ・サーバーはテキストベースのコマンドライン・インタフェースを使用してインストールされます。

重要な考慮事項

次の内容に注意してください。

- このガイドのインストール手順では、Content Server を Web サーバーと同じシステムにインストールすると仮定しています。Content Server を Web サーバーとは別のコンピュータにインストールする方法の詳細は、付録 F「分離インストール」を参照してください。
- 次に説明するインストール手順では、デフォルトをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。デフォルトは、大カッコ ([]) またはアスタリスク (*) で表されています。
- インストール手順は、[Ctrl] を押しながら [C] を押すいつでも中断できます。

インストール手順

コマンドライン・インタフェースを使用して新規コンテンツ・サーバーをインストールするには、次の手順を実行します。

1. (オペレーティング・システムおよびプラットフォームに応じて) 適切な Content Server ソフトウェア配布パッケージを入手します。
 - Sun Solaris (Microsystem SPARC)
 - Sun Solaris (Intel ベースのハードウェア)
 - IBM AIX
 - HP-UX (HP9000)
 - HP-UX (Intel Itanium ハードウェア)
 - Linux (x86 ベースのハードウェア)
 - Linux (IBM eServer zSeries)
2. ソフトウェア配布パッケージを zip ファイルとして入手した場合は、そのファイルを一時的なインストール場所に解凍します。

ISO イメージをダウンロードした場合は、CD に書き込むか、インストール・ファイルにアクセスするために ISO イメージをマウントします。

ソフトウェア配布 CD がある場合は、CD または DVD ドライブに挿入します。
3. シェル・ウィンドウを開いて、適切なインストール・ディレクトリに移動します (オペレーティング・システムによって異なります)。
 - Sun Solaris (Microsystem SPARC) : /UCM/ContentServer/solaris
 - Sun Solaris (Intel ベースのハードウェア) : /UCM/ContentServer/solaris-x86
 - IBM AIX: /UCM/ContentServer/aix
 - HP-UX (HP9000) : /UCM/ContentServer/hpux
 - HP-UX (Intel Itanium ハードウェア) : /UCM/ContentServer/hpux-ia
 - Linux (x86 ベースのハードウェア) : /UCM/ContentServer/linux
 - Linux (IBM eServer zSeries) : /UCM/ContentServer/linux-s390
4. sh ./setup.sh と入力して、[Enter] を押します。

注意： インストーラにコマンドライン・パラメータを指定して、デフォルトのインストール設定を上書きできます。たとえば、デフォルトで実行される初期システム・チェックをオフにできます。詳細は、E-11 ページの「[スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド](#)」を参照してください。

注意： インストールでは、テキスト値を入力する場合、[Enter] を押すと大カッコ ([]) 内に表示されるデフォルトをそのまま使用できます。リストから選択する場合は、[Enter] を押すと、先頭にアスタリスク（デフォルト）の付いた項目を選択できます。

5. インストール手順の**言語**を選択するよう要求されます。リストから言語を選択して、[Enter] を押します。
6. **インストール・オプション**のメニューから選択できるようになりました。新規コンテンツ・サーバーをインストールするには [1] を押してから [Enter] を押します。
7. 新規コンテンツ・サーバーのターゲット・**インストール・ディレクトリ**へのフルパスの入力を要求されます。有効なインストール・ディレクトリのパスを指定するかデフォルトをそのまま使用し、準備ができたなら [Enter] を押します。まだ存在しないディレクトリを指定すると、そのディレクトリを作成するかどうかを確認されます。確認するには [1]（または [Enter]）を押します。

注意： 同じコンピュータに複数の **Content Server** インスタンスをインストールする場合は、各インスタンスに異なるディレクトリを使用する必要があります。

重要： ディレクトリ・パスに空白を含めないでください。

8. 新規コンテンツ・サーバーとともに使用する **Java 仮想マシン (JVM)** を指定するよう要求されます。[1] または [Enter] を押すと、デフォルトの JVM がインストールされます。インストールされる JVM は、オペレーティング・システムによって異なります（[第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)を参照）。[2] を押すと、カスタム JVM 1.5 を指定できます。JVM 実行可能ファイルへのフルパスを入力し、[Enter] を押します。
9. 新規コンテンツ・サーバーの**ネイティブ・ファイル・リポジトリ (Vault)** の場所を指定するよう要求されます。これは、コントリビュータによってチェックインされたネイティブ・ファイルが、**Content Server** によって格納される場所です。有効なディレクトリのパスを指定するかデフォルトをそのまま使用し、準備ができたなら [Enter] を押します。まだ存在しないディレクトリを指定すると、そのディレクトリを作成するかどうかを確認されます。確認するには [1]（または [Enter]）を押します。

重要： ディレクトリ・パスに空白を含めないでください。

10. 新規コンテンツ・サーバーの**Web で表示可能なファイル・リポジトリ (Web Layout)** の場所を指定するよう要求されます。これは、コントリビュータによってチェックインされたファイルの **Web** で表示可能なバージョンが、**Content Server** によって格納される場所です。有効なディレクトリのパスを指定するかデフォルトをそのまま使用し、準備ができたなら [Enter] を押します。まだ存在しないディレクトリを指定すると、そのディレクトリを作成するかどうかを確認されます。確認するには [1]（または [Enter]）を押します。

重要： ディレクトリ・パスに空白を含めないでください。

11. 新規コンテンツ・サーバーの**認証設定**を指定するよう要求されます。サーバーを構成し、独自の認証を（マスター・サーバーとして）管理することも、別のマスターが認証プロキシとして機能するのを許可することもできます。オプションを選択し、[Enter] を押して続行します。

注意：別のサーバー・インスタンスによる認証の管理を選択した場合、新規コンテンツ・サーバーが事実上のプロキシ・サーバー・インスタンスです。

ヒント：Content Server 10gR3 のプロキシ・サーバーは、関連するマスターと共有ディレクトリを共有しないため、旧リリースのプロキシ・サーバーとは異なります。つまり、10gR3 形式のプロキシ・サーバーは、10gR3 より前のプロキシ・サーバーよりはるかに多くのディスク領域を使用し、インストールにも長い時間がかかります。

12. 別のマスターを新規コンテンツ・サーバーの認証プロキシとして機能させる場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 13 に進みます。

新規コンテンツ・サーバーの認証を処理するマスター・サーバーへのパスを指定するよう要求されます。サーバーの完全なディレクトリ・パスを入力し、[Enter] を押して続行します。無効なパスを指定すると、パスを再度入力するよう要求されます。

13. 新規コンテンツ・サーバーを管理するために、**認証サーバー**をインストールして構成するかどうかを指定するよう要求されます。新規コンテンツ・サーバーの新しい管理サーバーを設定できます。システムにすでに管理サーバーが存在する場合は、その管理サーバーを構成して新規コンテンツ・サーバーを管理できます。管理サーバーは構成しないことを選択することも可能です。オプションを選択し、[Enter] を押して続行します。

注意：管理サーバーをインストールしないことを選択した場合は、Web ブラウザ・インタフェースを使用してリモートから管理タスクを実行することはできません。そのため、システム管理作業は、コンテンツ・サーバーを実行しているコンピュータで行う必要があります。

14. 新規コンテンツ・サーバーに既存の管理サーバーを使用する場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 15 に進みます。

新規コンテンツ・サーバーを管理する管理サーバーへのパスを指定するよう要求されます。サーバーの完全なディレクトリ・パスを入力し、[Enter] を押して続行します。既存のマスター・サーバーが検出された場合、パスはデフォルトでそのサーバーの管理サーバーに設定されます。無効なパスを指定すると、パスを再度入力するよう要求されます。

15. **Web ブラウザ実行可能ファイル**の場所を指定するよう要求されます。このブラウザは、オンライン・ヘルプの表示に使用されます (Content Server と同じコンピュータにコールされた場合)。選択したブラウザのロケーション・パスを指定するか、デフォルトをそのまま使用し、[Enter] を押します。

16. 新規コンテンツ・サーバーの**システム・ロケール**を指定するよう要求されます。システム・ロケールにより、日付 / 時間の形式、デフォルトのタイムゾーンおよびデフォルトのインタフェース言語 (ローカライズされたユーザー・インタフェースが使用可能な場合) など、コンテンツ・サーバーが言語固有の様々な問題を処理する方法が決定されます。システム・ロケールの詳細は、『Using Content Server in International Environments』を参照してください。リストからシステムのロケールを選択して、[Enter] を押します。

注意：コンテンツ・サーバー・インスタンスのシステム・ロケールは、System Properties ユーティリティを使用していつでも変更できます。

17. 新規コンテンツ・サーバーが運用される**タイムゾーン**を指定するよう要求されます。デフォルト (オペレーティング・システムのタイムゾーン設定を使用) をそのまま使用するか、世界での地域名を選択して、[Enter] を押します。

18. オペレーティング・システムのタイムゾーン設定を使用しない場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 22 に進みます。

コンテンツ・サーバーが運用されるタイムゾーンを指定するよう要求されます。リストからタイムゾーンを選択して、[Enter] を押します。表示されたリストにタイムゾーンが含まれない場合は、[m] を押して項目をさらに表示します。

19. 新規コンテンツ・サーバーの**コンテンツ・サーバーのポート番号**を入力するよう要求されます。このポートは、別の用途には使用できず、同じコンピュータ上のコンテンツ・サーバー・インスタンスごと（マスターまたはプロキシ）に一意である必要があります。ポート番号を指定するか、デフォルトをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。別のコンテンツ・サーバー・インスタンスがすでに使用しているポート番号を指定すると、ポート番号の再入力を要求されます。
20. 手順 13 で、新規コンテンツ・サーバーに別の管理サーバーを使用することを選択した場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 21 に進みます。

新規コンテンツ・サーバーの**管理サーバーのポート番号**を入力するよう要求されます。管理サーバーを使用すると、管理者は Web ブラウザ・インタフェースを使用して、コンテンツ・サーバーの多くのシステム管理タスクをリモートの場所から実行できるようになります。指定されたポートは、別の用途には使用できず、同じコンピュータ上のインスタンスごとに一意である必要があります。ポート番号を指定するか、デフォルトをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。別のコンテンツ・サーバー・インスタンスがすでに使用しているポート番号を指定すると、ポート番号の再入力を要求されます。

21. 新規コンテンツ・サーバーの**セキュリティ・フィルタ**を指定するよう要求されます。このフィルタは、コンテンツ・サーバーへのアクセスを制限するために使用されます。指定された基準に一致する IP アドレスのホストのみが、コンテンツ・サーバーへのアクセス権を付与されます。デフォルトは 127.0.0.1 (localhost) ですが、任意の数の有効な IP アドレスを追加できます。複数の IP アドレスは、パイプ記号 (|) で区切って指定できます。また、ワイルドカード (0 文字以上の長さの文字には *, 1 文字には ?) も使用できます。

例: 127.0.0.1|10.10.1.10|62.43.163.*|62.43.161.12?

次に示す製品のいずれかを使用する場合、Content Server をホスティングしているのと同じ物理コンピュータでも、着信接続のアドレス・フィルタに、これらの製品が実行されるコンピュータのネットワーク IP アドレスが含まれていることを確認する必要があります。

- Report Parser
- Content Integration Suite (CIS)
- Content Categorizer
- Inbound Refinery (IBR)
- Content Server JavaBeans (IdcServerBean、ContentServerBean、ServerBean)
- IdcCommand または IdcCommandUX を介して Content Server と通信するカスタマイズ
- ソケットを介して通信しようとするその他の Content Server インスタンス

次のような状況では、セキュリティ・フィルタに、リモート・コンピュータの IP アドレスを含める必要があります。

- Web サーバーと Content Server が異なるシステムに存在する場合（付録 F「[分離インストール](#)」を参照）。（Web サーバーの IP アドレスを追加する必要があります。）
- EJB 拡張操作がある場合。（リモート・サーバーの IP アドレスを追加する必要があります。）
- IdcCommand または IdcCommandUX ユーティリティが、Content Server とは別のシステムで使用されている場合。（Web サーバーの IP アドレスを追加する必要があります。）

その他の IP アドレスに加え、ローカル・ホストの IP アドレス (127.0.0.1) がセキュリティ・フィルタに含まれていることを確認してください。

セキュリティ・フィルタを正しく指定しないと、ルーチン機能の重大なエラーの原因になる可能性があります。

セキュリティ・フィルタでは、コンテンツ・サーバーへのブラウザのアクセスは制限されません。アクセスが制限されるのは、前述の技術を使用している場合のみです。

Content Server ソフトウェアをインストールしたら、System Properties の「Server」タブで、セキュリティ・フィルタをいつでも変更できます。

重要：これらの製品が実行されるコンピュータの実際のネットワーク IP アドレスが指定されていることを確認してください。製品が Content Server と同じコンピュータで実行されている場合は、ローカル・ホストの IP アドレス (127.0.0.1) では不十分です。

準備ができれば、[Enter] を押します。

22. 新規コンテンツ・サーバーの **URL 接頭辞 (Web サーバーの相対ルート)** を指定するように要求されます。Web サーバーの相対ルートを指定するかデフォルトをそのまま使用し、準備ができれば [Enter] を押します。別のコンテンツ・サーバー・インスタンスがすでに使用している URL 接頭辞を指定すると、URL 接頭辞の再入力を要求されます。

この URL 接頭辞は、インストール内の weblayout ディレクトリのコンテンツを参照する HTML ページを生成する際に使用されます。Web サーバー内でこの接頭辞を、weblayout ディレクトリの物理的な場所にマッピングする必要があります。

複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスがあるインストールの場合は、サーバー・インスタンスごとに異なる URL 接頭辞 (Web サーバーの相対ルート) を使用してください。

重要：Enterprise Search を使用する場合は、各コンテンツ・サーバー・インスタンスに異なる Web ルート (Server1、Server2 など) を使用してください。そうしない場合、一意の相対 Web ルート (HttpRelativeWebRoot 値) を割り当てるために、各コンテンツ・サーバー・インスタンスの構成を変更する必要があります。すべてのコンテンツ・サーバー・インスタンスの Web ルート・ディレクトリの名前が同一の場合、Enterprise Search は機能しません。すでにコンテンツ・サーバー・インスタンスをインストール済で、その Web ルートを変更する必要がある場合には、Oracle サポート・サービスに連絡することをお勧めします。

23. 新規コンテンツ・サーバーの **ローカル・メール・サーバー** の名前を指定するように要求されます。mail.companyname.com という書式を使用して名前を指定します。コンテンツ・サーバーはこのシステムに接続して電子メールを配信します。準備ができれば、[Enter] を押します。
24. Content Server の **システム管理者の電子メール・アドレス** を指定するように要求されます。電子メールを指定し、準備ができれば [Enter] を押します。
25. 新規コンテンツ・サーバーの **Web サーバーの HTTP アドレス** を指定するように要求されます。Web サーバーの HTTP アドレス (web.company.com など) を指定するかデフォルト (検出されたコンピュータ名) をそのまま使用し、準備ができれば [Enter] を押します。

ここで指定したアドレスは、HTML ページの生成時に使用されます。たとえば、web.company.com は、http://web.company.com/root という URL を参照するためにインストールで使用できます (ここで root は Web サーバーの相対ルートです。手順 22 を参照)。

重要：Web サーバーが 80 以外のポートで稼働している場合、HTTP アドレスにコロンとポート番号を追加する必要があります (web.company.com:81 など)。

26. インストール中の新規コンテンツ・サーバー・インスタンスの**名前**を指定するよう要求されます。この名前は、エンタープライズ全体で一意である必要があります。文字、数字および下線以外の記号を含むことはできません。名前を指定するかデフォルトをそのまま使用し、準備ができたなら [Enter] を押します。
27. 新規コンテンツ・サーバー・インスタンスの**ショート・ラベル**を指定するよう要求されます (server_2 など)。このラベルは、Web ページ上でこのインスタンスを識別するために使用されます。ラベルの最大文字数は 12 です。ラベルを指定し、準備ができたなら [Enter] を押します。
28. 新規コンテンツ・サーバー・インスタンスの**詳細**を指定するよう要求されます。説明 (Content Server server_2 など) を指定し、準備ができたなら [Enter] を押します。
29. 新規コンテンツ・サーバーとともに使用する **Web サーバー**を指定するよう要求されます。サポートされている Web サーバーのリストが表示されます。Web サーバーを手動で構成することもできます。リストからオプションを選択し、[Enter] を押して続行します。

注意： IBM AIX では、Sun ONE はオプションとして使用できません。

注意： IBM HTTP Server を使用する場合は、選択します。どの Web サーバーでも、インストール後のタスク (第 5 章「インストール後のタスクおよび考慮事項」を参照) を必ず実行してください。

Web サーバーを手動で構成する場合、手動構成プロセスの詳細は付録 A「Web サーバーの設定」を参照してください。

30. 手順 29 で、Web サーバーとして Sun ONE を選択した場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 31 に進みます。
新規コンテンツ・サーバーとともに使用する Sun Web サーバーの**完全なディレクトリ・パス**を指定するよう要求されます。Web サーバーの完全なディレクトリ・パスを入力し、[Enter] を押して続行します。

注意： 指定するディレクトリには、ファイル obj.conf および magnus.conf を含む config という名前のサブディレクトリが含まれている必要があります。インストーラにより、インストール・ディレクトリの install サブディレクトリに、新しい obj.conf および magnus.conf ファイルが作成されます。Web サーバーの config ディレクトリにある古い obj.conf および magnus.conf を [Install-Dir]/install/ ディレクトリの obj.conf および magnus.conf と置き換えます。

31. 新規コンテンツ・サーバーとともに使用する**データベース**を指定するよう要求されます。サポートされているデータベースのリストが表示されます。「Oracle」、「SQL Server (2000 or 2005)」、「Sybase」または「DB2」から選択できます。また、カスタム JDBC 設定を行うか、データベース構成を完全にスキップして手動で設定するかを選択できます (付録 B「データベースの設定」を参照)。

リストからオプションを選択し、[Enter] を押して続行します。

32. 手順 31 で Oracle、Sybase または DB2 を選択した場合は、手順 33 に進みます。

手順 31 で SQL Server を選択した場合は、手順 34 に進みます。

手順 31 でカスタム JDBC 設定を行うことを選択した場合は、手順 34 に進みます。

手順 31 でデータベース構成をスキップすることを選択した場合は、手順 41 に進みます。

33. **JDBC 設定を手動で構成**するかどうかを指定するよう要求されます (JDBC ドライバ・クラス名や JDBC 接続文字列など)。[1] (はい) または [2] (いいえ) を押し、[Enter] を押して続行します。

ソフトウェアに用意されているデフォルトのドライバ以外のデータベース JDBC ドライバを使用する必要がある場合は、JDBC 設定を手動で構成する必要があります (3-13 ページの「[JDBC ドライバおよび設定](#)」を参照)。データベースにデフォルトの JDBC ドライバを使用する場合は、通常 [2] (いいえ) を選択します。

「はい」を選択した場合、手順 34 に進みます。「いいえ」を選択した場合、手順 35 に進みます。

34. **JDBC ドライバ・クラス名**を指定するよう要求されます。ドライバ・クラス名を入力して [Enter] を押すか、デフォルトが提供されていて、それをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。

JDBC 接続文字列を指定するよう要求されます。接続文字列を入力し、準備ができたなら [Enter] を押します。

注意： 様々なデータベースに対するデフォルト JDBC ドライバおよびサポートされている JDBC ドライバについては、3-13 ページの「[JDBC ドライバおよび設定](#)」を参照してください。

35. データベース設定を指定するよう要求されます。これより前のデータベース構成手順での選択内容によっては、表示されないプロンプトもあります。たとえば、カスタムの JDBC 接続文字列を指定した場合、データベース名、サーバー名やポート番号が要求されないこともあります (接続文字列にこの情報が含まれているため)。

- **データベース・サーバー・ホスト名**を指定するよう要求されます。サーバー名を入力するか、デフォルトが提供されていて、それをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。
- **データベースのポート番号**を指定するよう要求されます。ポート番号を入力するか、デフォルトが提供されていて、それをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。
- データベースにログインするために新規コンテンツ・サーバーによって使用される **データベース・ユーザー名**を指定するよう要求されます。データベース・ユーザー名を入力するか、デフォルトが提供されていて、それをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。
- データベースにログインするために新規コンテンツ・サーバーによって使用される **データベース・ユーザー・パスワード**を指定するよう要求されます。データベース・パスワードを入力し、[Enter] を押して続行します。
- **データベースまたはインスタンス名**を指定するよう要求されます。データベースまたはインスタンス名を入力するか、デフォルトが提供されていて、それをそのまま使用する場合は [Enter] を押します。

36. 手順 31 でデータベースとして Oracle または Sybase を選択したか、カスタム JDBC 設定を指定することを選択した場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 37 に進みます。

JVM を構成して**特定の jar ファイル内の JDBC ドライバを検出**するかどうかを指定するよう要求されます。[1] (はい) または [2] (いいえ) を押し、[Enter] を押して続行します。

37. 手順 31 でデータベースとして SQL Server または DB2 を選択したか、手順 36 で特定の JDBC ドライバ jar ファイルを指定することを選択した場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 39 に進みます。

JDBC ドライバの jar ファイルのパスを指定するよう要求されます。jar ファイル名を含むフルパスを入力し、準備ができたなら [Enter] を押します。次に例を示します。

```
/u1/apps/jtds/jtds.jar
```

注意：パスのディレクトリを区切るには、スラッシュ (/) を使用してください。また、複数のファイルを指定する必要がある場合は、`[Path1]/[File1];[Path2]/[File2]` のように、セミコロンを使用して区切ります。

Content Server ソフトウェアには、SQL Server および DB2 用のデフォルトの JDBC ドライバは用意されていません。このため、これらのデータベースの場合は常に、手動で指定する必要があります。SQL Server および DB2 に対してサポートされている JDBC ドライバについては、3-13 ページの「[JDBC ドライバおよび設定](#)」を参照してください。

38. **JDBC ドライバ・ファイルをコピーする必要があるかどうか**を指定するよう要求されます。
[1] (はい) または [2] (いいえ) を押し、[Enter] を押して続行します。
- 「はい」を選択した場合、JDBC ドライバ・ファイルが `[CS-Install]/shared/classes` にコピーされます。
39. インストーラによる**データベース表の自動作成の試行が必要かどうか**を指定するよう要求されます。
[1] (はい) または [2] (いいえ) を押し、[Enter] を押して続行します。
40. データベースで **Unicode テキスト・フィールド (UCS-2)** を使用するかどうかを指定するよう要求されます。使用しないよう選択した場合、ネイティブのデータベース・フィールド・エンコーディングが使用されます。
[1] (はい) または [2] (いいえ) を押し、[Enter] を押して続行します。

Content Server でアジア言語または双方向言語（日本語、韓国語、アラビア語およびヘブライ語など）のコンテンツを処理する必要がある場合、または将来的にそうなる場合には、一般的にデータベースの Unicode テキスト・フィールドが推奨されます。Unicode テキスト・フィールドを使用すると、データベースでほぼすべての言語を処理できるため、柔軟性が高まります。しかし、各文字が、1 バイトではなく 2 バイトで表されるため、データベースのサイズが 2 倍になります。

ネイティブ・データベース・エンコーディングを選択した場合、コンテンツ・サーバー用に作成されたデータベースの列には、`varchar` データ型が使用されます。Unicode エンコーディングを選択した場合、`nvarchar` データ型が使用されます。

Unicode エンコーディングを選択しても、データベースの言語エンコーディングまたはキャラクタ・セットに影響はありません。影響を受けるのは、コンテンツ・サーバー用に作成されたデータベース列のデータ型のみです（`VARCHAR` ではなく `NVARCHAR`）。また、Content Server データベースのデータ・エンコーディングは、エンタープライズ・データベース全体には適用されず、そのデータベース内の Content Server の予約済表領域のみに適用されます。

41. 新規コンテンツ・サーバーとともに有効化する必要のあるコンポーネントを指定するよう要求されます。これらのコンポーネントにより、基本のコンテンツ・サーバーに機能が追加されます。次のコンポーネントから選択できます。
- ContentFolios
 - Folders_g
 - LinkManager8
 - OracleTextSearch
 - ThreadedDiscussions

注意：これらの各コンポーネントの詳細は、[付録 C「Content Server コンポーネント」](#)を参照してください。

これらのオプションのコンポーネント以外に、他の多くのコンポーネントが常に、Content Server ソフトウェアとともにインストールされます。詳細は、[付録 C「Content Server コンポーネント」](#)を参照してください。

関連付けられた番号を入力すると、コンポーネントのインストール・ステータスを切り替えられます。現在選択されていないコンポーネントがインストール用にマークされ、その逆も行われます。複数のコンポーネントは、1,3 のようにカンマを使用して区切ります。これらのコンポーネントのそれぞれのインストールの選択は、逆から行われます。すべてのコンポーネントを選択解除するには [0] を入力します。

完了したら f (終了) と入力し、[Enter] を押して続行します。

注意： コンポーネントの zip ファイルは、すべてソフトウェア配布パッケージの `packages/allplatform` ディレクトリにあります。この時点で特定のコンポーネントをインストールしないことを選択しても、後から通常の方法を使用してこの場所からいつでもインストールできます。コンポーネントのインストールおよび有効化の詳細は、Content Server の管理ガイドを参照してください。

42. インストーラにより、多数のインストール前チェックが実行されます。エラーまたは警告があると報告されます。インストール設定が確認され、インストールを続行するか中断するか、または構成の変更を希望するかどうかを確認されます。構成を再確認することもできます。これにより、続行する前に報告されたエラーを修正できます。準備ができたらメニュー・オプションを選択し、[Enter] を押して続行します。

インストールの続行を選択すると、すべてのファイルがコピーされ、構成設定が行われます。このプロセスの間に、現在実行されているタスクの簡単な説明だけでなく、完了した割合がメッセージ行に表示されます。

4.2 自動インストール

Content Server では、自動インストールがサポートされています。基本的には、特別なスクリプト・ファイルをパラメータとして使用したコマンドライン・インストールです。これにより、管理者は、(インストール・プロセスの開始を除き) ユーザー操作なしで、まったく同一のインストール設定を使用して、Content Server ソフトウェアを複数のコンピュータにインストールして設定できます。

次に、自動インストールに重要な項目を示します。

- 4-10 ページの「スクリプト・ファイルの作成」
- 4-11 ページの「自動インストールの実行」

4.2.1 スクリプト・ファイルの作成

自動インストールを実行するには、必要なインストール・パラメータをすべて含むスクリプト・ファイルが必要です。このファイルを作成する最も簡単な方法は、Content Server の新規インストールを最後の確認の手順まですべて実行することです。この先に進まないでください。インストールを中断して、`[CS-Install]/install` ディレクトリに移動してください。インストーラにより、Content Server ソフトウェアのインストールに使用するスクリプト・ファイルが生成されています。生成されたスクリプト・ファイルは、`[date]-[type].txt` という名前です。ここで、`[date]` は現在の日付、`[type]` はインストール・タイプ (`new`、`update`、`proxy`) で、`2008-04-21-new.txt` のようになります。日付が常に YYYY-MM-DD という形式であることに注意してください。

スクリプト・ファイルが作成されたら、簡単に変更して再利用できます。

注意： スクリプト・ファイルの作成および変更の詳細は、付録 E「インストール・スクリプト・ファイル」を参照してください。

4.2.2 自動インストールの実行

自動インストールを使用して新規コンテンツ・サーバーをインストールするには、次の手順を実行します。

1. (オペレーティング・システムおよびプラットフォームに応じて) 適切な Content Server ソフトウェア配布パッケージを入手します。

- Sun Solaris (Microsystem SPARC)
- Sun Solaris (Intel ベースのハードウェア)
- IBM AIX
- HP-UX (HP9000)
- HP-UX (Intel Itanium ハードウェア)
- Linux (x86 ベースのハードウェア)
- Linux (IBM eServer zSeries)

2. ソフトウェア配布パッケージを zip ファイルとして入手した場合は、そのファイルを一時的なインストール場所に解凍します。

ISO イメージをダウンロードした場合は、CD に書き込むか、インストール・ファイルにアクセスするために ISO イメージをマウントします。

ソフトウェア配布 CD がある場合は、CD または DVD ドライブに挿入します。

3. シェル・ウィンドウを開いて、適切なインストール・ディレクトリに移動します (オペレーティング・システムによって異なります)。

- Sun Solaris (Microsystem SPARC) : /UCM/ContentServer/solaris
- Sun Solaris (Intel ベースのハードウェア) : /UCM/ContentServer/solaris-x86
- IBM AIX: /UCM/ContentServer/aix
- HP-UX (HP9000) : /UCM/ContentServer/hpux
- HP-UX (Intel Itanium ハードウェア) : /UCM/ContentServer/hpux-ia
- Linux (x86 ベースのハードウェア) : /UCM/ContentServer/linux
- Linux (IBM eServer zSeries) : /UCM/ContentServer/linux-s390

4. 次のように、sh ./setup.sh の後に、使用するスクリプト・ファイルの名前 (必要な場合はフルパスを含む) を入力します。

```
sh ./setup.sh /ul/scripts/install.txt
```

注意： インストーラにコマンドライン・パラメータを指定して、デフォルトのインストール設定を上書きすることもできます。たとえば、デフォルトで実行される初期システム・チェックをオフにできます。使用可能なコマンドライン・パラメータの詳細は、[付録 E 「インストール・スクリプト・ファイル」](#) を参照してください。

5. [Enter] を押して、自動インストールを開始します。

6. インストーラにより、スクリプト・ファイルが分析されます。致命的なエラーが検出されなければ、インストールのスクリプト・ファイルに含まれるパラメータに基づいて、ソフトウェアのインストールが開始されます。このプロセスの間に、現在実行されているタスクの簡単な説明だけでなく、完了した内容の割合がメッセージ行に表示されます。

最初のインストール前チェックの後に発生したエラーは、`[Master_Dir]/install` ディレクトリにある `log.txt` というログ・ファイルに記録されます。このファイルは、`vi` などの任意のテキスト・エディタを使用して、開いて編集できるプレーン・テキスト・ファイルです。

注意： 使用可能なスクリプト・ファイル・エントリを含む、インストールのスクリプト・ファイルの詳細は、[付録 E「インストール・スクリプト・ファイル」](#) を参照してください。

インストール後のタスクおよび考慮事項

選択したインストール・オプションによって、Content Server ソフトウェアのインストール後に実行する必要があるタスクがあります。それらは次の項目に関連しています。

- 5-2 ページの「インストール・ログ・ファイル」
- 5-2 ページの「日付書式」
- 5-2 ページの「タイムゾーン」
- 5-3 ページの「各国語環境」
- 5-4 ページの「ローカライズ・ユーザー・インタフェース」
- 5-5 ページの「検索ソリューションの設定」
- 5-5 ページの「アクティブなウィルス・スキャンおよび Content Server」
- 5-5 ページの「Web サーバーの構成」
- 5-6 ページの「データベースの構成」
- 5-7 ページの「7.x からアップグレードした場合の従来の変数定義」

5.1 インストール・ログ・ファイル

Content Server ソフトウェアのインストール後、`[CS-Install]/install/` ディレクトリ (`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) にあるインストール・ログ・ファイル (`log.txt`) を確認することをお勧めします。インストール中にエラーまたは警告が発生した場合には、このファイルに記録されます。また、インストール後に手動での実行が必要な手順がある場合には、それらの手順もこのログ・ファイルに記録されています。通常、`Obj.conf` ファイルは手動でコピーする必要があります。(Sun ONE を使用している場合は、ファイル `magnus.conf` もコピーする必要があります。) ログ・ファイルにより、ソースおよびターゲット・ディレクトリの両方が指定されます。

5.2 日付書式

デフォルトの英語 (米国) ロケールでは、年 (yy) を表すのに 2 桁が使用され、1969 から 2068 までの年と解釈されます。つまり、65 は、1965 ではなく、2065 とみなされます。英語 (米国) ロケールで 1969 より前の年を正確に解釈させるには、4 桁を使用して年を表す (yyyy) よう英語 (米国) ロケールのデフォルトの日付書式を変更する必要があります。

注意： この問題は、年にすでに 4 桁の数値を使用している英語 (英国) ロケールでは発生しません。

デフォルトの英語 (米国) の日付書式を変更するには、次のようにします。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの `/bin` サブディレクトリ内にある `SystemProperties` ユーティリティを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Localization」タブを開きます。
3. ロケールのリストで「English-US」エントリを選択して、「Edit」をクリックします。
「Configure Locale」ダイアログが表示されます。
4. 年に 2 桁 (yy) ではなく、4 桁の数値 (yyyy) を使用するよう日付書式を変更します。
5. 編集が終了したら、「OK」をクリックして「Configure Locale」ダイアログを閉じます。
6. 「OK」をクリックして変更内容を適用し、System Properties を終了します。
7. Content Server を停止して再起動します (再起動しないと変更内容が反映されません)。

5.3 タイムゾーン

Content Server ソフトウェアのインストール中に、選択したシステム・ロケールのデフォルトのタイムゾーンを使用することを指定できます。その場合は、インストーラにより、オペレーティング・システムのタイムゾーンの検出が自動的に試行され、それに応じて Content Server のタイムゾーンが設定されます。特定のシナリオでは、オペレーティング・システムのタイムゾーンが認識されない場合があります。その場合、タイムゾーンは、グリニッジ標準時 (GMT) と同じ UTC (Universal Time Coordinated) タイムゾーンに設定されます。

タイムゾーンは手動で設定する必要があります。これを実行するには、次のようにします。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの `/bin` サブディレクトリ内にある `SystemProperties` ユーティリティを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Server」タブを開きます。
3. 「System Timezone」ドロップダウン・リストから、現在のコンテンツ・サーバー・インスタンスに使用するタイムゾーンを選択します。
4. 「OK」をクリックして変更内容を適用し、System Properties を終了します。

5. Content Server を停止して再起動します（再起動しないと変更内容が反映されません）。

5.4 各国語環境

Content Server では、次のように各国語環境が完全にサポートされます。

- 英語版以外（アジア言語を含む）のオペレーティング・システムにインストールできます。
- 多様な言語のコンテンツを処理および格納できます。
- 多様な言語のコンテンツの全文索引を作成できます。
- ローカライズされたエンドユーザー環境を提供するように設定できます。

コンテンツ・サーバーの設定と多言語の要件によって異なりますが、場合によっては、次のようにデフォルト・インストール設定の一部を変更する必要があります。

- コンテンツ・サーバーの**システム・ロケール**。言語固有の多くの問題（日付や日時の書式、デフォルト・タイムゾーン、ソート順序、デフォルトのインタフェース言語など）がコンテンツ・サーバーによって処理される方法を定義します。
- コンテンツ・サーバーの **Verity ロケール**（該当する場合）。これは、テキスト内の言語固有の文字を正しく索引付けするために使用されます。

UTF8 ファイル・エンコーディング

7 ビット ASCII 以外の文字は、ファイル名には使用できますが、ユーザー名ではサポートされていません。Content Server インストール・プロセスでは、現在、ファイル・エンコーディングが UTF8 に自動的に設定されます。7 ビット ASCII 以外の文字をユーザー名に使用する場合、Cookie ログインを簡単にする ExtranetLook コンポーネントを使用する必要があります。

ファイル・エンコーディングを UTF8 以外に設定することは、構成としてサポートされていません。このため、7 ビット ASCII 以外の文字をユーザー名に使用するには、ExtranetLook コンポーネントと Cookie ログインをお勧めします。

国際的な多言語環境にコンテンツ管理システムをデプロイするための詳細は、『Using Content Server in International Environments』を参照してください。このドキュメントは Content Server 製品ドキュメントに含まれており、オンライン・ヘルプを使用して参照できます。また、Content Server ドキュメント・パッケージに PDF ファイル (/integrator/internat_environments_10en.pdf) があります。

重要：コンテンツ・サーバーの構成の変更は、コンテンツをチェックインする前に行うことを強くお勧めします。コンテンツがチェックインされてから変更を行うと、検索索引を再構築することが必要になります。これは、チェックイン済のコンテンツ・アイテムの数によって異なりますが、非常に時間がかかる可能性があります。

5.5 ローカライズ・ユーザー・インタフェース

Content Server 10gR3 では、次のエンドユーザー・インタフェース言語がサポートされています。

- 英語
- ドイツ語 (Deutsch)
- フランス語 (Français)
- オランダ語 (Nederlands)
- スペイン語 (Español)
- イタリア語 (Italiano)
- 日本語
- 韓国語
- 中国語 (繁体字および簡体字)
- タイ語
- アラビア語

注意： 前述の言語のうち、Content Server 環境の管理セクションがローカライズされていない言語もあります。

ユーザー・インタフェース言語は、オペレーティング・システムのロケールに合わせて自動的に設定されます。エンド・ユーザーが、ユーザー・プロファイル・ページからユーザー・インタフェース言語を選択することもできます。Content Server ユーザー・インタフェース言語に関係なく、ソフトウェアのヘルプは英語であることに注意してください。

Content Server 10gR3 のローカライズ・ユーザー・インタフェースを提供するために必要なすべてのファイルは、Content Server ソフトウェアと一緒にインストールされます。エンドユーザーがユーザー・プロファイルで言語を選択するためには、システム管理者が、その言語を使用できるように前もって明示的に設定する必要があります。ユーザー・インタフェース言語を使用可能にするには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Localization」タブを開きます。
3. ロケールのリストから、エンドユーザーが使用できるようにするユーザー・インタフェース言語を選択し、「**Enable**」をクリックします。複数のロケールを選択するには、[Shift] キー（連続して選択）または [Ctrl] キー（連続しないで選択）を押しながらロケール・エントリをクリックします。
4. 終了したら、「**OK**」をクリックして設定を適用し、System Properties ユーティリティを終了します。
5. コンテンツ・サーバーの各インスタンスを再起動します。

これで、エンドユーザーが、ユーザー・プロファイル・ページで必要なユーザー・インタフェース言語を選択できるようになります。

注意：日本語オペレーティング・システムにインストールされた Content Server でロケールを有効にすると、インタフェースが英語で表示される場合があります。これを修正するには、標準のテキスト・エディタで config.cfg ファイルを開き、変数 SystemLocale=Japanese を追加します。config.cfg ファイルは、<install_dir>/<instance_dir>/config ディレクトリにあります。

5.6 検索ソリューションの設定

Content Server 10gR3 は、デフォルトで、検索および索引付け機能を提供するためにデータベースを使用するように設定されます。そのまま利用可能なデータベース構成により、メタデータのみの検索および索引付けが提供されます。ただし、SQL Server および Oracle のデフォルト構成を変更して、全文検索および索引付けを有効にすることもできます（付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」を参照）。Sybase および DB2 では、メタデータ検索および索引付けのみがサポートされています。

Content Server と異なる検索ソリューションの統合を可能にするアドオン（Verity や FAST など）を使用できます。サポートされている検索ソリューションごとに、個別の統合ドキュメントが使用可能です。

5.7 アクティブなウィルス・スキャンおよび Content Server

Content Server の運用をスムーズにするために、次に示す Content Server ディレクトリをアクティブなウィルス・スキャンから除外することをお勧めします。

- [CS-Install]/weblayout/
- [CS-Install]/shared/
- [CS-Install]/data/
- [CS-Install]/search/

重要： [CS-Install]/vault/~temp/ ディレクトリは最も重要なディレクトリであるため、スキャンから除外しないでください。

これらのディレクトリのいずれかをスキャンする必要がある場合は、それらのディレクトリを積極的にスキャンするよりも、オフピーク時に Content Server コンピュータで物理ディスク・スキャンを実行することをお勧めします。また、最良の結果を出すために、ローカル・ドライブのスキャンにウィルス対策プログラムを使用する必要があります。

5.8 Web サーバーの構成

Content Server ソフトウェアのインストール中に選択した Web サーバーおよびインストールの選択に応じて、Content Server とともに使用する Web サーバーを設定および構成するための多くのタスクを実行する必要があります。

- [Web サーバーの手動構成](#)
- [Sun Web サーバーの構成ファイル](#)

5.8.1 Web サーバーの手動構成

Content Server ソフトウェアのインストール中に Web サーバーの手動構成を選択した場合は、Content Server とともに使用する Web サーバーを設定および構成するための多くのタスクを実行する必要があります。詳細は、付録 A「Web サーバーの設定」を参照してください。

5.8.2 Sun Web サーバーの構成ファイル

Content Server ソフトウェアのインストール中に、Sun Web サーバーの自動構成を選択した場合、構成ファイルは変更されています。変更内容を反映する前にそれらを適用する必要があります。

Sun Web サーバーに変更内容を適用するには、次の手順を実行します。

1. Administer Web Server ユーティリティを起動します。
2. ユーザー名およびパスワードを入力します。
3. サーバーを選択し、「**Manage**」をクリックします。
4. 構成ファイルに変更が行われたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。
5. 画面の右上隅に配置されている「**Apply**」をクリックします。
6. 「Apply Changes」ページが表示されます。「**Load Configuration Files**」をクリックします。
7. 最近の変更内容がロードされていることを確認するメッセージが表示されます。
8. 「**OK**」をクリックします。

ブラウザを閉じます。

5.9 データベースの構成

Content Server ソフトウェアのインストール中に選択したデータベースおよびインストールの選択に応じて、Content Server とともに使用するデータベースを設定および構成するための多くのタスクを実行する必要があります。

- [データベースの手動構成](#)
- [Content Server より前に SQL Server を起動](#)
- [メタデータ検索 / 索引付けを行うための Sybase の準備](#)
- [全文検索 / 索引付けを行うためのデータベースの設定](#)

5.9.1 データベースの手動構成

Content Server ソフトウェアのインストール中にデータベースの手動構成を選択した場合は、Content Server とともに使用するデータベースを設定および構成するための多くのタスクを実行する必要があります。詳細は、[付録 B 「データベースの設定」](#)を参照してください。

5.9.2 Content Server より前に SQL Server を起動

SQL Server は、Content Server より前に起動する必要があります。Content Server のインストール中にサービスの依存性を指定しなかった場合は、ファイル `[CS-Install]\bin\IcdServerNT.exe` ([CS-Install] はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) を実行してください。これにより、正しい順序でのサーバーの起動に必要なサービスが追加されます。

構文は次のとおりです。

```
IcdServerNT -dependent [Name_of_Dependent_NT_Service]
```

Content Server および SQL Server が同じシステムにインストールされている場合は、次のタスクを実行します。

1. コンソール・ウィンドウを開始して、ディレクトリ `[CS-Install]\bin` ([CS-Install] はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) に移動します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
IcdServerNT -dependent MSSQLServer
```

このコマンドを使用すると、サービスの起動タイプとして **automatic** を有効化することにより、起動プロセス中に **Content Server** を起動できます。

注意： **-dependent** オプションを、**-install** オプションと組み合わせて使用することはできません。サービス名を指定せずに **-dependent** オプションを使用すると、現在の依存性リストが消去されます。

5.9.3 メタデータ検索 / 索引付けを行うための Sybase の準備

Content Server のインストール中にデータベースとして Sybase を選択した場合、メタデータ検索および索引付けを提供するよう構成されています。Sybase では、全文索引付けはサポートされていません。Content Server ソフトウェアのインストール後、**rowlocking.sql** スクリプトの実行 (**isql.exe** を使用) がまだの場合は実行します。これにより、Sybase データベースが表ロックから行ロックに変換され、発生する可能性のあるデッドロックの問題が少なくなります。このスクリプトは、**[CS-Install]/database/sybase/admin** (**[CS-Install]** は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) にあります。

5.9.4 全文検索 / 索引付けを行うためのデータベースの設定

Content Server 10gR3 は、デフォルトで、検索および索引付け機能を提供するためにデータベースを使用するように設定されます。そのまま利用可能なデータベース構成により、メタデータのみの検索および索引付けが提供されます。ただし、SQL Server および Oracle のデフォルト構成を変更して、全文検索および索引付けを有効にすることもできます。これには、多くの手動構成手順が必要です。詳細は、[付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」](#)を参照してください。

注意： Sybase および DB2 では、メタデータ検索および索引付けのみがサポートされています。

5.10 7.x からアップグレードした場合の従来の変数定義

Content Server 7.x からアップグレードする場合、アップグレード後に **[CS-Install]/bin/intradoc.cfg** ファイルで **CLASSPATH** および **JAVA_OPTIONS** 変数を必ずコメント解除します。変数をコメント解除するには、**#** 記号と置き換えます。

既存のインストールの更新

この項の内容は、次のとおりです。

- 6-2 ページの「[サポートされている更新バージョン](#)」
- 6-2 ページの「[開始する前に](#)」
- 6-4 ページの「[Content Server の更新](#)」
- 6-7 ページの「[プロキシ・サーバーの更新](#)」
- 6-8 ページの「[Verity からデータベースの検索 / 索引付けへの移行](#)」

6.1 サポートされている更新バージョン

次のリリースの Content Server は、このリリースに直接アップグレードできます。

- Content Server 7.x (Verity および Verity 以外のエディションの両方)
- Content Server 10gR3

第 2 章「インストールの概要」のハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たす場合にのみ、前述のバージョンを直接アップグレードできます。ハードウェアまたはソフトウェア（オペレーティング・システムなど）をアップグレードする必要がある場合は、直接アップグレードはできません。かわりに、フレッシュ・インストールを実行する必要があります。

第 4 章「新規 Content Server のインストール」を参照してください。たとえば、現行のインストールが Sun Solaris 8 で稼働している場合、この新しいリリースではこのオペレーティング・システムがサポートされていないため、Content Server に直接アップグレードできません。同様に、データベースとして Informix を実行している場合、Content Server への直接アップグレードはサポートされていません。

注意： プロキシ・サーバーを含む 10gR3 より前のリリースの Content Server インストールを更新する場合は、これらのプロキシ・サーバーも更新され、更新前と同じように機能します。

6.2 開始する前に

この項の作業を開始する前に、第 2 章「インストールの概要」および第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」をよく読んでください。

既存のインストールを Content Server 10gR3 に更新する前に、次に示す推奨事項を十分に検討してください。

- この項で説明されている更新手順では、マスターコンテンツ・サーバー・インスタンスおよび関連するすべてのプロキシ・インスタンスの以前の構成設定がすべて保持されます。
- ハードウェアおよびソフトウェアが、第 2 章「インストールの概要」のすべての要件を満たしていることを確認してください。満たしていない場合は、Content Server ソフトウェアを更新する前にアップグレードしてください。ハードウェアまたはオペレーティング・システムあるいはその両方をアップグレードする必要がある場合は、このリリースの Content Server への直接更新を実行することはできません。かわりに、フレッシュ・インストールを実行する必要があります。第 4 章「新規 Content Server のインストール」を参照してください。
- 更新手順を実行する前に、現在のインスタンス（データベースおよびインストール・ディレクトリ構造全体）の最新の完全なバックアップを作成することを強くお勧めします。更新中に不具合が発生した場合に、いつでも元の構成に戻すことができます。バックアップ方法の説明は、『Planning and Implementation Guide』を参照してください。

- ソフトウェアの更新前に、実行中のコンテンツ・サーバー・プロセスを停止する必要はありません。インストーラにより、自動的に停止され、更新が完了した後に再開されます。

更新を実行する前に、コンテンツ・サーバー・ディレクトリを削除することでアンインストールを実行する場合は、まずそのサーバー・インスタンスに関連する実行中のすべてのプロセスを停止してください。停止しない場合、プロセスは非表示で実行され続け、派生元のバイナリが存在しなくなるため孤立してしまいます。このため、インストーラがそれらを正常に停止できず、更新後にコンテンツ・サーバー・プロセスを開始できなくなる可能性があります。

- コンテンツ・リファイナリ・モジュールを実行している場合は、「Work in Progress」ページを確認し、リファイナリ・モジュールによるコンテンツ・アイテムの処理が終了するまで待機します。リファイナリによるファイルの処理が完了したら停止します。
- Content Server ソフトウェアの更新前に、すべてのアプリケーション（アプレット）を終了します。

- Content Server を更新するためのインストーラを実行する前に、Content Server へのブラウザ接続がないことを確認します。
- インストールされたすべてのコンポーネントをアップグレード前に無効化し、アップグレード後に 1 つずつ有効化することをお勧めします。アップグレードにより破損したコンポーネントを確認できるよい方法です。ソフトウェアのアップグレードを成功させるためなどには不要であることに注意してください。カスタムのアップグレードにのみ便利な方法です。
- Content Server とインストール済コンポーネントの間には依存性があります。Content Server インスタンスを更新する場合、すべてのインストール済コンポーネントを更新する必要があります。同様に、インストール済コンポーネントを更新する場合、Content Server インスタンスも最新のパッチ・セットで更新する必要があります。更新の前に、現在のコンポーネントと新しい Content Server のリリースに互換性があるか、コンポーネントに新しく更新されたバージョンがあるかを確認します。

重要： 10gR3 より前のコンポーネントには、Content Server 10gR3 と互換性がないものもあります。

- ([CS-Install]/classes ディレクトリにある) Content Server にパッチを適用した場合、それらはアップグレード中に削除されます。主要な Content Server への標準のパッチは、一般的に Content Server ソフトウェアの新規リリースに組み込まれます。カスタムのコンポーネントや、古くても互換性がある外部製品またはアドオン製品に適用されたパッチは、Content Server のアップグレード後に再適用する必要があります。Content Server に直接関連していないパッチの互換性についての質問は、Oracle サポート・サービスに連絡してください。
- Content Server は、更新前に使用されていた Java 仮想マシン (JVM) とともに稼働し続けます。
- Verity 4.5.1 を使用した旧リリースからこのリリースの Content Server にアップグレードする場合、このリリースへのアップグレード後も Verity 検索エンジンは機能し続けます。必要な場合には、データベースの検索および索引付けに切り替えることができます (第 6 章「既存のインストールの更新」)。このリリースの Content Server では Verity 2.7 はサポートされていないことに注意してください。

Content Server の前のリリースからのアップグレードで、使用中の検索エンジンが Verity の場合、次の変数 (表示されているようにすべて大文字) を [CS-Install]/config/config.cfg ファイルに設定します。

```
SearchIndexerEngineName=VERITY.VDK.4
```

- Content Server 10gR3 のプロキシ・サーバー・インスタンスは、旧リリースのプロキシ・サーバーよりはるかに多くのディスク領域を使用します (第 2 章「インストールの概要」)。これは、10gR3 形式のプロキシ・サーバーには専用の共有ディレクトリがありますが、10gR3 より前のプロキシ・サーバーではマスターと共有ディレクトリを共有するためです。ただし、旧リリースから Content Server にアップグレードしても、プロキシ・サーバーはマスターと共有ディレクトリを共有し続けます。

6.3 Content Server の更新

既存のマスター・コンテンツ・サーバーをリリース 10gR3 に更新するには、次の手順を実行します。

1. (オペレーティング・システムおよびプラットフォームに応じて) 適切な Content Server ソフトウェア配布パッケージを入手します。
 - Sun Solaris (Microsystem SPARC)
 - Sun Solaris (Intel ベースのハードウェア)
 - IBM AIX
 - HP-UX (HP9000)
 - HP-UX (Intel Itanium ハードウェア)
 - Linux (x86 ベースのハードウェア)
 - Linux (IBM eServer zSeries)
2. ソフトウェア配布パッケージを zip ファイルとして入手した場合は、そのファイルを一時的なインストール場所に解凍します。
 ISO イメージをダウンロードした場合は、CD に書き込むか、インストール・ファイルにアクセスするために ISO イメージをマウントします。
 ソフトウェア配布 CD がある場合は、CD または DVD ドライブに挿入します。
3. シェル・ウィンドウを開いて、適切なインストール・ディレクトリに移動します (オペレーティング・システムによって異なります)。
 - Sun Solaris (Microsystem SPARC) : /UCM/ContentServer/solaris
 - Sun Solaris (Intel ベースのハードウェア) : /UCM/ContentServer/solaris-x86
 - IBM AIX: /UCM/ContentServer/aix
 - HP-UX (HP9000) : /UCM/ContentServer/hpux
 - HP-UX (Intel Itanium ハードウェア) : /UCM/ContentServer/hpux-ia
 - Linux (x86 ベースのハードウェア) : /UCM/ContentServer/linux
 - Linux (IBM eServer zSeries) : /UCM/ContentServer/linux-s390
4. `sh ./setup.sh` と入力して、[Enter] を押します。

注意： インストーラにコマンドライン・パラメータを指定して、デフォルトのインストール設定を上書きできます。たとえば、デフォルトで実行される初期システム・チェックをオフにできます。詳細は、E-11 ページの「[スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド](#)」を参照してください。

注意： インストールでは、テキスト値を入力する場合、[Enter] を押すと大カッコ ([]) 内に表示されるデフォルトをそのまま使用できます。リストから選択する場合は、[Enter] を押すと、先頭にアスタリスク (デフォルト) の付いた項目を選択できます。

5. インストール手順の**言語**を選択するよう要求されます。リストから言語を選択して、[Enter] を押します。
6. **インストール・オプション**のメニューから選択できるようになりました。既存の Content Server を更新するには [2] を押してから [Enter] を押します。

7. 更新する Content Server のインストール・ディレクトリへのフルパスの入力を要求されます。インストール・ディレクトリへのパスを指定するか、デフォルト（コンピュータで検出されたコンテンツ・サーバー）をそのまま使用し、[Enter] を押して続行します。

インストーラが既存の Content Server を指定された場所で検出できない場合は、再度場所を指定するよう要求されます。

8. Web サーバーが Sun ONE の場合は、この手順を完了します。それ以外の場合は、この手順をスキップして手順 9 に進みます。

コンテンツ・サーバーに使用する Sun Web サーバーの完全なディレクトリ・パスを指定するよう要求されます。Web サーバーの完全なディレクトリ・パスを入力し、[Enter] を押して続行します。

注意： 指定するディレクトリには、ファイル `obj.conf` および `magnus.conf` を含む `config` という名前のサブディレクトリが含まれている必要があります。インストーラにより、インストール・ディレクトリの `install` サブディレクトリに、新しい `obj.conf` および `magnus.conf` ファイルが作成されます。Web サーバーの `config` ディレクトリの古い `obj.conf` および `magnus.conf` を、`[Install-Dir]/install/` ディレクトリの `obj.conf` および `magnus.conf` と置き換えます。

9. 新規コンテンツ・サーバーとともに有効化する必要のあるコンポーネントを指定するよう要求されます。これらのコンポーネントにより、基本のコンテンツ・サーバーに機能が追加されます。次のコンポーネントから選択できます。

- ContentFolios
- Folders_g
- LinkManager8
- OracleTextSearch
- ThreadedDiscussions

注意： これらの各コンポーネントの詳細は、付録 C 「Content Server コンポーネント」を参照してください。

これらのオプションのコンポーネント以外に、他の多くのコンポーネントが常に、Content Server ソフトウェアとともにインストールされます。詳細は、付録 C 「Content Server コンポーネント」を参照してください。

注意： Folders_g コンポーネントによって、アップグレード時に多くの Folders サブコンポーネントが自動的に置き換えられます。Folders_g コンポーネントのアップグレード前に、以前のバージョンやサブコンポーネントの無効化やアンインストールは必要ありません。

関連付けられた番号を入力すると、コンポーネントのインストール・ステータスを切り替えられます。現在選択されていないコンポーネントがインストール用にマークされ、その逆も行われます。複数のコンポーネントは、1,3 のようにカンマを使用して区切ります。これらのコンポーネントのそれぞれのインストールの選択は、逆から行われます。すべてのコンポーネントを選択解除するには [0] を入力します。

完了したら f（終了）と入力し、[Enter] を押して続行します。

重要：Content Server とインストール済コンポーネントの間には依存性があります。Content Server インスタンスを更新する場合、すべてのインストール済コンポーネントを更新する必要があります。同様に、インストール済コンポーネントを更新する場合、Content Server インスタンスも最新のパッチ・セットで更新する必要があります。

注意：コンポーネントの zip ファイルは、すべてソフトウェア配布パッケージの `packages/allplatform` ディレクトリにあります。この時点で特定のコンポーネントをインストールしないことを選択しても、後から通常の方法を使用してこの場所からいつでもインストールできます。コンポーネントのインストールおよび有効化の詳細は、Content Server の管理ガイドを参照してください。

10. インストーラにより、多数のチェックが実行されます。エラーまたは警告があると報告されます。インストール設定が確認され、インストールを続行するか中断するか、または構成を再確認するかを確認されます。再確認により、続行する前に報告されたエラーを修正できます。準備ができたらメニュー・オプションを選択し、[Enter] を押して続行します。
11. インストールの続行を選択すると、すべてのファイルがコピーされ、構成設定が行われます。このプロセスの間に、現在実行されているタスクの簡単な説明だけでなく、完了した内容の割合がメッセージ行に表示されます。

注意：すでにコンテンツ・サーバー内にあるコンテンツ・アイテムおよびリビジョンの数によっては、しばらく時間がかかります。

注意：Verity 4.5.1 を使用した以前のリリースの Content Server からアップグレードした場合、このリリースへのアップグレード後も Verity 検索エンジンは機能し続けます。必要な場合には、データベースの検索および索引付けに切り替えることができます（6-8 ページの「[Verity からデータベースの検索 / 索引付けへの移行](#)」）。このリリースの Content Server では Verity 2.7 はサポートされていないことに注意してください。

Content Server 7.x からアップグレードする場合、`[CS-Install]/bin/intradoc.cfg` ファイルで `CLASSPATH` および `JAVA_OPTIONS` 変数を必ずコメント解除します。変数をコメント解除するには、`#` 記号と置き換えます。次に例を示します。

```
#CLASSPATH=$COMPUTEDCLASSPATH;$SHARED_DIR/classes/ojdbc14.jar
```

また、Verity を検索エンジンとして使用する以前のバージョンからアップグレードする場合、`[CS-Install]/config/config.cfg` ファイルに次の変数を必ず設定します（表示のとおりすべて大文字）。

```
SearchIndexerEngineName=VERITY.VDK.4
```

12. コンピュータを再起動し、コンテンツ・サーバーを起動します。
13. インストールを検証します。

6.4 プロキシ・サーバーの更新

複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスで構成される既存の 10gR3 インストールを更新する場合は、各インスタンスを別々に更新する必要があります。

10gR3 より前のマスター・コンテンツ・サーバーを更新する場合は、同じシステム上の関連するすべてのプロキシ・サーバーも自動的に更新されます。つまり、プロキシ・サーバーの更新には特別な手順は必要ありません。

重要： プロキシ・サーバーをアップグレードしたら、Web レイアウト・エディタを使用してそれらのサーバーに関する静的ポータル・ページを再作成してください。

SQL Server をデータベースとして使用する Content Server 7.5.2 からの更新の場合、リリース 10gR3 の jtds ドライバを更新する際、プロキシ・サーバーへの変更が必要です。リリース 7.5.2 のメディアに含まれていた JDBC ドライバを使用していて、アップグレードが必要な場合は、マスター・サーバーの更新後に、プロキシ・サーバーに次の手順を実行する必要があります。

1. `[Proxy-Install]/config/config.cfg` の次の構成設定を変更します（サンプルとしてマスターの `config/config.cfg` を参照してください）。

- `JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc`
- `JdbcDriver`
- `JdbcConnectionString`

例：

```
JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc=$SharedDir/classes/jtds-1.2.jar
JdbcDriver=net.sourceforge.jtds.jdbc.Driver
JdbcConnectionString=jdbc:jtds:sqlserver://dbase11:1433/sql19
```

明示的なパスが必要な場合は、`[Proxy-Install]/bin/intradoc.cfg` に次の内容を追加します（サンプルとしてマスターの `bin/intradoc.cfg` を参照してください）。

```
JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc=[My_Path_to_Driver]/jtds-1.2.jar
```

SQL Server 用 JDBC ドライバの詳細は、3-13 ページの「[JDBC ドライバおよび設定](#)」を参照してください。

2. プロキシ・サーバーの静的ファイルをパブリッシュします。
 - a. 管理者として Content Server にログインします。
 - b. 管理トレイまたはトップ・メニューを開きます。
 - c. **Actions** メニューから、**Publish static layout files** を選択します。

6.5 Verity からデータベースの検索 / 索引付けへの移行

Verity 4.5.1 を使用している以前のリリースの Content Server からアップグレードした場合、Verity 検索エンジンは Content Server 10gR3 で機能し続けます。必要な場合には、簡単にデータベースの検索および索引付けに切り替えられます。

メタデータおよび全文の検索と索引付けの有効化

メタデータおよび全文の検索と索引付けの両方を行うようデータベースを設定する方法の詳細は、[付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」](#)を参照してください。

メタデータのみの検索および索引付けの有効化

メタデータのみの検索および索引付けを行うようデータベースを設定する方法の詳細は、[付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」](#)を参照してください。

考慮事項

次の重要な考慮事項に注意してください。

- このリリースの Content Server では Verity 2.7 はサポートされていません。
- 全文検索にデータベースを使用している場合、各コンテンツ・アイテムのコピーが全文索引付け用にデータベースに追加されるにつれ、サイズが大幅に増加します。このため、データベースを適切にサイズ変更することが重要です。データベースを自動的にサイズ変更されるよう設定しなかった場合は、サイズの増加に対応できるようデータベースに十分な余裕を持たせてください。

Content Server の起動および停止

この項の内容は、次のとおりです。

- 7-2 ページの「[Content Server の起動](#)」
- 7-2 ページの「[Content Server の停止](#)」
- 7-3 ページの「[Content Server の再起動](#)」
- 7-3 ページの「[Content Server へのログオン](#)」

7.1 Content Server の起動

コンテンツ・サーバーは、次の 2 つの方法のいずれかで起動できます。

- [UNIX コマンド](#)
- [管理サーバー](#)

7.1.1 UNIX コマンド

UNIX コマンドを使用すると、システムにログインせずにコンテンツ・サーバーを起動し、リモート・システムからコンテンツ・サーバーを管理できます。

- **idcserver_start:** このコマンドは、コンテンツ・サーバーをバックグラウンドで起動します。Content Server のインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリから使用できます。
- **idcserver_query:** このコマンドは、Content Server のステータスを確認して実行中かどうかを判断します。Content Server のインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリから使用できます。
- **idcserver_ctrl:** rc ファイルとしての使用に適したスクリプト・ファイルで、システムを起動するたびに自動的に Content Server を起動するための起動命令が記載されています。Content Server のインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリから使用できます。
- **idcadmin_start:** このコマンドは Content Server の管理サーバーを起動します。管理サーバーを使用すると、そのシステムのコンテンツ・サーバー・インスタンスを HTML ベースでリモートから管理できるようになります。Content Server のインストール・ディレクトリの `admin/etc` サブディレクトリから使用できます。

7.1.2 管理サーバー

管理サーバーが実行されている場合、Content Server ソフトウェア内でリモートからコンテンツ・サーバーを起動することもできます。

1. 十分な管理者権限を持ってログインしてください。
2. 「Administration」ページに移動して「Admin Server」をクリックします。
3. 使用可能なすべてのサーバーがリスト表示されます。コンテンツ・サーバーを起動するには、黒い三角形をクリックします。（この記号がグレー表示されている場合は、そのサーバーがすでに実行中であることを意味します。）

注意： 管理サーバーを使用してコンテンツ・サーバーにアクセスするには、`sysmanager` ロールが必要です。

7.2 Content Server の停止

Content Server を次の 2 つのどちらかの方法で停止できます。

- [UNIX コマンド](#)
- [管理サーバー](#)

7.2.1 UNIX コマンド

UNIX コマンド `idcserver_stop` を使用すると、`idcserver_start` を使用して開始されたコンテンツ・サーバーを停止できます。Content Server のインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリから使用できます。

UNIX コマンド `idcadmin_stop` を使用すると、Content Server の管理サーバーを停止できます。Content Server のインストール・ディレクトリの `admin/etc` サブディレクトリから使用できます。

7.2.2 管理サーバー

管理サーバーが実行されている場合、Content Server ソフトウェア内からコンテンツ・サーバーを停止することもできます。

1. 十分な管理者権限を持ってログインしてください。
2. 「Administration」ページに移動して「Admin Server」をクリックします。
3. 使用可能なすべてのサーバーがリスト表示されます。コンテンツ・サーバーを停止するには、黒い四角形をクリックします。（この記号がグレー表示されている場合は、そのサーバーがすでに停止されていることを意味します。）

注意： 管理サーバーを使用してコンテンツ・サーバーにアクセスするには、sysmanager ロールが必要です。

7.3 Content Server の再起動

Content Server を次の 2 つのどちらかの方法で再起動できます。

- UNIX コマンド
- 管理サーバー

注意： 新規コンポーネントを有効にする場合、または構成設定や構成ファイル・エントリが変更された場合は、コンテンツ・サーバーを再起動する必要があります。

7.3.1 UNIX コマンド

UNIX コマンド `idcserver_restart` を使用すると、`idcserver_start` を使用して開始されたコンテンツ・サーバーを停止して再度起動できます。Content Server のインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリから使用できます。

7.3.2 管理サーバー

管理サーバーが実行されている場合、Content Server ソフトウェア内からコンテンツ・サーバーを再起動することもできます。

1. 十分な管理者権限を持ってログインしてください。
2. 「Administration」ページに移動して「Admin Server」をクリックします。
3. 使用可能なすべてのサーバーがリスト表示されます。コンテンツ・サーバーを再起動するには、黒い曲線矢印をクリックします。

注意： 管理サーバーを使用してコンテンツ・サーバーにアクセスするには、sysmanager ロールが必要です。

7.4 Content Server へのログオン

Content Server にログオンするには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザを開きます。
2. Content Server のホームページ（ポータル・ページ）に移動します。デフォルトで、アドレスは `http://[host_name]/[web_root]` です。たとえば、`http://master1/server/` のようになります。

3. 左側のナビゲーション・メニューの「**Login**」リンクをクリックして、Content Server のシステム管理ログインが受け入れられていることを確認します。デフォルトは次のとおりです。
 - ユーザー名:sysadmin
 - パスワード:idc

重要：管理パスワードは、デフォルトから他の値に変更することを強くお勧めします。

Web サーバーの設定

この付録では、Web サーバーを手動で設定する場合に実行する必要がある手順を説明します。説明する内容は次のとおりです。

- A-2 ページの「[Sun Web サーバーの設定](#)」
- A-5 ページの「[Apache の設定](#)」
- A-8 ページの「[IBM HTTP Server の設定](#)」

重要：この項では、Content Server で使用するように Web サーバーを設定するためのガイドラインを示します。実装シナリオ、セキュリティ要件またはその他の条件によって、設定手順の変更や、追加の構成手順が必要になる場合があります。

重要：[第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)のインストール前のタスクと考慮事項を必ず確認してください。

A.1 Sun Web サーバーの設定

Content Server ソフトウェアのインストール中、Sun Web サーバーを手動で設定するように選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

- [ドキュメント・ディレクトリの追加](#)
- [obj.conf ファイルの変更](#)
- [magnus.conf ファイルの変更](#)
- [フィルタの名前および場所の指定](#)
- [プロキシ・インスタンス用の Sun Web サーバーの設定](#)（該当する場合）

注意：第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」のインストール前のタスクと考慮事項を必ず確認してください。

A.1.1 ドキュメント・ディレクトリの追加

Web サーバーは、コンテンツ・サーバーの Web 表示可能ファイル・リポジトリ（weblayout ディレクトリ）の場所を認識する必要があります。このためには、次の手順を実行します。

1. Administer Web Server ユーティリティを起動します。
2. ユーザー名およびパスワードを入力します。
3. サーバーを選択し、「**Manage**」をクリックします。
4. ページの右上隅にある「**Class Manager**」をクリックします。
5. 「**Content Mgmt**」タブを開きます。
6. ページの左側にある「**Additional Document Directories**」リンクをクリックします。
7. URL 接頭辞として `oracle` と入力します。
8. マップ先のディレクトリとして `[CS-Install]/weblayout`（`[CS-Install]` はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ）を入力します。次に例を示します。

```
/ul/oracle/ucm/contentserver/weblayout
```

9. 完了したら、「**OK**」をクリックします。

A.1.2 obj.conf ファイルの変更

Sun Web サーバーの `obj.conf` ファイルを、2つの新しいエントリが含まれるように変更する必要があります。

1. Sun Web サーバー・ソフトウェア・ディレクトリに移動し、`https-[host-name]/config` サブディレクトリ（`[host-name]` は、ソフトウェアがインストールされているシステムの名前）を開きます。次に例を示します。

```
/ul/iplanet/servers/https-server7/config
```

2. テキスト・エディタでファイル `obj.conf` を開きます。
3. 次の `ppath` オブジェクトを `obj.conf` ファイルに追加します。

```
<Object path="[Weblayout_Dir]/*">  
NameTrans fn="idcNameTrans"  
PathCheck fn="idcPathCheck"  
Service fn="idcService"  
</Object>
```

（`[Weblayout_Dir]` は、Web 表示可能ファイル・リポジトリのフルパスです。たとえば、`/ul/oracle/ucm/contentserver/weblayout` などです。）

注意： 前述の Object エントリは、示されているように、複数行で入力してください。

4. <Object name="default"> セクション内に、次の行を追加します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/ [Relative_Web_Root]" dir=" [Weblayout_Dir]"
```

([Relative_Web_Root] はコンテンツ・サーバー・インスタンスの相対 Web ルートであり、[Weblayout_Dir] は Web 表示可能ファイル・リポジトリのフルパスです。) 次に例を示します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/stellent"
dir="/ul/oracle/ucm/contentserver/weblayout"
```

重要： 前述の NameTrans エントリは、示されているように、複数行ではなく 1 行で（改行ではなく空白を追加して）入力してください。

5. Web サーバーの管理ページで、obj.conf ファイルに対して行った変更を適用します。
6. Web サーバーを停止してから再起動します。

A.1.3 magnus.conf ファイルの変更

Sun Web サーバーの magnus.conf ファイルを、2 つの新しいエントリが含まれるように構成する必要があります。

1. Sun Web サーバー・ソフトウェア・ディレクトリに移動し、https-[host_name]/config サブディレクトリ ([host_name] は、ソフトウェアがインストールされているシステムの名前) を開きます。次に例を示します。

```
/ul/iplanet/servers/https-server7/config
```

2. テキスト・エディタでファイル magnus.conf を開きます。

最後の「Init fn」 エントリの後ろに次のエントリを追加します。

```
Init fn="load-modules"
funcs="idcInit,idcNameTrans,idcPathCheck,idcService"
shlib=" [CS-Install]/shared/os/ [OS]/lib/IdcNSAuth.so"
Init fn="idcInit" idocdb=" [Inst_Dir]/data/users/userdb.txt"
```

([CS-Install] はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリのフルパスです。[OS] はオペレーティング・システムの名前です。)

重要： HP-UX の場合、ファイルの名前は IdcNSAuth.sl です。

重要： 前述の各 Init エントリは、示されているように、複数行ではなく 1 行で（改行ではなく空白を追加して）入力してください。

3. Web サーバーの管理ページで、magnus.conf ファイルに対して行った変更を適用します。
4. Web サーバーを停止してから再起動します。

A.1.4 フィルタの名前および場所の指定

コンテンツ・サーバーの Web フィルタの名前および場所を確認する必要があります。このファイルは、次の構成ファイル内で参照されています。

- [CS-Install]/admin/config/config.cfg
- [CS-Install]/config/config.cfg
- [CS-Install]/admin/data/servers/[Instance-Name]/server.hda

([CS-Install] は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリで、[Instance-Name] は、その名前です。)

HTTP 相対 CGI ルート

HTTP 相対 CGI ルートは、Content Server の Web フィルタの場所です。デフォルトの場所は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのルート・ディレクトリの idcplg サブディレクトリ（たとえば、/u1/oracle/ucm/contentserver/idcplg など）です。別のディレクトリを使用する場合は、前述の各構成ファイルが適切な場所（サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリのサブディレクトリ）を参照するように設定します。

```
HttpRelativeCgiRoot=/[New_Directory]/
```

CGI ファイル名

前述の各構成ファイルに次のエントリが含まれていることを確認する必要があります。

```
CgiFileName=idcplg
```

(CgiFileName エントリがすでに存在する場合は、このエントリを前述の行と一致するように変更します。)

A.1.5 プロキシ・インスタンス用の Sun Web サーバーの設定

(マスター・サーバーおよび Web サーバーと同じコンピュータに) プロキシ・インスタンスとしてコンテンツ・サーバーをインストールした場合は、次の手順も実行する必要があります。

1. ドキュメント・ディレクトリを Web サーバーに追加します (Sun の「Administer Web Server」ユーティリティを使用。A-2 ページの「ドキュメント・ディレクトリの追加」を参照)。たとえば、プロキシ・インスタンスの相対 Web ルートが stellent-2 の場合、URL 接頭辞として stellent-2 と入力し、それをプロキシの weblayout ディレクトリにマップします。
2. Web サーバーの obj.conf 内に path オブジェクトを追加します (A-2 ページの「obj.conf ファイルの変更」を参照)。次に例を示します。

```
<Object path="[Proxy_Weblayout_Dir]/*">
NameTrans fn="idcNameTrans"
PathCheck fn="idcPathCheck"
Service fn="idcService"
</Object>
```

([Proxy_Weblayout_Dir] は、Web 表示可能ファイル・リポジトリのフルパスです。たとえば、/u1/oracle/ucm/contentserver/idcm1p1/weblayout などです。)

注意： 前述の Object エントリは、示されているように、複数行で入力してください。

3. obj.conf (A-2 ページの「[obj.conf ファイルの変更](#)」を参照) の <Object name="default"> セクション内で、プロキシ・インスタンスに対する次のエントリを追加します。次に例を示します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/[Proxy_Rel_Web_Root]"
dir="[Proxy_Weblayout_Dir]"
```

(*[Proxy_Rel_Web_Root]* はプロキシ・インスタンスの相対 Web ルートで、*[Proxy_Weblayout_Dir]* はプロキシ・インスタンスの Web 表示可能ファイル・リポジトリのフルパスです。) 次に例を示します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/stellent_2" dir="/u1/oracle/ucm/contentserver/
idcm1p1/weblayout"
```

重要： 前述の NameTrans エントリは、示されているように、複数行ではなく 1 行で（改行ではなく空白を追加して）入力してください。

4. Web サーバーの管理ページで、obj.conf ファイルに対して行った変更を適用します。
5. Web サーバーを停止してから再起動します。

A.2 Apache の設定

Apache は Content Server インストーラによって自動的に構成されないため、手動で構成する必要があります。これには、次の手順を実行します。

- マスター・インスタンス用の [Apache の構成](#)
- プロキシ・インスタンス用の [Apache の構成](#)
- [Apache でのデバッグの有効化](#)
- [ログ・ダンプ・ファイルの作成](#)
- [正規名の無効化](#)

注意： 第 3 章「[インストール前のタスクおよび考慮事項](#)」のインストール前のタスクと考慮事項を必ず確認してください。

A.2.1 マスター・インスタンス用の Apache の構成

マスター・インスタンスに対して Apache を構成するには、次の手順を実行します。

1. マスター・コンテンツ・サーバー（つまり、コンピュータ上のプロキシ・コンテンツ・サーバーでないコンテンツ・サーバー）を選択し、httpd.conf ファイルの一番下（または少なくとも clearmodulelist 行より下）に次の構成エントリを追加します。

重要： Apache 2.0 では、IdcApache2Auth.so (Solaris、IBM AIX および Linux) または IdcApache2Auth.sl (HP-UX) を指定します。Apache 2.2 では、IdcApache22Auth.so (Solaris、IBM AIX および Linux) または IdcApache22Auth.sl (HP-UX) を指定します。

- Solaris、IBM AIX および Linux:

```
LoadModule IdcApacheAuth [Webserver_Filters_Path] /IdcApache2Auth.so
```

- HP-UX:

```
LoadModule IdcApacheAuth [Webserver_Filters_Path] /IdcApache2Auth.sl
```

注意： Web サーバー・フィルタのパスは通常、
`[Root_Dir_For_Master]/shared/os/[OS_Name]/lib` (`[OS_Name]` は、solaris などのオペレーティング・システム名) です。`[Master_Instance]` は通常、マスター・コンテンツ・サーバーのインスタンス名 (`config.cfg` 内の `IDC_NAME` パラメータ) です。ユーザー・データ・ディレクトリのパスは通常、`[Root_Dir_For_Master]/data/users` です。

次に例を示します。

```
LoadModule IdcApacheAuth /u1/apps/oracle/ucm/contentserver/shared/os/solaris/lib/IdcApache2Auth.so
```

(これらのエントリは 1 行であることに注意してください。)

2. マスター・コンテンツ・サーバーごとに (つまり、コンピュータ上のプロキシ・コンテンツ・サーバーでないコンテンツ・サーバーごとに)、`httpd.conf` ファイルの一番下 (または少なくとも `clearmodulelist` 行より下) に次の構成エントリを追加します。

- **Solaris、IBM AIX および Linux:**

```
IdcUserDB [Master_Instance] "[User_Data_Dir_Path]/userdb.txt"
```

- **HP-UX:**

```
IdcUserDB [Master_Instance] "[User_Data_Dir_Path]/userdb.txt"
```

次に例を示します。

```
IdcUserDB Stellent "/u1/apps/oracle/ucm/contentserver/data/users/userdb.txt"
```

3. 次のエントリを追加してマスター・サーバーの `weblayout` ディレクトリに別名を設定し、セキュリティがフィルタによって制御されるように設定します。

```
Alias /[Rel_URL_To_Master] "[Path_To_Master_Web1.]"
<Location /[Rel_URL_To_Master]>
    Order allow,deny
    Allow from all
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity [Master_Instance]
</Location>
```

次に例を示します。

```
Alias /idcm1 "/u1/apps/oracle/ucm/contentserver/weblayout"
<Location /idcm1>
    Order allow,deny
    Allow from all
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity idcm1
</Location>
```

注意： マスター・コンテンツ・サーバーの Web レイアウトのパスは通常、
`[Root_Dir_For_Master]/weblayout` ですが、別のディスク・ドライブに変更することもできます。マスター・コンテンツ・サーバーの相対 URL は、末尾にスラッシュを付けずに指定してください。`[Master_Instance]` は通常、マスター・コンテンツ・サーバーのインスタンス名 (`config.cfg` 内の `IDC_NAME` パラメータ) であり、`IdcUserDB` エントリに使用されている名前と一致している必要があります。

A.2.2 プロキシ・インスタンス用の Apache の構成

プロキシ・サーバーごとに、weblayout ディレクトリの別名およびセキュリティ・エントリを httpd.conf ファイルに追加します。

```
Alias /[Rel._URL_To_Prox.] "[Path_To_Prox._Weybl.]"
<Location /[Rel._URL_To_Prox.]>
    Order allow,deny
    Allow from all
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity [Master_Instance]
</Location>
```

次に例を示します。

```
Alias /stellent_2 "/u1/apps/oracle/ucm/contentserver/idcm1p1/weblayout"
<Location /stellent_2>
    Order allow,deny
    Allow from all
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity Stellent
</Location>
```

注意： マスター・コンテンツ・サーバーの Web レイアウトのパスは通常、`[Root_Dir_For_Master]/weblayout` ですが、別のディスク・ドライブに変更することもできます。マスター・コンテンツ・サーバーの相対 URL は、末尾にスラッシュを付けずに指定してください。`[Master_Instance]` は通常、マスター・コンテンツ・サーバーのインスタンス名（`config.cfg` 内の `IDC_NAME` パラメータ）であり、`IdcUserDB` エントリに使用されている名前と一致している必要があります。

A.2.3 Apache でのデバッグの有効化

Apache でデバッグを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 管理者として Content Server にログインします。
2. 「Administration」ページを開きます。
3. 「Filter Administration」リンクをクリックします。（下へスクロールする必要があることがあります。）
「Configure Web Server Filter」ページが表示されます。
4. 「Logging Options」で、「CGI_RECEIVE_DUMP」および「CGI_SEND_DUMP」オプションが両方とも選択されていることを確認します。
5. 「Logging Options」セクション内の「Update」ボタンをクリックします。

A.2.4 ログ・ダンプ・ファイルの作成

ログ・ダンプは、ファイル `[CS-Install]/data/users/authfilter.log`（`[CS-Install]` はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ）内に書き込まれます。
o（その他）および `rw`（読取りおよび書込み）権限を含む権限セットを指定して、このファイルを手動で（`vi` などのアプリケーションを使用して）作成します。次に例を示します。

```
vi /u1/work/idctest1/data/users/authfilter.log
```

（情報を追加し、保存して終了します。）

```
chmod o+rw /u1/work/idctest1/data/users/authfilter.log
```

A.2.5 正規名の無効化

コンテンツ・サーバーで、実行されている物理サーバーとは異なる IP アドレスまたはアドレスが使用されている（つまり、`HttpServerAddress` 変数が Content Server の `config.cfg` ファイル内に定義されている）場合があります。その場合は、正規名を無効化することをお勧めします。この設定が有効になっている場合、Apache では、自己参照 URL（つまり、レスポンスの発生元のサーバーを再帰的に参照する URL）を構成する必要が生じるたびに、`ServerName` と `Port` を使用して正規名が構成されます。この設定が無効になっている場合、Apache では、クライアントが提供したホスト名 : ポートが使用されます（可能な場合）。これによって、ログイン・プロンプトの二重生成がなくなります。

正規名を無効にするには、`httpd.conf` ファイルに次の行が含まれていることを確認します。

```
UseCanonicalName Off
```

（デフォルトの設定は `On` ですので注意してください。）

A.2.6 ポータル・ページの索引付け

Apache を Web サーバーとして使用している場合に、Content Server の `portal.htm` ページを索引にするには、標準のテキスト・エディタを使用して、Content Server の `config.cfg` ファイルで `ApacheConfLocationSectionExtraText=DirectoryIndex portal.htm` と設定します。変数を設定する際は、`DirectoryIndex portal.htm` にある空白に注意してください。`config.cfg` ファイルは、`<install_dir>/<instance_dir>/config` ディレクトリにあります。

A.3 IBM HTTP Server の設定

IBM HTTP Server は Content Server インストーラによって自動的に構成されないため、手動で構成する必要があります。これには、次の手順を実行します。

- [マスター・インスタンス用の IBM HTTP Server の構成](#)
- [プロキシ・インスタンス用の IBM HTTP Server の構成](#)
- [IBM HTTP Server でのデバッグの有効化](#)
- [ログ・ダンプ・ファイルの作成](#)
- [正規名の無効化](#)

注意：第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」のインストール前のタスクと考慮事項を必ず確認してください。

A.3.1 マスター・インスタンス用の IBM HTTP Server の構成

マスター・インスタンスに対して IBM HTTP Server を構成するには、次の手順を実行します。

1. マスター・コンテンツ・サーバーごとに（つまり、コンピュータ上のプロキシ・コンテンツ・サーバーでないコンテンツ・サーバーごとに）、httpd.conf ファイルに次の構成エントリを追加します。

```
LoadModule IdcApacheAuth [Webserver_Filters_Path] /IdcApache2Auth.so
IdcUserDB [Master_Instance] "[User_Data_Dir_Path]/userdb.txt"
```

（前述のエントリはそれぞれ 1 行であることに注意してください。）

注意： Web サーバー・フィルタのパスは通常、
`[Root_Dir_For_Master]/shared/os/aix/lib` です。`[Master_Instance]` は通常、マ
 スター・コンテンツ・サーバーのインスタンス名（`config.cfg` 内の
`IDC_NAME` パラメータ）です。ユーザー・データ・ディレクトリのパスは
 通常、`[Root_Dir_For_Master]/data/users` です。`[Master_Instance]` は通常、マ
 スター・コンテンツ・サーバーのインスタンス名（`config.cfg` 内の
`IDC_NAME` パラメータ）です。

2. 次のエントリを追加してマスター・サーバーの `weblayout` ディレクトリに別名を設定し、セキュリティがフィルタによって制御されるように設定します。

```
Alias /[Rel_URL_To_Master] "[Path_To_Master_Web1.]"
<Location /[Rel_URL_To_Master]>
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity [Master_Instance]
</Location>
```

次に例を示します。

```
Alias /stellent "/u1/apps/oracle/ucm/contentserver/weblayout"
<Location /stellent>
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity Stellent
</Location>
```

注意： マスター・コンテンツ・サーバーの Web レイアウトのパスは通常、
`[Root_Dir_For_Master]/weblayout` ですが、別のディスク・ドライブに変更す
 ることもできます。マスター・コンテンツ・サーバーの相対 URL は、末尾に
 スラッシュを付けずに指定してください。`[Master_Instance]` は通常、マ
 スター・コンテンツ・サーバーのインスタンス ID（`config.cfg` 内の
`IDC_NAME` パラメータ）であり、`IdcUserDB` エントリに使用されている名
 前と一致している必要があります。

A.3.2 プロキシ・インスタンス用の IBM HTTP Server の構成

プロキシ・サーバーごとに、weblayout ディレクトリの別名およびセキュリティ・エントリを httpd.conf ファイルに追加します。

```
Alias /[Rel_URL_To_Prox.] "[Path_To_Prox._Weybl.]"
<Location /[Rel_URL_To_Prox.]>
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity [Master_Instance]
</Location>
```

次に例を示します。

```
Alias /stellent_2 "/u1/apps/oracle/ucm/contentserver/idcm1p1/weblayout"
<Location /stellent_2>
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity Stellent
</Location>
```

注意： マスター・コンテンツ・サーバーの Web レイアウトのパスは通常、`[Root_Dir_For_Master]/weblayout` ですが、別のディスク・ドライブに変更することもできます。マスター・コンテンツ・サーバーの相対 URL は、末尾にスラッシュを付けずに指定してください。`[Master_Instance]` は通常、マスター・コンテンツ・サーバーのインスタンス名（`config.cfg` 内の `IDC_NAME` パラメータ）であり、`IdcUserDB` エントリに使用されている名前と一致している必要があります。

A.3.3 IBM HTTP Server でのデバッグの有効化

Apache でデバッグを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 管理者として Content Server にログインします。
2. 「Administration」 ページを開きます。
3. 「Filter Administration」 リンクをクリックします。（下へスクロールする必要があることがあります。）
「Configure Web Server Filter」 ページが表示されます。
4. 「Logging Options」 で、「CGI_RECEIVE_DUMP」 および 「CGI_SEND_DUMP」 オプションが両方とも選択されていることを確認します。
5. 「Logging Options」 セクション内の 「Update」 ボタンをクリックします。

A.3.4 ログ・ダンプ・ファイルの作成

ログ・ダンプは、ファイル `[CS-Install]/user/data/authfilter.log`（`[CS-Install]` はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ）内に書き込まれます。

o（その他） および rw（読み取りおよび書き込み）権限を含む権限セットを指定して、このファイルを手動で（vi などのアプリケーションを使用して）作成します。次に例を示します。

```
vi /u1/work/idctest1/data/users/authfilter.log
```

（情報を追加し、保存して終了します。）

```
chmod o+rw /u1/work/idctest1/data/users/authfilter.log
```

A.3.5 正規名の無効化

コンテンツ・サーバーで、実行されている物理サーバーとは異なる IP アドレスまたはアドレスが使用されている（つまり、`HttpServerAddress` 変数が `Content Server` の `config.cfg` ファイル内に定義されている）場合があります。その場合は、正規名を無効化することをお勧めします。この設定が有効になっている場合、**IBM HTTP Server** では、自己参照 URL（つまり、レスポンスの発生元のサーバーを再帰的に参照する URL）を構成する必要が生じるたびに、`ServerName` と `Port` を使用して正規名が構成されます。この設定が無効になっている場合、**IBM HTTP Server** では、クライアントが提供したホスト名 : ポートが使用されます（可能な場合）。これによって、ログイン・プロンプトの二重生成がなくなります。

正規名を無効にするには、`httpd.conf` ファイルに次の行が含まれていることを確認します。

```
UseCanonicalName Off
```

（デフォルトの設定は **On** ですので注意してください。）

データベースの設定

Content Server ソフトウェア・インストーラでは、コンテンツ・サーバーで 사용되는一部のデータベースを自動的に設定できます。ただし、設定を手動で行うように選択することもできます。この付録では、データベースを手動で設定するために実行する必要がある手順を説明します。説明する内容は次のとおりです。

- B-2 ページの「データベース・スクリプト」
- B-3 ページの「SQL Server の設定」
- B-6 ページの「Oracle の設定」
- B-13 ページの「Sybase の設定」
- B-16 ページの「DB2 の設定」

重要：この項では、Content Server で使用するようデータベースを設定するためのガイドラインを示します。実装シナリオ、セキュリティ要件またはその他の条件によって、設定手順の変更や、追加の構成手順が必要になる場合があります。

注意：第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」のインストール前のタスクと考慮事項を必ず確認してください。

B.1 データベース・スクリプト

Content Server ソフトウェアには、サポートされるデータベースごとに、手動による表領域の作成および移入を可能にする多くのスクリプトが付属しています。

スクリプトの場所

Content Server のインストール前は、これらのスクリプトを各 Content Server ソフトウェア配布パッケージから使用できます。

```
/UCM/ContentServer/database/[DB_Name]
```

Content Server のインストール後は、これらのスクリプトを次の場所から使用できます。

```
[CS-Install]/database/[DB_Name]
```

([CS-Install]) は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。)

Unicode テキスト・フィールド

データベースが Oracle でない場合は、UTF-8 データベース表を使用するかわりに、Content Server で Unicode テキスト・フィールドを使用できます。

データベース表で Unicode テキスト・フィールドを使用する場合は、必ず前述の場所の `unicode` サブディレクトリにあるデータベース・スクリプトを使用してください。Unicode スクリプトを使用すると、Content Server に作成されるデータベース列には、`varchar` データ型ではなく `nvarchar` データ型が使用されます。

UTF-8 テキスト・フィールドとは異なり、`unicode` テキスト・フィールドは柔軟性が高く、データベースでほぼすべての言語を処理できます。すべての文字が 1 バイトではなく 2 バイトで表されるため、データベースのサイズが 2 倍になることに注意してください。

Unicode エンコーディングを選択しても、データベースの言語エンコーディングまたはキャラクター・セットに影響はありません。影響を受けるのは、コンテンツ・サーバー用に作成されたデータベース列のデータ型のみです (VARCHAR ではなく NVARCHAR)。また、Content Server データベースのデータ・エンコーディングは、エンタープライズ・データベース全体には適用されず、そのデータベース内の Content Server の予約済表領域のみに適用されます。

スクリプトの順序

スクリプトを実行する場合は、必ず次の順序で実行してください。

- `intradoc.sql`
- `default.sql`
- `formats.sql`
- `format_defaults.sql`
- `users.sql`
- `workflow.sql`

データベースによっては、1 つの操作で前述のスクリプト全部を正しい順序で実行できる `all.sql` スクリプトが存在する場合があります。

B.2 SQL Server の設定

Content Server ソフトウェアのインストール中、SQL Server 2000 または 2005 を手動で設定するように選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

- [Content Server データベースの作成](#)
- [データベース表の作成](#)
- [JDBC 設定の構成](#)
- [クラスパスの指定](#)
- [コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築](#)
- [サーバーの再起動](#)

注意：データベースの全文検索および索引付けを行うように SQL Server を設定する場合は、[付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」](#)を参照してください。

B.2.1 Content Server データベースの作成

SQL Server 内にまだ Content Server データベースを作成していない場合は、次の手順を実行して作成する必要があります。

1. Windows の「スタート」メニューから、「**プログラム**」→「**Microsoft SQL Server**」→「**Enterprise Manager**」を選択します。
SQL Server Enterprise Manager コンソールが表示されます。
2. 左側のツリー表示で、Content Server データベースを配置するサーバーを選択します（1 つ以上のツリー・ブランチを開く必要がある場合があります）。
3. 「Databases」エントリを選択して右クリックし、ポップアップ・メニューから「**New Database...**」を選択します。
「Database Properties」ダイアログが表示されます。
4. 「General」タブで、新規のデータベースに有意な名前を指定します。
5. 「Data Files」タブで、データベース・ファイルの名前および場所を指定できます。また、初期ファイル・サイズを 100MB に設定し、データベースが自動的に 10% ずつ自動的に拡大するようにします。
6. 「Transaction Logs」タブで、ログ・ファイルの名前および場所を指定できます。また、初期ファイル・サイズを 25MB に設定し、ログ・ファイルが自動的に 10% ずつ自動的に拡大するようにします。
7. Content Server 10gR3 は、デフォルトで、SQL Server 認証を使用して SQL Server データベースにアクセスします。SQL Server 認証ではなく Windows NT 認証を使用する場合は、SQL Server のデフォルトの認証方式が正しく設定されていることを確認する必要があります。
 - a. SQL Server Enterprise Manager を起動します。
 - b. データベース・サーバーを選択します。
 - c. 右クリックして、ポップアップ・メニューから「**Properties**」を選択します。
 - d. 「Security」タブを開きます。
 - e. 「Security」領域で、認証が「SQL Server and Windows」に設定されていることを確認します。（これはデフォルト値ではありません。）
8. SQL Server Enterprise Manager コンソールを終了します。

B.2.2 データベース表の作成

Content Server データベース内にデータベース表を作成する必要があります。このためには、Content Server ソフトウェアに付属の一連の SQL スクリプトを実行します。コンテンツ・サーバー表がすでに存在する場合は、削除後に再作成されます。

SQL Server データベース表を作成するには、次の手順を実行します。

1. Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Microsoft SQL Server」→「Enterprise Manager」を選択します。

SQL Server Enterprise Manager コンソールが表示されます。

2. 左側のツリー表示で、Content Server データベースを配置するサーバーを選択します (1 つ以上のツリー・ブランチを開く必要がある場合があります)。

3. 「Tools」メニューから「SQL Query Analyzer」を選択します。

SQL Query Analyzer ウィンドウが表示されます。

4. ツールバーのドロップダウン・リストから、Content Server データベースを選択します。

5. 「File」→「Open」を選択し、SQL Server 用のスクリプトの場所を参照します。

SQL Server 2000 の場合 : Content Server ソフトウェアのインストール前に SQL Server を設定する場合、スクリプト・ファイルは Content Server ソフトウェア配布メディアの次の場所にあります。

- データベース表に Unicode でないテキスト・フィールド (varchar) を作成する場合 :
\\UCM\\ContentServer\\database\\mssql2000
- データベース表に Unicode テキスト・フィールド (nvarchar) を作成する場合 :
\\UCM\\ContentServer\\database\\mssql2000\\unicode

Content Server ソフトウェアのインストール後に SQL Server 2000 を設定する場合、スクリプト・ファイルは [CS-Install]\\database\\mssql2000 ディレクトリおよびその unicode サブディレクトリからも使用できます。

SQL Server 2005 の場合 : Content Server ソフトウェアのインストール前に SQL Server を設定する場合、スクリプト・ファイルは Content Server ソフトウェア配布メディアの次の場所にあります。

- データベース表に Unicode でないテキスト・フィールド (varchar) を作成する場合 :
\\UCM\\ContentServer\\database\\mssql
- データベース表に Unicode テキスト・フィールド (nvarchar) を作成する場合 :
\\UCM\\ContentServer\\database\\mssql\\unicode

Content Server ソフトウェアのインストール後に SQL Server 2005 を設定する場合、スクリプト・ファイルは [CS-Install]\\database\\mssql ディレクトリおよびその unicode サブディレクトリからも使用できます。

6. 次の各スクリプトを (示されている順序で) 開き、「Query」→「Execute」を選択して (または [F5] を押して) 実行します。

- intradoc.sql
- default.sql
- formats.sql
- format_defaults.sql
- users.sql
- workflow.sql

注意 : これらの手順で初期インストールには存在していない表の削除が試行されるため、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。

7. SQL Query Analyzer を終了します。
8. SQL Server Enterprise Manager を終了します。

B.2.3 JDBC 設定の構成

コンテンツ・サーバーが SQL Server と正常に通信するためには、Content Server で JDBC 設定を構成する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

注意： この手順では、jTDS ドライバを使用することを想定しています。別のドライバを使用する場合、ドライバ名と接続文字列が異なります。

1. Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Content Server-[Instance Name]」→「Utilities」→「System Properties」と選択します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Database」タブを開きます。
3. 次のオプションを選択します。
 - Use Java Database Connectivity
 - JTDS JDBC Driver
4. JDBC ドライバ名を次のように指定します。
`net.sourceforge.jtds.jdbc.Driver`

5. 使用する SQL Server 認証方式に応じて、次のように JDBC 接続文字列を指定します。

SQL Server 認証の場合：

`jdbc:jtds:sqlserver:// [DB_Server]: [Port_No] / [DB_Name]`

Windows 認証の場合：

`jdbc:jtds:sqlserver:// [DB_Server]: [Port_No] / [DB_Name]:domain= [Domain_Name]`

[DB_Server] はデータベース・サーバーの名前、[Port_No] はポート番号（通常 1433）、[DB_Name] は Content Server データベース名、[Domain_Name] は Windows ネットワーク・ドメインの名前です。次に例を示します（SQL Server 認証の場合）。

`jdbc:jtds:sqlserver://csdb:1433/stellent`

6. SQL Server で認証方式が適切に設定されていることを確認します。
 - a. SQL Server Enterprise Manager を起動します。
 - b. データベース・サーバーを選択します。
 - c. 右クリックして、ポップアップ・メニューから「Properties」を選択します。
 - d. 「Security」タブを開きます。
 - e. 「Security」領域で、SQL Server 認証の場合は「SQL Server and Windows」を選択し、Windows 認証の場合は「Windows only」を選択します。
7. また、必要に応じて JDBC ユーザー名およびパスワードを指定します。これらは、SQL Server データベースへの接続に使用されるユーザー名およびパスワードです。
8. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.2.4 クラスパスの指定

コンテンツ・サーバーが SQL Server と正常に通信するためには、データベースで使用する JDBC ドライバ・ファイルへの参照を指定する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Content Server-[Instance Name]」→「Utilities」→「System Properties」と選択します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Paths」タブを開きます。
3. クラスパスを次のように指定します。
`JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc;$SharedDir/classes/jtds.jar`
4. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.2.5 コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築

コンテンツ・サーバーのポータル・ページを再構築する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Content Server-[Instance Name]」→「Weblayout Editor」と選択します。
2. 「Options」メニューから「Update Portal」を選択します。
3. 「OK」をクリックします。

B.2.6 サーバーの再起動

最後の手順として、コンテンツ・サーバーを（再）起動する必要があります。データベースをプロキシ・サーバーにインストールした場合、必ず次の順序でコンテンツ・サーバーを再起動してください。

1. SQL Server データベースがインストールされたプロキシ・サーバーを再起動します。
2. マスター・サーバーを再起動します。
3. 再びプロキシ・サーバーを再起動します。

これで、Content Server でデータベースを使用できるようになります。

B.3 Oracle の設定

Content Server ソフトウェアのインストール中、Oracle データベースを手動で設定するように選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

- [Content Server データベースの作成](#)
- [データベース表の作成](#)
- [JDBC 設定の構成](#)
- [クラスパスの指定](#)
- [コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築](#)
- [サーバーの再起動](#)
- [Oracle OCI ドライバの設定 \(Oracle9i\)](#) (必要な場合)
- [Oracle OCI ドライバの設定 \(Oracle 10g\)](#) (必要な場合)

注意：データベースの全文検索および索引付けを行うように Oracle を設定する場合は、[付録 D「データベースの検索および索引付けの設定」](#)を参照してください。

B.3.1 Content Server データベースの作成

Oracle 内に Content Server データベースをまだ作成していない場合は、作成する必要があります。詳細なガイドラインおよび考慮事項については、[第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)を参照してください。

B.3.2 データベース表の作成

Content Server データベース内にデータベース表を作成する必要があります。このためには、Content Server ソフトウェアに付属の一連の SQL スクリプトを実行します。コンテンツ・サーバー表がすでに存在する場合は、削除後に再作成されます。

Oracle データベース表を作成するには、次の手順を実行します。

1. Content Server UNIX ログインを使用してログインします ([第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)を参照)。
2. 作業ディレクトリを次のように変更します。
 - `[CS-Install]/database/oracle`

(`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。)
3. SQL*Plus を起動し、コンテンツ・サーバーの Oracle ユーザー名およびパスワードを使用してデータベースにログインします。
4. SQL プロンプトで、`@all.sql` というコマンドを入力します。

注意：この手順で初期インストールには存在していない表の削除が試行されるため、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。

5. スクリプトが完了したら、SQL*Plus を終了します。

B.3.3 JDBC 設定の構成

コンテンツ・サーバーが Oracle と正常に通信するためには、Content Server で JDBC 設定を構成する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

注意：この手順では、Oracle シン JDBC ドライバを使用することを想定しています。かわりに Oracle OCI ドライバを使用する場合は、[B-9 ページの「Oracle OCI ドライバの設定 \(Oracle9i\)」](#)または [B-11 ページの「Oracle OCI ドライバの設定 \(Oracle 10g\)」](#)で詳細を参照してください。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの `/bin` サブディレクトリ内にある `SystemProperties` ユーティリティを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Database」タブを開きます。
3. 次のオプションを選択します。
 - Use Java Database Connectivity
 - Oracle Thin JDBC Driver

4. アプリケーションに応じて JDBC 接続文字列を変更します。次の文字列書式を使用してください。

```
jdbc:oracle:thin:@[DB_Host_Name]:[DB_Server_Port]/[DB_Name]
```

ここで、`[DB_Host_Name]` は Oracle サーバーのホスト名、`[DB_Server_Port]` はポート番号 (通常は 1521)、そして `[CS_Name]` はデータベース・インスタンス名です。次に例を示します。

```
jdbc:oracle:thin:@csoracle:1521/stellent
```

5. また、必要に応じて JDBC ユーザー名およびパスワードを指定します。これらは、Oracle データベースへの接続に使用されるユーザー名およびパスワードです。

注意： JDBC ユーザー名およびパスワードは、Oracle 表の作成に使用したものと同じにしてください。JDBC ユーザーに表へのアクセス権限がない場合、コンテンツ・サーバーは起動できなくなります。

6. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.3.4 クラスパスの指定

コンテンツ・サーバーが Oracle と正常に通信するためには、データベースで使用する JDBC ドライバ・ファイルへの参照を指定する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの `/bin` サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。

System Properties アプレットが起動されます。

2. 「Paths」タブを開きます。
3. クラスパスを次のように指定します。

```
JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc:$SharedDir/classes/ojdbc14.jar
```

4. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.3.5 コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築

コンテンツ・サーバーのポータル・ページを再構築する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの `/bin` サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。

System Properties アプレットが起動されます。

2. 「Options」メニューから「Update Portal」を選択します。
3. 「OK」をクリックします。

B.3.6 サーバーの再起動

最後の手順として、コンテンツ・サーバーを (再) 起動する必要があります。データベースをプロキシ・サーバーにインストールした場合、必ず次の順序でコンテンツ・サーバーを再起動してください。

1. Oracle データベースがインストールされたプロキシ・サーバーを再起動します。
2. マスター・サーバーを再起動します。
3. 再びプロキシ・サーバーを再起動します。

これで、Content Server で Oracle を使用できるようになります。

B.3.7 Oracle OCI ドライバの設定 (Oracle9i)

Oracle9i との通信に、JDBC シン・クライアントではなく Oracle の OCI ドライバを使用するように選択することもできます。Content Server のインストール中にこのドライバを選択していない場合は、手動でこのドライバを設定する必要があります。

- [Oracle Client のインストール](#)
- [Oracle JDBC ドライバのコピー](#)
- [tnsnames.ora ファイルの編集](#)
- [intradoc.cfg ファイルの編集](#)
- [Oracle 共有ライブラリ・ファイルのコピー](#)
- [データベース設定の変更](#)

B.3.7.1 Oracle Client のインストール

Oracle Client をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Content Server を実行しているコンピュータに Oracle Client をインストールします。これによって、コンテンツ・サーバーに Net9 および OCI ライブラリがインストールされます。Oracle Client は、Oracle ソフトウェア配布メディアに含まれています。
2. Oracle Client を、Oracle サーバーと正常に通信できるように構成します。so ファイルを shared/[OS]/lib ディレクトリに配置します。

重要： 作業を進める前に、Oracle Client が作動していること、および正常に Oracle サーバーに接続していることを確認します。

B.3.7.2 Oracle JDBC ドライバのコピー

次の手順では、Oracle JDBC ドライバ（クラス・ファイル）をコンテンツ・サーバーにコピーします。Oracle9i リリース 2 に対応する最新の JDBC ドライバは、http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj_jdbc の Oracle Web サイトから入手できます。

ファイル ojdbc14.jar をダウンロードし、ディレクトリ [CS-Install]/shared/ classes/ にコピーします。[CS-Install] は、Content Server インスタンスのインストール・ディレクトリです (/u1/apps/oracle/ucm/contentserver/shared/classes など)。

オプションで、Oracle Web サイトからファイル nls_charset12.zip を前述の Content Server の場所にコピーすることもできます。このファイルによって、追加の各国語キャラクタ・セットがサポートされます。

重要： [Content Server_Dir]/shared/classes ディレクトリ内にある Oracle JDBC ドライバ・ファイルのバージョンが 1 つのみであることを確認してください。不要なドライバ・ファイルは削除してください。

B.3.7.3 tnsnames.ora ファイルの編集

tnsnames.ora は、Oracle9i のネットワーク構成ファイルの 1 つです。データベースに対してサービスを構成しない場合は、このファイルを編集する必要があります。

1. ディレクトリ `[Oracle_Home]/network/admin` に移動し、テキスト・エディタでファイル `tnsnames.ora` を開きます。
2. このファイルに記述文字列を追加します。次にこの文字列の例を示します。

```
SERVER2.STELLENT.COM =
  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS_LIST =
      (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = server2.stellent.com) (PORT = 1521))
    )
    (CONNECT_DATA =
      (SERVICE_NAME = server2)
    )
  )
```

(ADDRESS エントリは 1 行に記述します。)

3. 変更済の構成ファイルを保存し、テキスト・エディタを終了します。

B.3.7.4 intradoc.cfg ファイルの編集

intradoc.cfg は、Content Server の構成ファイルの 1 つです。このファイルを、先にコピーした JDBC ドライバ (クラス・ファイル) への参照が含まれるように編集する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. ファイル `[CS-Install]/bin/intradoc.cfg` (`[CS-Install]` はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) に移動し、このファイルをテキスト・エディタで開きます。CLASSPATH エントリを更新 (このエントリがまだ存在していない場合は挿入) する必要があります。

```
JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc:$SharedDir/classes/ojdbc14.jar
```

`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。

重要： クラスパスには複数のバージョンの Oracle クラスを含めないでください。

2. 変更済の構成ファイルを保存し、テキスト・エディタを終了します。

B.3.7.5 Oracle 共有ライブラリ・ファイルのコピー

また、最新の Oracle 共有ライブラリ・ファイルをコンテンツ・サーバーにコピーする必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. ファイル `libocijdbc9.so` のバックアップを作成します。このファイルは、Oracle のインストール・ディレクトリの `lib` サブディレクトリにあります。
2. http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj_jdbc に移動し、Oracle9i リリース 2 に対応する適切な圧縮済共有ライブラリファイルをダウンロードします。
3. zip ファイルからファイル `libocijdbc9.so` を抽出し、次の場所にコピーします。

```
[Oracle_Home]/lib
```

ここで、`[Oracle_Home]` は Oracle のインストール・ディレクトリです。

(手順 1 でバックアップを作成した) 既存のファイルを上書きします。

重要： このファイルを Content Server ディレクトリ構造内の場所にコピーしないでください。

注意： Oracle のネイティブ XA（高可用性）機能を使用している場合、ダウンロード済の zip ファイルから libocijdbc9.so ではなくファイル libheteroxa9.so を使用できます。ファイル名に _g の付くファイルはデバッグ目的専用であり、通常は使用する必要はありません。

B.3.7.6 データベース設定の変更

最後の手順として、Content Server でデータベース設定を調整する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Database」タブを開きます。
3. OCI ドライバのオプションを選択します。
4. OCI ユーザー名およびパスワードを指定します。
5. Oracle Client で通信先の Oracle サーバーの識別に使用されるサーバー名を指定します。
6. 「OK」をクリックして設定を適用し、System Properties を終了します。
7. Content Server を停止して再起動します（再起動しないと変更内容が反映されません）。

これで、Oracle9i データベースとのインタフェースとなる OCI ドライバを使用できるようになります。

B.3.8 Oracle OCI ドライバの設定（Oracle 10g）

Oracle 10g との通信に、JDBC シン・クライアントではなく Oracle の OCI ドライバを使用するように選択することもできます。Content Server のインストール中にこのドライバを選択していない場合は、手動でこのドライバを設定する必要があります。

- [Oracle Instant Client のインストール](#)
- [Oracle JDBC ドライバのコピー](#)
- [intradoc.cfg ファイルの編集](#)
- [データベース設定の変更](#)

B.3.8.1 Oracle Instant Client のインストール

Oracle Instant Client をインストールするには、次の手順を実行します。

1. <http://www.oracle.com/technology/tech/oci/instantclient/instantclient.html> から Oracle 10g に対応する最新の Instant Client ソフトウェアをダウンロードします。基本のパッケージでも間に合いますが、必要に応じて他のパッケージ（たとえば、高可用性の要件や追加の言語サポートのための JDBC Supplement など）をダウンロードすることもできます。
2. Content Server を実行しているコンピュータに Oracle Instant Client をインストールします。
3. Oracle Instant Client を、Oracle サーバーと正常に通信できるように構成します。so ファイルを shared/[OS]/lib ディレクトリに配置します。

重要：作業を進める前に、Oracle Instant Client が作動していること、および正常に Oracle サーバーに接続していることを確認します。

注意：Oracle 10g に対応する Oracle Instant Client を使用することをお勧めします。ただし、Stellent データベースへの接続以外の目的でも OCI を使用する場合は、Oracle ソフトウェア配布メディアに含まれている完全な Oracle Client を使用することもできます。

B.3.8.2 Oracle JDBC ドライバのコピー

次の手順では、Oracle JDBC ドライバ（クラス・ファイル）をコンテンツ・サーバーにコピーします。Oracle10g に対応する最新の JDBC ドライバは、http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj_jdbc の Oracle Web サイトから入手できます。

ファイル `ojdbc14.jar` をダウンロードし、ディレクトリ `[CS-Install]/shared/classes/` にコピーします。`[CS-Install]` は、Content Server インスタンスのインストール・ディレクトリです（`/u1/apps/oracle/ucm/contentserver/shared/classes` など）。

オプションで、Oracle Web サイトからファイル `orai18n.jar` を前述の Content Server の場所にコピーすることもできます。このファイルによって、追加の各国語キャラクタ・セットがサポートされます。

重要：`[CS-Install]/shared/classes` ディレクトリ内にある Oracle JDBC ドライバ・ファイルのバージョンが 1 つのみであることを確認してください。不要なドライバ・ファイルは削除してください。

B.3.8.3 intradoc.cfg ファイルの編集

`intradoc.cfg` は、Content Server の構成ファイルの 1 つです。このファイルを、先にコピーした JDBC ドライバ（クラス・ファイル）への参照が含まれるように編集する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. ファイル `[CS-Install]/bin/intradoc.cfg`（`[CS-Install]` はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ）に移動し、このファイルをテキスト・エディタで開きます。CLASSPATH エントリを更新（このエントリがまだ存在していない場合は挿入）する必要があります。

```
JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc:$SharedDir/classes/ojdbc14.jar
```

`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。

重要：クラスパスには複数のバージョンの Oracle クラスを含めないでください。

2. 変更済の構成ファイルを保存し、テキスト・エディタを終了します。

B.3.8.4 データベース設定の変更

最後の手順として、Content Server でデータベース設定を調整する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Database」タブを開きます。
3. OCI ドライバのオプションを選択します。
4. アプリケーションに応じて JDBC 接続文字列を変更します。次の文字列書式を使用してください。

```
jdbc:oracle:oci:@[host]:[port]:[Oracle_instance]
```

次に例を示します。

```
jdbc:oracle:oci:@csdb4:1521:stellent
```

5. OCI ユーザー名およびパスワードを指定します。
6. Oracle Instant Client で通信先の Oracle サーバーの識別に使用されるサーバー名を指定します。
7. 「OK」をクリックして設定を適用し、System Properties を終了します。
8. Content Server を停止して再起動します（再起動しないと変更内容が反映されません）。

これで、Oracle 10g データベースとのインタフェースとなる OCI ドライバを使用できるようになります。

B.4 Sybase の設定

Content Server ソフトウェアのインストール中、Sybase を手動で設定するように選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

- [Content Server データベースの作成](#)
- [データベース表の作成](#)
- [JDBC 設定の構成](#)
- [クラスパスの指定](#)
- [コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築](#)
- [サーバーの再起動](#)

B.4.1 Content Server データベースの作成

Sybase 内に Content Server データベースをまだ作成していない場合は、作成する必要があります。詳細なガイドラインおよび考慮事項については、[第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」](#)を参照してください。

B.4.2 データベース表の作成

Content Server データベース内にデータベース表を作成する必要があります。このためには、Content Server ソフトウェアに付属の一連の SQL スクリプトを実行します。コンテンツ・サーバー表がすでに存在する場合は、削除後に再作成されます。

重要： デフォルトのデータベースがコンテンツ・サーバー・データベースになっていることを確認します。そうでない場合、次のスクリプト操作が間違ったデータベースに対して実行されます。

Sybase データベース表を作成するには、次の手順を実行します。

1. Content Server UNIX ログインを使用してログインします（第 3 章「インストール前のタスクおよび考慮事項」を参照）。
2. 作業ディレクトリを次のいずれかに変更します。
 - **Unicode 以外のテキスト・フィールド** (varchar) のデータベース表の場合：
[CS-Install]/database/sybase
 - **Unicode テキスト・フィールド** (nvarchar) のデータベース表の場合：
[CS-Install]/database/sybase/unicode

([CS-Install] は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。)
3. isql.exe を起動し、コンテンツ・サーバーの Sybase ユーザー名およびパスワードを使用してデータベースにログインします。
4. コマンドラインに（示されている順序で）次のコマンドを入力することにより、(Unicode か Unicode でないかに応じて) 適切なディレクトリ内でスクリプトを実行します。

```
isql -i intradoc.sql
isql -i default.sql
isql -i formats.sql
isql -i format_defaults.sql
isql -i users.sql
isql -i workflow.sql
```

[CS-Install] は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。

注意： Content Server ソフトウェアのインストール前に Sybase を設定する場合、SQL スクリプトは、ソフトウェア配布メディアの /UCM/ContentServer/database/sybase ディレクトリ（およびその unicode サブディレクトリ）にあります。

注意： これらの手順で初期インストールには存在していない表の削除が試行されるため、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。

5. 引き続き isql から、次のスクリプトも実行します。

```
[CS-Install]/database/sybase/admin/rowlocking.sql
```

([CS-Install] は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。) このスクリプトにより、データベースが表ロックから行ロックに変換されるため、Sybase データベースのデッドロックの発生が抑えられます。

6. すべてのスクリプトが完了したら、isql を終了します。

B.4.3 JDBC 設定の構成

コンテンツ・サーバーが Sybase と正常に通信するためには、Content Server で JDBC 設定を構成する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。

System Properties アプレットが起動されます。

2. 「Database」タブを開きます。
3. 次のオプションを選択します。
 - Use Java Database Connectivity
 - Sybase JDBC Driver
4. アプリケーションに応じて JDBC 接続文字列を変更します。次の文字列書式を使用してください。

```
jdbc:sybase:Tds:[DB_Host_Name]:[DB_Server_Port]/[DB_Name]
```

ここで、[DB_Host_Name] は Sybase サーバーのホスト名、[DB_Server_Port] はポート番号 (通常は 5000)、そして [DB_Name] は Content Server データベース名です。次に例を示します。

```
jdbc:sybase:Tds:cssybase:5000/stellent
```

5. また、必要に応じて JDBC ユーザー名およびパスワードを指定します。これらは、Sybase データベースへの接続に使用されるユーザー名およびパスワードです。

注意：JDBC ユーザー名およびパスワードは、Sybase 表の作成に使用したものと同じにしてください。JDBC ユーザーに表へのアクセス権限がない場合、コンテンツ・サーバーは起動できなくなります。

6. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.4.4 クラスパスの指定

コンテンツ・サーバーが Sybase と正常に通信するためには、データベースで使用する JDBC ドライバ・ファイルへの参照を指定する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。

System Properties アプレットが起動されます。

2. 「Paths」タブを開きます。
3. クラスパスを次のように指定します。

```
JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc:$SharedDir/classes/jconn3.jar
```

4. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.4.5 コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築

コンテンツ・サーバーのポータル・ページを再構築する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある Weblayout_Editor スクリプトを実行して、Weblayout Editor アプレットを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Options」メニューから「Update Portal」を選択します。
3. 「OK」をクリックします。

B.4.6 サーバーの再起動

最後の手順として、コンテンツ・サーバーを（再）起動する必要があります。データベースをプロキシ・サーバーにインストールした場合、必ず次の順序でコンテンツ・サーバーを再起動してください。

1. Sybase データベースがインストールされたプロキシ・サーバーを再起動します。
2. マスター・サーバーを再起動します。
3. 再びプロキシ・サーバーを再起動します。

これで、Content Server で Sybase を使用できるようになります。

B.5 DB2 の設定

Content Server ソフトウェアのインストール中、DB2 を手動で設定するように選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

- [DB2 JDBC ドライバ・ファイルのコピー](#)
- [Content Server データベースの作成](#)
- [データベース表の作成](#)
- [JDBC 設定の構成](#)
- [クラスパスの指定](#)
- [ネクスト・キー・ロックの無効化](#)
- [データベースの大 / 小文字の保存](#)
- [コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築](#)
- [サーバーの再起動](#)

注意： このバージョンの Content Server サーバーでは、DB2 の全文検索および索引付けはサポートされていません。

B.5.1 DB2 JDBC ドライバ・ファイルのコピー

Content Server で使用するために IBM DB2 を設定する最初の手順は、DB2 JDBC ドライバをコピーすることです。コピーするファイルは次のとおりです。

```
[DB2_Dir]/sqlllib/java/db2jcc_license_XX.jar
[DB2_Dir]/sqlllib/java/db2jcc.jar
```

(ここで、[DB2_Dir] は DB2 のプログラム・ルート・ディレクトリであり、XX は 2 文字のプラットフォーム・コード (通常は CU) です。)

コピー先は次のディレクトリです。

```
[CS-Install]/shared/classes
```

([CS-Install] は、Content Server のインストール・ディレクトリです)。

重要： DB2 を更新し、このプロセスによって DB2 JDBC ドライバ・ファイルを更新する場合は、ドライバ・バージョンがデータベース・バージョンと完全に一致するように、必ず新規のファイルを Content Server 共有クラス・ディレクトリにコピーしてください。

注意： DB2 のデフォルトの JVM および Java 関連クラスが DB2 サーバー上で使用されている場合、前述の手順を行えば問題ありません (これは、ほとんどの場合に適用されます)。DB2 管理者が DB2 に対してデフォルト以外の JVM および Java 関連クラスを使用するように選択した場合は、クライアントの JDBC ドライバ・バージョンが DB2 アプレット・サーバーの JDBC ドライバ・バージョンと完全に一致していることを確認する必要があります。

B.5.2 Content Server データベースの作成

DB2 内に Content Server データベースをまだ作成していない場合は、作成する必要があります。データベースを作成してそのデータベースに接続するには、DB2 コマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行します。

```
db2 CREATE DB [DB-Name] ALIAS [DB-Alias]
db2 CONNECT TO [DB-Alias] USER [User] USING [Password]
```

重要： Command Line Processor または Control Center は使用しないでください。

注意： 前述の行で、[DB-Name] はデータベース名、[DB-Alias] はデータベース別名です。

データベース名 (DB-Name) とデータベース別名 (DB-Alias) はどちらも、8 文字以下にしてください。

B.5.3 データベース表の作成

Content Server データベース内にデータベース表を作成する必要があります。このためには、Content Server ソフトウェアに付属の一連の SQL スクリプトを実行します。コンテンツ・サーバー表がすでに存在する場合は、削除後に再作成されます。

スクリプト・ファイルは、次の 2 つの場所にあります。

- データベース表に **Unicode でないテキスト・フィールド** (varchar) を作成する場合：

[CS-Install]/database/db2

- データベース表に **Unicode テキスト・フィールド** (nvarchar) を作成する場合：

[CS-Install]/database/db2/unicode

DB2 データベース表を作成するには、DB2 コマンド・ウィンドウで（示されている順序で）次のスクリプトを実行します。

- intradoc.sql
- default.sql
- formats.sql
- format_defaults.sql
- users.sql
- workflow.sql

重要： 前述のスクリプト・ディレクトリの両方に、dropall.sql という名前の SQL スクリプトも含まれています。このスクリプトを実行すると、すべてのデータベース表が削除されるため、実行しないでください。

注意： Content Server ソフトウェアのインストール前に DB2 を設定する場合、SQL スクリプトは、ソフトウェア配布メディアの /UCM/ContentServer/database/db2 ディレクトリ（およびその unicode サブディレクトリ）にあります。

B.5.4 JDBC 設定の構成

コンテンツ・サーバーが DB2 と正常に通信するためには、Content Server で JDBC 設定を構成する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。

System Properties アプレットが起動されます。

2. 「Database」タブを開きます。
3. 次のオプションを選択します。
 - Use Java Database Connectivity
 - Other JDBC Driver
4. JDBC ドライバ名を次のように指定します。

COM.ibm.db2.jcc.DB2Driver

5. JDBC 接続文字列を次のように指定します。

```
jdbc:db2://[DB2_Host_Name]:[DB_Server_Port]/[DB_Alias]
```

ここで、*[DB2_Host_Name]* は DB2 サーバーのホスト名、*[DB_Server_Port]* はポート番号（デフォルトでは 50000）、そして *[DB_Alias]* は Content Server データベースの別名です。次に例を示します。

```
jdbc:db2://csdb2:50000/stellent
```

6. また、必要に応じて JDBC ユーザー名およびパスワードを指定します。これらは、DB2 データベースへの接続に使用されるユーザー名およびパスワードです。

注意：JDBC ユーザー名およびパスワードは、DB2 表の作成に使用したものと同じにしてください。JDBC ユーザーに表へのアクセス権限がない場合、コンテンツ・サーバーは起動できなくなります。

7. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.5.5 クラスパスの指定

コンテンツ・サーバーが DB2 と正常に通信するためには、データベースで使用する JDBC ドライバ・ファイルへの参照を指定する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。

System Properties アプレットが起動されます。

2. 「Paths」タブを開きます。
3. クラスパスを次のように指定します。

```
JAVA_CLASSPATH_defaultjdbc:$SharedDir/classes/db2jcc.jar: $SharedDir/classes/  
db2jcc_license_cu.jar
```

（このすべてを 1 行に記述します。）

4. 「OK」をクリックして変更を保存し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.5.6 ネクスト・キー・ロックの無効化

次の DB2 環境変数を必ず設定してください。

```
db2set DB2_RR_TO_RS=on
```

重要：必ず、値には YES ではなく on を使用してください（一部の IBM 管理ガイドでは間違って報告されています）。

前述の環境変数を設定しない場合、トランザクションのデッドロックおよびタイムアウトがレポートされることがあります。前述の環境変数を設定すると、並行性問題の原因となることが報告されているネクスト・キー・ロックが無効になります。ネクスト・キー・ロックは、DB2 のトランザクション分離メカニズムであるリピータブル・リード（RR）で使用されます。これは基本的に、ファントム・リード（つまり、連続する 2 つの読取りにおいて、もう 1 つのスレッドにより別の行が変更されて問合せ基準と一致したために、結果セットが増大すること）を回避するために、現在の行のみでなく、索引内の次のキーを含む行に対してもロックを適用するものです。この暗黙的ロックによって、関連していないと考えられる 2 つのトランザクションが競合し、デッドロックを発生させる可能性があります。前述の DB2 環境変数を有効にすることによって、このようなデッドロック問題を回避できます。

B.5.7 データベースの大 / 小文字の保存

DB2 のデータベースの大 / 小文字を必ず維持してください。これを行うには、Content Server で設定を有効にします。これを行わない場合、コンテンツ・サーバーを起動できなくなります。Content Server で必要な設定を有効にするには、次のようにします。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある SystemProperties ユーティリティを起動します。
System Properties アプレットが起動されます。
2. 「Database」タブを開きます。
3. 「Enable database preserve case」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
4. 「OK」をクリックして変更を適用し、System Properties ユーティリティを終了します。

B.5.8 コンテンツ・サーバーのポータル・ページの再構築

コンテンツ・サーバーのポータル・ページを再構築する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバーのインストール・ディレクトリの /bin サブディレクトリ内にある Weblayout_Editor スクリプトを実行して、Weblayout Editor アプレットを起動します。
Weblayout Editor アプレットが起動されます。
2. 「Options」メニューから「Update Portal」を選択します。
3. 「OK」をクリックします。

B.5.9 サーバーの再起動

最後の手順として、コンテンツ・サーバーを（再）起動する必要があります。データベースをプロキシ・サーバーにインストールした場合、必ず次の順序でコンテンツ・サーバーを再起動してください。

1. DB2 データベースがインストールされたプロキシ・サーバーを再起動します。
2. マスター・サーバーを再起動します。
3. 再びプロキシ・サーバーを再起動します。

これで、Content Server で DB2 を使用できるようになります。

Content Server コンポーネント

この付録では、Content Server 10gR3 ソフトウェアに含まれるコンポーネントについて説明します。

- C-2 ページの「[Content Server コンポーネントについて](#)」
- C-2 ページの「[コンポーネントのインストール状況](#)」
- C-4 ページの「[ActiveDirectoryLdapComponent](#)」
- C-4 ページの「[ArchiverReplicationExceptions](#)」
- C-5 ページの「[CheckOutAndOpenInNative](#)」
- C-5 ページの「[CheckSCSHealth](#)」
- C-5 ページの「[CIS_Helper](#)」
- C-6 ページの「[ComponentTool](#)」
- C-6 ページの「[ConfigMigrationUtility](#)」
- C-6 ページの「[ContentAccess](#)」
- C-7 ページの「[ContentFolios](#)」
- C-7 ページの「[CoreUserInterfaceLibrary](#)」
- C-7 ページの「[CoreWebDav](#)」
- C-8 ページの「[DBSearchContainsOpSupport](#)」
- C-8 ページの「[FCKEditor](#)」
- C-8 ページの「[FileStoreProvider](#)」
- C-9 ページの「[Folders_g](#)」
- C-9 ページの「[FormEditor](#)」
- C-10 ページの「[InboundRefinerySupport](#)」
- C-10 ページの「[iTextComponent](#)」
- C-10 ページの「[LinkManager8](#)」
- C-10 ページの「[Localization](#)」
- C-11 ページの「[NativeOsUtils](#)」
- C-11 ページの「[OracleQueryOptimizer](#)」
- C-11 ページの「[OracleTextSearch](#)」
- C-11 ページの「[PopUpCalendar](#)」
- C-12 ページの「[ProxyConnections8](#)」
- C-12 ページの「[SecurityProviders](#)」

- C-12 ページの「[ThreadedDiscussions](#)」
- C-12 ページの「[UserProfileSchemaLoader](#)」
- C-13 ページの「[WebUrlMapPlugin](#)」
- C-13 ページの「[WsdGenerator](#)」
- C-13 ページの「[YahooUserInterfaceLibrary](#)」

C.1 Content Server コンポーネントについて

Content Server ソフトウェアには、多数のコンポーネント（実行時にコンテンツ・サーバーと対話するよう設計されたプログラム・コード・モジュール、リソース・モジュールおよびテンプレート・モジュール）が含まれています。これによって、コアに影響することなく、コンテンツ・サーバーの機能の追加や変更が行われます。

この付録では、Content Server のインストール中に、オプションとしてインストールまたは提供されたコンポーネントを扱います。ここでは、追加として配布されたコンポーネントや、Content Server 以外の製品で使用されるコンポーネントは扱いません。コンポーネントの更新の詳細は、リリース・ノートを参照してください。

注意：コンポーネントの詳細は、Content Server の開発ドキュメントを参照してください。

C.2 コンポーネントのインストール状況

一部のコンポーネントは Content Server 10gR3 ソフトウェアとともに常にインストールされますが、オプションで、インストールするよう明示的に選択する必要があるコンポーネントもあります。また、システム・コンポーネントとみなされ、無効化やアンインストールできないコンポーネントもあります。

一部のコンポーネントはデフォルトでインストールされ、有効になりますが、構成されるまで機能しません。これらのコンポーネント（FileStoreProvider など）は、構成前は無効化やアンインストールが可能ですが、構成後は無効化またはアンインストールしないでください。

他のコンポーネント（InboundRefinerySupport など）は、インストールされている他のコンポーネントのサポートに必要な場合は、無効化できます。詳細は、次の表を参照してください。

コンポーネント名	インストール	有効 (デフォルト)	標準 / システム・ コンポーネント	無効化または アンインストール
ActiveDirectoryLdapComponent	常に	はい	いいえ	LDAP を使用する Content Server 以外は、はい
ArchiverReplicationExceptions	常に	はい	はい	はい
CheckOutAndOpenInNative	常に	はい	いいえ	構成前は、はい
CheckSCSHealth	常に	はい	はい	はい
CIS_Helper	常に	はい	はい	Content Integration Suite が使用されていない場合は、はい
ComponentTool	常に	はい	はい	はい
ConfigMigrationUtility	常に	はい	はい	はい

コンポーネント名	インストール	有効 (デフォルト)	標準 / システム・ コンポーネント	無効化または アンインストール
ContentAccess	常に	はい	いいえ	Dynamic Converter が使用されていない場合は、はい
ContentFolios	オプション	はい	いいえ	構成前は、はい
CoreUserInterfaceLibrary	常に	はい	はい	いいえ
CoreWebDav	常に	はい	はい	構成前は、はい
DBSearchContainsOpSupport	常に	はい	はい	Oracle データベースを使用していない場合のみ
FCKEditor	常に	はい	はい	FormEditor が使用されていない場合は、はい
FileStoreProvider	常に	はい	いいえ	構成前は、はい
Folders_g	オプション	はい	いいえ	はい
FormEditor	常に	はい	いいえ	構成前は、はい
InboundRefinerySupport	常に	はい	いいえ	Content Server で Inbound Refinery を使用していない場合は、はい
iTextComponent	常に	はい	はい	いいえ
LinkManager8	オプション	はい	いいえ	はい
Localization	常に	はい	はい	Content Server インスタンスが英語のみの場合は、はい
NativeOsUtils	常に	はい	はい	いいえ
OracleQueryOptimizer	Oracle DB のみ	はい	いいえ	Oracle データベースを使用していない場合は、はい
OracleTextSearch	オプション	はい	いいえ	Content Server が全文検索用に構成されていない場合は、はい
PopUpCalendar	常に	はい	はい	いいえ
ProxyConnections8	常に	はい	はい	構成前は、はい
SecurityProviders	常に	はい	いいえ	いいえ
ThreadedDiscussions	オプション	はい	いいえ	はい

コンポーネント名	インストール	有効 (デフォルト)	標準 / システム・ コンポーネント	無効化または アンインストール
UserProfileSchemaLoader	常に	はい	はい	いいえ
WebUrlMapPlugin	常に	はい	はい	いいえ
WsdGenerator	常に	はい	はい	はい
YahooUserInterfaceLibrary	常に	はい	はい	いいえ

標準コンポーネントとシステム・コンポーネントは、Content Server の「Component Manager」ページで「Hide Standard and System Components」チェック・ボックスが選択されている場合、インストールされたコンポーネントのリストに表示されません。

ContentAccess および NativeOsUtils 以外のすべてのコンポーネントは、Content Server 10gR3 配布パッケージの /packages/allplatform ディレクトリにあります。ContentAccess コンポーネントおよび NativeOsUtils コンポーネントはプラットフォーム固有で、/packages/[OS-Name] ディレクトリ (/packages/solaris など) にあります。

C.3 ActiveDirectoryLdapComponent

ActiveDirectoryLdapComponent コンポーネントは、Content Server LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) プロバイダの拡張です。これによって、コンテンツ・サーバーで LDAP プロバイダを使用し、Microsoft Active Directory サーバーに格納されている情報と照合してユーザーを認証することが可能になります。プロバイダでは、Active Directory から、グループ・メンバーシップと、指定されたユーザー・メタデータを取得します。

ネットワークが次の状況の場合、Active Directory と LDAP とを組み合わせた使用をお勧めします。

- Content Server は、Internet Explorer 以外のクライアント・ブラウザを使用してアクセスされます。
- Content Server は、UNIX オペレーティング・システムにインストールされています。
- Content Server は、IIS 以外の Web サーバーを使用する Windows オペレーティング・システムにインストールされています。
- コンテンツ・サーバーとユーザー・ベース・コンピュータとの間にファイアウォールがあります。

注意： LDAP 認証の詳細は、
[CS-Install]/weblayout/help/documentation/admin/
managing_security_10en.pdf を参照してください。

C.4 ArchiverReplicationExceptions

ArchiverReplicationExceptions コンポーネントによって、管理者は、失敗したインポートがレプリケーションを停止しないようにできます。これは、失敗したインポートを取得して例外アーカイブに格納し、そのようなインポートの失敗が発生したことを管理者に知らせる電子メールを送信することで行われます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/ArchiverReplicationExceptions/
install_admin_ARE_10.pdf を参照してください。

C.5 CheckOutAndOpenInNative

CheckOutAndOpenInNative コンポーネントによって、ユーザーは、WebDAV 準拠のアプリケーションでコンテンツ・アイテムをコンテンツ・サーバーから直接チェックアウトしたり開いたりすることができます。

エンドユーザーは、検索結果ページやコンテンツ情報ページの「Check Out」オプションおよび「Open」オプションを使用して、コンテンツ・アイテムをコンテンツ・サーバーから直接チェックアウトしたり開いたりすることができます。ネイティブ・アプリケーションが WebDAV 準拠（Microsoft Word など）の場合、コンテンツ・アイテムはネイティブ・アプリケーションで開かれます。ユーザーは、そのアプリケーションを使用して、コンテンツ・アイテムを編集したり、コンテンツ・サーバーに再びチェックインすることができます。ネイティブ・アプリケーションでコンテンツ・アイテムを保存するたびに、新規のリビジョンのアイテムがコンテンツ・サーバーにチェックインされます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/CheckoutAndOpenInNative/check_out_and_open.pdf
を参照してください。

C.6 CheckSCSHealth

CheckSCSHealth コンポーネントは、コンテンツ・サーバーで使用される次のサービスを追加します。

- **CHECK_SEARCH_HEALTH:** このサービスは、検索を実行して、検索エンジンが正常に機能していることを確認します。リクエスト内に QueryText が渡されない場合、空白の検索が実行されます。
- **CHECK_FS_HEALTH:** このサービスは、すべての既知のファイルシステム（コンテンツ・サーバーの vault、weblayout、data および shared ディレクトリを含む）にファイルを作成します。
- **CHECK_PROVIDER_HEALTH:** このサービスは、すべての既知のプロバイダの状態をテストします。リクエストで pName（SystemDatabase、SystemServerSocket など）が渡される必要があります。
- **CHECK_ALL_HEALTH:** このサービスは、すべてのプロバイダ、ファイルシステムおよび検索エンジンの状態を確認します。

戻されたステータス・コードが 0 未満の場合、エラーが発生しています。

これらのサービスは主に、コンテンツ・サーバーを Nagios (<http://www.nagios.org>) などのサード・パーティの監視ユーティリティと統合する場合に役立ちます。このコンポーネントには、Nagios プラグインとして使用できる Perl スクリプトが（コンポーネントの perl サブディレクトリ内に）含まれています。また、別のサード・パーティの監視ユーティリティとともに動作するようにコンポーネントを変更することもできます。

注意： このコンポーネントの詳細（新規サービスと Nagios 監視ユーティリティとの統合手順を含む）は、
[CS-Install]/custom/CheckSCSHealth/readme.txt を参照してください。

C.7 CIS_Helper

CIS_Helper コンポーネントは、Content Integration Suite (CIS) で使用されます。コンテンツ・サーバーと CIS レイヤーとの間の解析メソッド・コールを支援します。CIS API を介して Content Server をコールする場合に使用されるサービスもいくつか含まれています。具体的には、Dynamic Converter レスポンスのアプリケーション・サーバー環境へのストリーミングを可能にするサービスや、特定の CIS 構成でのファイル転送用の追加構成オプションをサポートするサービスが含まれています。

C.8 ComponentTool

ComponentTool コンポーネントは、Content Server コンポーネントをインストール、有効化および無効化するためのコマンドライン・ツールを提供します。

このコンポーネントをインストールした後、ランチャの `simlink` またはコピーを作成してください。

```
cd bin && ln -s Launcher.sh ComponentTool
```

このコンポーネントの使用方法は、次のとおりです。

```
ComponentTool --install|--enable|--disable path|name
ComponentTool --list-enabled|--list-disabled|--list|--help
```

注意： このコンポーネントの詳細は、
[\[CS-Install\]/custom/ComponentTool/readme.txt](#) を参照してください。

C.9 ConfigMigrationUtility

ConfigurationMigrationUtility コンポーネントを使用すると、別のインスタンスに移行するときにコンテンツ・サーバー・インスタンスの要素を選択できます。これによって、システム管理者は、Content Server の特定の構成をエクスポートおよびインポートできます。

個々の要素（ワークフロー・トークン、コンテンツ・タイプなど）を選択することも、セクション全体（すべてのユーザー関連メタデータ、ワークフローに関連するすべてのメタデータなど）を選択することもできます。また、ある時点でのコンテンツ・サーバーのスナップショットを作成するために、コンテンツ・サーバー全体をエクスポートおよびインポートすることもできます。このユーティリティは、システムをテストから本番に移行したり、コンテンツ・サーバーのバージョンをアップグレードする場合に使用できます。移行ツールを使用することで、本番環境で旧バージョンのコンテンツ・サーバーを保持しながら、新しいバージョンのコンテンツ・サーバーで新しい機能をテストできます。

エクスポート構成はそれぞれ 1 つのバンドルとしてパッケージ化されます。このバンドルには、別のシステムに構成を再作成するために必要な情報が含まれています。バンドルは、他のシステムと簡単に共有できる zip ファイルです。

注意： Configuration Migration Utility のドキュメントは、コンテンツ・サーバーのシステム管理者用オンライン・ヘルプ、または PDF ファイル
[\(\[CS-Install\]/weblayout/help/documentation/admin/sysmigration_cserver_10en.pdf\)](#) を参照してください。

C.10 ContentAccess

ContentAccess コンポーネントには、ネイティブ・コンテンツ・アイテム（Microsoft Word ドキュメントなど）の Web 表示可能形式（HTML ファイル、PDF ファイルなど）への変換に使用される Outside In フィルタが用意されています。また、全文抽出機能もあります。システム・コンポーネントで、無効化やアンインストールはできません。

注意： ContentAccess コンポーネントは、サポートされているプラットフォームごとに異なります。zip ファイルは、Content Server 配布パッケージの `/packages/[os_name]` ディレクトリにあります。

C.11 ContentFolios

Content Folios コンポーネントでは、Content Server のセキュアな環境から、複数のコンテンツ・アイテムの論理グループの編成、追跡およびアクセスを迅速で効率よく行う方法が提供されます。たとえば、近く配布するパンフレットに関係するすべてのアイテム（イメージ、ロゴ、法定開示、広告コピーなど）をまとめ、ワークフロー・プロセスを介して送信できます。承認後、すべての関連コンテンツをダウンロードし、印刷にまわすことができます。あるいは、新規プロジェクトで、コンテンツ・アイテムがチェックインされると、すべての関連コンテンツ・アイテムが階層構造にまとめられ、階層の特定箇所へのアクセスが制限される仮想空間が必要な場合もあります。あるいは、ビデオに訴権放棄とナレーションのテキストの関連付けやトラックの追加が必要な場合もあります。これらはすべて、Content Folios で行うことができます。

厳密に言えば、コンテンツ・フォリオは、要素を使用してコンテンツ・サーバー内のノード、スロットと、指定されたコンテンツ・アイテムの階層構造を定義するコンテンツ・サーバーにチェックインされている XML ファイルです。実際は、コンテンツ・フォリオは、Content Server に格納されているコンテンツを構成できる論理グループすなわちフレームワークです。単純なフォリオはフラットなコンテナですが、高度なフォリオでは、フォルダの階層にコンテンツがネストします。高度なフォリオでは、階層はコンテンツ・アイテムの編成前に設定される場合もありますが、アイテムの編成時または編成後に作成される場合もあります。既存のフォリオは、コンテンツを追加することも、変更されないようロックすることもできます。コンテンツ・アイテムは、Content Server の検索では単純なフォリオに追加され、新規アイテムのコンテンツ・サーバー・リポジトリへのチェックインや、以前にチェックインされたコンテンツの検索では高度なフォリオに追加されます。これらはすべて、フォリオ・インタフェースを使用して行われます。高度なフォリオには、Web サイトや共有ネットワーク・ドライブなどの外部リソースへのハイパーリンクも含めることができます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/weblayout/help/documentation/admin/
admin_guide_folios_10en.pdf を参照してください。

C.12 CoreUserInterfaceLibrary

CoreUserInterfaceLibrary コンポーネントには、他の多数のコンポーネントで使用される、共有 JavaScript および動的 HTML ページが含まれます。システム・コンポーネントで、無効化やアンインストールはできません。

C.13 CoreWebDav

CoreWebDav コンポーネントは、コンテンツ・サーバーを拡張して、コンテンツ・サーバーが DAV (Distributed Authoring and Versioning) リクエストに応答できるようにします。これにより、WebDAV プロトコルをサポートするクライアントを使用して、リモートでコンテンツをオーサリングおよび管理できます。たとえば、コントリビュータは、Content Server 独自の Web ブラウザ・インタフェースではなく、Windows のエクスプローラや Microsoft Office 製品を使用して、リポジトリ内のコンテンツをチェックイン、チェックアウトおよび変更できます。

通常の Content Server 10gR3 インストールでは、WebDav コンポーネントによってサーバーが `http://[Server-Host]/[Instance-Name]/idcplg/webdav` リクエストに応答します。

注意： このコンポーネントの詳細（インストールの考慮事項を含む）は、
[CS-Install]/custom/CoreWebdav/readme.html を参照してください。

重要： 10gR3 より前のリリースの Content Server 専用の WebDav コンポーネントもあります。このコンポーネントがコンテンツ・サーバーで有効な場合（システムのアップグレード後など）必ず無効にしてください。そうしないと、コンテンツ・サーバーで WebDAV 機能を使用できません。

C.14 DBSearchContainsOpSupport

DBSearchContainsOpSupport コンポーネントでは、メタデータのみの場合も、全文の場合（データベースでサポートされている場合）も、hasAsWord (Contains) 演算子のサポートがデータベースの検索および索引付けに追加されます。

SQL Server および Oracle の場合、「Administration」ページの「Zone Fields Configuration」リンクをクリックして、全文索引にする索引を定義します。「Zone」フィールドは、hasAsWord 演算子を使用して検索可能です。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/DBSearchContainsOpSupport/readme.txt を参照してください。

重要： テキスト・フィールドをゾーン・テキスト・フィールドに変更する操作は、非常に時間がかかることがあります。テキストを解析して全文索引を作成するために必要な時間は、コンテンツ・サーバー内のコンテンツ・アイテムの数と、テキスト・フィールドに保存されているテキストの量によって異なります。ただし、テキスト・フィールドの索引付け完了後、コンテンツ・アイテムの更新および追加時に大きなパフォーマンス問題が発生することはありません。

C.15 FCKEditor

FCKEditor コンポーネントには、FCKEditor の実行に必要な JavaScript ライブラリが用意されています。FCKEditor は、軽量な JavaScript ベースの HTML テキスト・エディタで、クライアント・コンピュータでのインストールは不要です。このコンポーネントは Web Form Editor (FormEditor コンポーネント) に必要で、コンテンツ・サーバーのカスタマイズで軽量な HTML テキスト・エディタの実装にも使用できます。

注意： FCKEditor の詳細は www.fckeditor.net を参照してください。

C.16 FileStoreProvider

FileStoreProvider コンポーネントは、Content Server のコアに付属している標準のファイル格納および編成メカニズムを拡張して、特に大規模なシステムに有用な多くの拡張機能を追加します。このコンポーネントは Content Server インタフェース内にファイル・ストア機能を公開し、追加の構成オプションを許可します。たとえば、ファイルシステムを使用せずに、ラージ・オブジェクト (LOB) データ型を使用してデータベースにコンテンツが格納されるように、Content Server を構成できます。これによるメリットは、リポジトリ管理とデータベース管理を統合することで一貫したバックアップ・プロセスにできること、ファイルシステム・アプローチにおけるディレクトリ構造やディレクトリ当たりのファイル数に関連する制限を緩和できること、さらに、Content Server の拡大や縮小を適切に行うためにコンテンツをシステム間で簡単に分散できることです。また、FileStoreProvider コンポーネントを使用すると、一般にファイルシステムとは関連しない様々なタイプのストレージ・デバイス（たとえば、一部の業務用途で必要なコンテンツ対応ストレージ・システムや書き込み専用デバイス）を使用できます。

警告： FileStoreProvider をインストールしてデフォルトのファイル・ストアをアップグレードした後は、FileStoreProvider のアンインストールまたは無効化を行わないでください。標準の Content Server のインストール中に FileStoreProvider をインストールし、デフォルトのファイル・ストアをアップグレードしなかった場合は、『File Store Provider インストレーションおよび管理ガイド』に記載されている手順に従ってこのコンポーネントをアンインストールできます。

注意： File Store Provider のドキュメントは、コンテンツ・サーバーのシステム管理者用オンライン・ヘルプ、または PDF ファイル ([CS-Install]/weblayout/help/documentation/admin/admin_FS_provider_10en.pdf) を参照してください。

C.17 Folders_g

Folders_g コンポーネントでは、Content Server のコンテンツに、Windows のエクスプローラのフォルダ・ツリーのような仮想フォルダ（階層フォルダ）形式の階層フォルダ・インタフェースが提供されます。仮想フォルダによって、複数レベルのフォルダ構造を作成できます。

仮想フォルダには多くの利点があります。

- ユーザーは、見慣れたフォルダ形式のインタフェースでドリルダウンしてコンテンツを探すことができます。
- ユーザーは、特定のフォルダを使用してチェックインすることで、デフォルト・メタデータをコンテンツ・アイテムに適用できます。
- システム管理者は、フォルダを適切に設定することで、コンテンツ・アイテムに適用されるデフォルト・メタデータを制御できます。また、ユーザーが（システム管理者によって設定された）特定のフォルダを使用してコンテンツ・アイテムをチェックインすると、事前に設定したデフォルト・メタデータがアイテムに適用されます。

注意： Folders_g のドキュメントは、コンテンツ・サーバーのシステム管理者用オンライン・ヘルプ、または PDF ファイル ([CS-Install]/weblayout/help/documentation/admin/admin_folders_webdav_10en.pdf) を参照してください。

C.18 FormEditor

FormEditor コンポーネントでは、HCSF（Hypertext Web Form Editor Files）や関連する Idoc リソースを作成するための、複数プラットフォームに対応するブラウザベースのビジュアル設計環境が提供されます。

HCSF は、XML 形式の Idoc Script や、コンテンツ・サーバーにチェックインされ、コンテンツ・コンシューマが実行できる他のスクリプトを使用した HTML フォームの作成に使用できます。完了した各フォームの XML データ・セットは、別々のコンテンツ・アイテム（送信したデータが XML で埋め込まれた HCSP ファイル）としてコンテンツ・サーバーにチェックインされます。

これらの HCSP ファイルは全文索引付けされ、他の処理を行うことができます（ワークフローやサブスクリプションの使用など）。

IDOC ファイルには、HCSF ファイルでのロードや表示が可能な HTML および Idoc Script リソースが含まれます。

Web Form Editor は Content Server と緊密に統合されています。これによって、フォームに表示するメタデータ・フィールドの選択やエディタ・インタフェースからコンテンツ・サーバーへのフォーム定義の保存が可能になります。また、Content Server インクルードを使用して、XML データ・アイランド・フィールドと Content Server メタデータ・フィールドの両方を表示できます。Web Form Editor では、チェックイン、更新、情報、検索の各ページで通常使用されているインクルードが使用されます。つまり、Content Server フィールドがフォームに使用されている場合、Content Server の規則に従って表示されます。たとえば、フィールドにビューが関連付けられている場合、フィールドはビューとともに表示されます。

注意： このコンポーネントの詳細は、[CS-Install]/custom/FormEditor/web_form_editor_10en.pdf を参照してください。

C.19 InboundRefinerySupport

InboundRefinerySupport コンポーネントでは、1 つ以上の Inbound Refinery またはリファイナリを接続する機能と構成オプションが Content Server に追加されます。

C.20 iTextComponent

iTextComponent コンポーネントでは、PDF 配布ライブラリが提供され、コンポーネントが PDF ドキュメントを共有することができます。

C.21 LinkManager8

LinkManager8 コンポーネントは、索引付けされたドキュメントの URL リンクを抽出し、パターン・エンジンに従って URL を評価、フィルタ処理および解析します。その後、結果がデータベース表に格納されます。現在、このコンポーネントは、必要に応じて **HtmlExport** を使用してファイルを解析可能な（つまりテキスト）形式に変換します。リンク抽出は索引付けサイクル中に行われるため、リリースされたドキュメントのリンクのみが管理されます。つまり、複数のリビジョンがある場合、最新のリビジョンのみの表にエントリが含まれます。

このコンポーネントは、ブラウザ・ユーザー・インタフェースを拡張して、リンク表の検索および管理を可能にします。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/LinkManager8/readme.txt を参照してください。

C.22 Localization

Localization コンポーネントには、Content Server、Refinery、Records Management および他の多数のコンポーネントのローカライゼーション・リソースが含まれます。使用可能な言語は次のとおりです。

- アラビア語 (ar)
- ドイツ語 (de)
- 英語 (en)
- スペイン語 (es)
- フランス語 (fr)
- イタリア語 (it)
- 日本語 (ja)
- 韓国語 (ko)
- オランダ語 (nl)
- ポルトガル語 (ブラジル) (pt.br)
- タイ語 (th)
- 中国語 (簡体字) (zh.cn)
- 中国語 (繁体字) (zh.tw)

C.23 NativeOsUtils

NativeOsUtils コンポーネントには、Java VM で提供されない様々なネイティブ OS メソッドへのネイティブ・コールの Java ラッパーが用意されています。これには、Windows でのレジストリ操作、UNIX ファイルでのトグルの状態、ソフト / ハード・ファイル・リンク、Windows でのプロセス間通信や、その他多くの簡単な OS API が含まれます。

注意： NativeOsUtils コンポーネントは、サポートされているプラットフォームごとに異なります。zip ファイルは、Content Server 配布パッケージの `/packages/[os_name]` ディレクトリにあります。

C.24 OracleQueryOptimizer

OracleQueryOptimizer コンポーネントは、Oracle データベースを使用する大規模なコンテンツ・サーバー・インストールに対して有効です。(リソースとして定義された) 静的問合せおよびデータ・ソースを分析し、Oracle 固有のヒントを使用して問題のある問合せおよびデータ・ソースを最適化します。また、効率の悪い問合せを削除するための ExpiredContent および Indexer の変更も含まれています。

さらに、このコンポーネントには、データ・ソースおよび JDBC ワークスペースを使用して実行される問合せを調べるための動的問合せオプティマイザも備わっています。このオプティマイザによって、データ・ソースの問合せおよび WHERE 句が解析され、ルール表に従って最適ヒントが選択されます。選択されたヒントは、問合せの実行前に問合せに追加されます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
`[CS-Install]/custom/OracleQueryOptimizer/readme.html` を参照してください。

C.25 OracleTextSearch

OracleTextSearch コンポーネントでは、Oracle Text を Universal Content Management (UCM) の全文検索の主エンジンとして使用するユーザーに、Autonomy VDK を使用する UCM で提供される検索機能と同等かそれ以上の機能が提供されます。このコンポーネントによって、管理者は、検索索引用に最適化する特定のメタデータ・フィールドを指定したり、他のフィールドのカスタマイズを行えます。このコンポーネントで、高速索引再構築および索引最適化も行えます。

OracleTextSearch コンポーネントはデフォルトでインストールされ、有効になりますが、適切に機能させるには、インストール後に構成する必要があります。インストール後の手順の詳細は、Oracle Text Search の管理ガイドを参照してください。

C.26 PopUpCalendar

PopUpCalendar コンポーネントを使用すると、コンテンツ・サーバーのチェックイン・ページおよび更新ページのすべての日付フィールドの右側にカレンダー・アイコンが表示されます。ユーザーがアイコンをクリックすると、カレンダー・ダイアログがポップアップ表示され、ユーザーは日付をクリックして選択できます。ダイアログによって、選択された日付が、親ページの関連付けられた入力フィールドにロードされます。このコンポーネントによって、ユーザーは日付を手早く選択でき、過去と未来の月と年との間を簡単に移動できます。また、ユーザーが選択した日付をコンポーネントで自動的に日付フィールドに移入するため、日付書式や入力のミスがなくなります。

ウィンドウがポップアップで開くのではなく JavaScript を介してダイアログが表示されるように、コンポーネントを構成することもできます。

このコンポーネントによって表示される日付書式は、ユーザー・ロケールの日付書式プロパティで制御されます。また、対応する変換文字列が `wwstrings.htm` ファイル内に存在する場合、日付文字列をローカライズすることもできます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/PopUpCalendar/readme.txt および同じディレクトリの
admin_guide_popupcal_752en.pdf を参照してください。

C.27 ProxyConnections8

ProxyConnections8 コンポーネントは、パスワードで保護されたコンテンツ・サーバーへの接続を作成したり、資格証明マップを作成するためのユーザー・インタフェースを提供します。資格証明マップは、外部ソース（具体的には、ADSI 統合を含む NT 統合ソリューション）からの資格証明をマップする場合にも使用できます。

また、ProxyConnections8 コンポーネントを使用すると、HTTP プロトコルを使用してコンテンツ・サーバーをプロキシ処理できるようになります。このコンポーネントによって、複数のコンテンツ・サーバー（マスター・サーバーとプロキシ・サーバー）間での通信を可能にする httpoutgoing プロバイダが追加されます。特に、weblayout/groups/ に対する静的 URL リクエストはすべて別の Web サーバーに転送されるため、（コンテンツ・サーバー・レベルでの通常のプロキシと同様に）Web サーバー・レベルでのプロキシが作成されます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/ProxyConnections8/readme.txt を参照してください。

C.28 SecurityProviders

SecurityProviders コンポーネントでは、Content Server の標準の着信ソケット・プロバイダと送信ソケット・プロバイダに、SSL 暗号化と認証を提供します。このコンポーネントでは、基本的なソケット・プロバイダが 2 通りに拡張されます。まず、ソケット・レイヤーに SSL セキュリティと認証が追加されます。また、SSL ソケットの作成と分解にはコストがかかるため、SSL 着信 / 送信プロバイダは keepalive と接続プール・ロジックを使用するよう設計されています。これで、SSL によるオーバーヘッドを回避できます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/SecurityProviders/readme.txt を参照してください。

C.29 ThreadedDiscussions

ThreadedDiscussions コンポーネントを使用すると、別のドキュメントに関するディスカッション・ドキュメントを作成できます。通常のドキュメントのコンテンツ ID に _d を追加することによって、元のドキュメントに関するディスカッションにフォーカスした新しい HCSP 形式のドキュメントが作成されます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/ThreadedDiscussions/readme.html を参照してください。

C.30 UserProfileSchemaLoader

UserProfileSchemaLoader コンポーネントによって、管理者は、ユーザー・プロファイル・データのビューを作成できます。このコンポーネントは、ContentFolios コンポーネントによって使用されています。システム・コンポーネントで、無効化やアンインストールはできません。

C.31 WebUrlMapPlugin

WebURLMapPlugin コンポーネントを使用すると、マッピング用の簡易置換スクリプトを使用して、URL をコンテンツ・サーバー内の他の URL にマップできます。

「Filter Administration」ページの下部にある関連付けられたリンクをクリックすることで、Web URL を編集できます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/WebUrlMapPlugin/readme.txt および
[CS-Install]/weblayout/help/documentation/admin/
managing_system_10en.pdf を参照してください。

C.32 WsdlGenerator

WsdlGenerator コンポーネントを使用すると、ユーザーは SOAP ベースのメッセージをリクエストし、SOAP ベースのレスポンスを受信できます。このコンポーネントでは、次の 2 つの形式がサポートされます。1 つは、Content Server DataBinder オブジェクトとほとんど同じ汎用の形式で、もう 1 つは、他のアプリケーションで Web サービスとして使用される WSDL 内にカプセル化できるカスタム形式です。また、このコンポーネントでは、SOAP with Attachments および SOAP with DIME という 2 つのマルチパート形式もサポートされています。これらの形式によって、実際の SOAP メッセージとは別個のメッセージ添付として、ファイル・コンテンツをコンテンツ・サーバーにアップロードしたり、コンテンツ・サーバーからダウンロードできます。

注意： このコンポーネントの詳細は、
[CS-Install]/custom/WsdlGenerator/soap.txt および
[CS-Install]/weblayout/help/documentation/addons/
soap_wsdl_10en.pdf を参照してください。

C.33 YahooUserInterfaceLibrary

YahooUserInterfaceLibrary には、DOM スクリプト、DHTML、AJAX などの手法を使用して高度にインタラクティブな Web アプリケーションを構築するための JavaScript のユーティリティおよびコントロールのセットが用意されています。いくつかのコア CSS リソースも含まれています。このコンポーネントはシステム・コンポーネントで、無効化やアンインストールはできません。

データベースの検索および索引付けの設定

Content Server 10gR3 は、デフォルトで、検索および索引付け機能を提供するためにデータベースを使用するように設定されます。そのまま利用可能なデータベース構成により、メタデータのみを検索および索引付けが提供されます。ただし、Oracle および SQL Server のデフォルト構成を変更して、全文検索および索引付けを有効にすることもできます（D-4 ページの「[全文検索 / 索引付けを行うためのデータベースの設定](#)」を参照）。Sybase および DB2 では、メタデータ検索および索引付けのみがサポートされています。

Content Server と異なる検索ソリューションの統合を可能にするアドオン（Verity や FAST など）を使用できます。サポートされている検索ソリューションごとに、個別の統合ドキュメントが使用可能です。

D.1 データベースの検索および索引付けに関する考慮事項

データベースの検索および索引付けに関連して、次の重要な考慮事項に注意してください。

- [すべてのデータベース](#)
- [Oracle](#)
- [SQL Server](#)

D.1.1 すべてのデータベース

検索ソリューションを選択する前に、データベースの検索および索引付けに関連して、次の一般的な考慮事項に注意してください。

- 新規またはカスタムのメタデータ・フィールドが追加されたときに、検索索引を再構築する必要はありません。
- 全文索引付け用にデータベースを使用する場合、各コンテンツ・アイテムのテキストは、全文検索用にデータベースに格納されます。このため、データベースのサイズを適切に設定することが重要です。索引付け可能なドキュメントの数によっては、`IdcColl1` 表および `IdcColl2` 表が非常に大きくなることがあります。
- 全文索引付け用にデータベースを使用する場合、コンテンツ・アイテムは、チェックイン時にバイナリ・ファイルとして送信されます。次に、データベースによってテキスト抽出と索引付けが処理され、JDBC レイヤーを介して SQL 文を使用して検索が実行されます。
- システム・データベースとして Sybase を使用しているときに全文検索および索引付けを実装する場合は、オプションのアドオンの 1 つを使用して、外部検索ソリューション（たとえば、Verity や FAST など）を Content Server と統合する必要があります。SQL Server および Oracle で、データベースの全文検索および索引付けのかわりに、これらの検索ソリューションを使用することもできます。
- データベースのフルテキストでは、(Verity とは異なり) ゾーン検索およびトークン化検索は実行されません。
- メタデータ検索ではアクセントの非区別が使用可能ですが、全文検索では使用できません。
- データベース検索 / 索引付けでは、(Verity とは異なり) PDF 強調表示はサポートされません。
- メタデータ検索のデフォルトの演算子は、Matches に設定されています。これは、Content Server では、メタデータ・フィールドに入力された単語または句に完全一致するものを検索するということを意味します。オプション・リストから検索条件を選択する際に、その条件に 1 つ以上の空白が含まれている場合、Content Server ではこれが句とみなされ、条件が引用符で囲まれます。引用符を含む問合せが構成されるため、Matches を使用する場合に検出される結果はありません。これは、Site Studio を使用する場合には特に重要な注意点です。たとえば、デフォルトの Matches 演算子を使用し、オプション・リストから「Layout File」を選択して Web サイト・オブジェクト・タイプを検索する場合、メタデータ・フィールドには "Layout File" が移入され、問合せは次のように構成されます。

```
xWebsiteObjectType <matches> ~"Layout File"~
```

これを修正するには、標準のテキスト・エディタで `config.cfg` ファイルを開き、`AllowMatchUseInternetSearch` を追加して、次のように 1 に等しい設定にします。

```
AllowMatchUseInternetSearch=1
```

`config.cfg` ファイルは、`<install_dir>/<instance_dir>/config` ディレクトリにあります。

- データベース内に 100,000 を超えるアイテムがある場合、データベース検索の実行時、問合せページから作成された問合せのパフォーマンスに大幅な差が生じます。パフォーマンスを高めるには、次の操作を実行します。

1. [CS-Install]\config\config.cfg ファイルで次を設定し、特定の検索条件を満たす項目の合計数（ヒット合計）の計算を無効化します。

```
DisableTotalItemsSearchQuery=false
```

2. 検索中に通常使用されるすべてのフィールドに、索引があることを確認します。特に dSecurityGroup には索引が必要であり、アカウントを使用している場合には dDocAccount にも索引が必要です。
3. 索引のあるフィールドに値を入力するようにユーザーを指導します。検索演算子を選択する際には、「substring」ではなく「matches」または「starts with」を使用します。

依然としてパフォーマンスに問題がある場合は、ソート順序機能を削除し、問合せページで実行可能な問合せを制限するための特殊なコンポーネントが必要です。

D.1.2 Oracle

Oracle を使用するデータベース検索について、次の考慮事項に注意してください。

- Content Server は、Oracle 10g ではダブルバイト言語をサポートしますが、Oracle 9i データベースでは西ヨーロッパ言語（つまり、空白区切り言語）のみサポートします。
- Oracle9i での全文索引付けは、チェックイン後すぐに実行されるのではなく、夜間の最適化で 60 秒間隔内に実行されます（Oracle 10g では即時に実行されます）。Content Server では Oracle CONTEXT 索引付けが使用され、索引のタイミングを更新できます。詳細は、http://www.oracle.com/technology/sample_code/products/text/index.html を参照してください。
- Oracle では、XML ファイルの全文索引付けは処理されません。Oracle は、XML をテキスト・ファイルとして読み取るのではなく、XML を変換しようとします。

重要： Oracle 10.2 データベースに対して Oracle データベース検索を使用している場合は、最新の 10.2.0.3 パッチセット（パッチセット 5337014）をインストールすることをお勧めします。パッチセットは metalink.oracle.com で入手できます。

Oracle のパフォーマンス

Oracle では、大規模な Sun Solaris マシンにおいて、Oracle9i データベース内で 100GB の Web ページが 7 時間以内で索引付けされます。CONTEXT 索引に対する Oracle 内部のベンチマークは、システムで毎秒 80 個の問合せを処理できること、および同時ユーザーの数（最大 30 人の同時ユーザーでのテスト実行）によるシステムへの影響がないことを示しています。

また、Content Server での Oracle の全文検索および通常の問合せについてパフォーマンスを最適にするためには、Oracle の構成ファイル内に optimizer_mode=FIRST_ROWS を設定してください。

D.1.3 SQL Server

SQL Server を使用するデータベース検索について、次の考慮事項に注意してください。

- Content Server では、新規のドキュメントが更新されるたびに索引が更新されます。更新スケジュールを変更するには、[CS-Install]\config\config.cfg ([CS-Install] はコンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) 内に UseBkgdUpdateIndex=false を設定し、(SQL Server で) 必要に応じて索引付けの更新スケジュールを変更します。

D.2 全文検索 / 索引付けを行うためのデータベースの設定

デフォルトでは、Content Server 10gR3 で使用されるデータベースは、メタデータのための検索および索引付けを行うように設定されます。Oracle および SQL Server は、メタデータの検索および索引付けの他に、全文検索および索引付けもサポートするように構成できます。

重要： Content Server では、使用するデータベースで全文索引付けがサポートされている言語でのみ、全文索引付けを行うことができます。たとえば、アラビア語の全文索引付けは、SQL 2000 でサポートされないため、SQL Server 2000 データベースで稼働する Content Server でサポートできません。データベースのドキュメントで、組織に必要な言語がサポートされているかどうかを確認してください。

ヒント： メタデータのための検索では、索引付け、格納およびアクセスされるテキストが少ないため、短時間で検索できますが、エンド・ユーザーが使用できる検索問合せの範囲は限られます。

(メタデータ検索の他に) 全文検索および索引付けを行うようにデータベースを設定する手順は、使用しているデータベースによって異なります。

- [Oracle](#)
- [SQL Server](#)

注意： Sybase および DB2 では、全文検索および索引付けはサポートされません。メタデータの検索および索引付けのみがサポートされます。つまり、デフォルトの Content Server 10gR3 構成設定を変更する必要はありません。

D.2.1 Oracle

(メタデータの検索 / 索引付けの他に) 全文検索および索引付けを行うように Oracle を設定するには、次の手順を使用します。

1. Content Server ソフトウェアをインストールし、Oracle とともに動作するように構成します。
2. 次のエントリを `[CS-Install]/config/config.cfg` (`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) に追加し、ファイルを保存します。

```
SearchIndexerEngineName=DATABASE.FULLTEXT
```

3. コンテンツ・サーバーを再起動します。
4. **Oracle9i** のみ: 次の SQL スクリプトを実行します。

```
[CS-Install]/database/oracle/admin/fulltextindex.sql
```

(`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。) Content Server データベースを所有する Content Server ユーザーとして、この操作を必ず行ってください。

5. **R2 以上の Oracle10g** のみ: データベースで検索 Snippet を使用するには、次の SQL スクリプトを実行します。

```
[CS-Install]/database/oracle/admin/batchsnippet.sql
```

(`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。) Content Server データベースを所有する Content Server ユーザーとして、この操作を必ず行ってください。

注意： このスクリプトを実行して検索 Snippet を有効にした場合、Content Server の config.cfg ファイルに EnableSearchSnippet=false というエントリを追加すると、この機能を無効にできます。

6. コンテンツ・サーバーを再起動します。
7. リポジトリ・マネージャを使用して、検索索引を再構築します。

警告： Content Server インスタンスによって管理されているコンテンツ・アイテムの数によっては、検索索引の再構築のプロセスに非常に時間がかかることがあります。このため、この再構築は Content Server のオフピーク時に（通常は夜間または週末に）実行することをお勧めします。

D.2.2 SQL Server

（メタデータの検索 / 索引付けの他に）全文検索および索引付けを行うように SQL Server を設定するには、次の手順を使用します。

1. Content Server ソフトウェアをインストールし、SQL Server とともに動作するように構成します。
2. 次のエントリを [CS-Install]\config\config.cfg ([CS-Install] は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) に追加し、ファイルを保存します。

```
SearchIndexerEngineName=DATABASE.FULLTEXT
```

3. コンテンツ・サーバーを再起動します。
4. SQL Server のバージョンに応じて、次の SQL スクリプトを実行します。
 - SQL Server 2000: [CS-Install]\database\ mssql2000\admin\fulltextadmin.sql
 - SQL Server 2005: [CS-Install]\database\ mssql\admin\fulltextadmin.sql

([CS-Install] は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリです。) Content Server データベースを所有する Content Server ユーザーとして、この操作を必ず行ってください。
5. コンテンツ・サーバーを再起動します。
6. リポジトリ・マネージャを使用して、検索索引を再構築します。

警告： Content Server インスタンスによって管理されているコンテンツ・アイテムの数によっては、検索索引の再構築のプロセスに非常に時間がかかることがあります。このため、この再構築は Content Server のピーク使用時間を外して（通常は夜間または週末に）実行することをお勧めします。

D.3 メタデータのみの検索 / 索引を行うためのデータベースの設定

全文とメタデータの検索および索引付けを行うようにデータベースを設定した後で、メタデータのみの検索および索引付けに戻す場合は、次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタで、ファイル `[CS-Install]/config/config.cfg` (`[CS-Install]` は、コンテンツ・サーバー・インスタンスのインストール・ディレクトリ) を開きます。
2. `SearchIndexerEngineName` パラメータを見つけて、その値を次のように変更します。
`SearchIndexerEngineName=Database`
3. ファイルを保存します。
4. コンテンツ・サーバーを再起動します。

注意： 検索索引を再構築する必要はありません。

インストール・スクリプト・ファイル

この項の内容は、次のとおりです。

- E-2 ページの「スクリプト・ファイルについて」
- E-2 ページの「スクリプト・ファイルの構造」
- E-3 ページの「スクリプト・ファイルのエントリ」
- E-10 ページの「自動インストール用のスクリプト・ファイルの使用」
- E-11 ページの「スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド」

E.1 スクリプト・ファイルについて

Content Server ソフトウェアは、インストーラにより使用される一連のインストール・パラメータが含まれたスクリプト・ファイルを使用してインストールされます。これらのパラメータによって、たとえばソフトウェアのインストール場所、使用する Web サーバーとデータベース、必要なシステム・ロケールとタイムゾーンなどが定義されます。

スクリプト・ファイルは、一連のインストール・プロンプトで指定された回答に基づいて、ソフトウェア・インストーラによって自動的に構築されます。その後、一般化されたスクリプト・ファイルを使用してソフトウェアがインストールされます（これはバックグラウンドで実行されます）。

Content Server 10gR3 では、**自動インストール**もサポートされます。これらは基本的に、特定のスクリプト・ファイルをパラメータとして使用したコマンドライン・インストールです。これにより、管理者は、（インストール・プロセスの開始を除き）ユーザー操作なしで、まったく同一のインストール設定を使用して、Content Server ソフトウェアを複数のコンピュータにインストールして設定できます。詳細は、E-10 ページの「[自動インストール用のスクリプト・ファイルの使用](#)」を参照してください。

E.2 スクリプト・ファイルの構造

インストール・スクリプト・ファイルは、vi などの任意のテキスト・エディタを使用して作成できる、プレーン・テキスト・ファイルです。新規に作成することもできますが、既存のスクリプト・ファイルをニーズに合わせて変更することをお勧めします。

このファイルを作成する最も簡単な方法は、Content Server の新規インストールを最後の確認の手順まですべて実行することです。この時点で、インストールを中断します。インストーラによって、使用または編集可能なインストール・スクリプト・ファイルが生成されます。スクリプト・ファイルの場所は、`[Instance-Dir]/install` です。ファイル名は、`[date]-new.txt` または `[date]-update.txt` で、`[date]` は、`2008-04-21-new.txt` のように現在の日付です。日付が常に `YYYY-MM-DD` という形式であることに注意してください。

パラメータ = 値

各スクリプト・ファイルには、次のような書式の多くのインストール・パラメータが含まれています。

```
Parameter_Name=Parameter_Value
```

（各パラメータは 1 行ずつで指定します。）

コメント行

インストール・スクリプト・ファイル内の # で始まる行はすべて、コメント行とみなされて無視されます。次に例を示します。

```
#This is a comment line.
```

例

次に、新規インストール用のスクリプト・ファイルの内容の例を示します。

```
<?cfg jcharset="UTF8"?>
#The parameters below *must* be unique for each
#master instance across the entire enterprise.
HttpRelativeWebRoot=/master1/
IDC_Name=master1
#The parameters below *must* be unique for each
#master instance on the same computer.
TargetDir=/u1/oracle/ucm/contentserver/master1/
VaultDir=/u1/oracle/ucm/contentserver/master1/vault/
WeblayoutDir=/u1/oracle/ucm/contentserver/master1/weblayout/
InstanceMenuLabel=Master1_Label
InstanceDescription=Content Server Master 1
DBServerDatabase=master1
```

```

IntradocServerPort=4444
IdcAdminServerPort=4440
#The parameters below do not need to be unique
#for each master instance.
InstallType=new
InstallConfiguration=Install
Platform=unix
RunChecks=true
SourceDirectory=/u1/install/ecm/contentserver/solaris/
InstallJvm=default
FileEncoding=UTF8
SystemLocale=English-US
UserLocale=English-US
SocketHostAddressSecurityFilter=127.0.0.1|46.68.14.*
HttpServerAddress=SCS_SERVER2
MailServer=mail.company.com
SysAdminAddress=sysadmin@mail.company.com
WebServer=apache
DatabaseType=oracle
JdbcUser=sa
JdbcPassword=idc
CreateDatabase=true
DatabaseUnicodeFields=true
SearchIndexerEngineName=database
JdbcClasspath=$SharedDir/classes/ojdbc14.jar
InstallAdminServerService=auto
InstallServerService=auto

```

E.3 スクリプト・ファイルのエントリ

この項では、スクリプト・ファイル内に指定できるすべてのインストール・パラメータを（アルファベット順で）リストし、その説明、有効な値、およびその他の考慮事項を示します。

一般的な考慮事項

次の一般的な考慮事項に注意してください。

- **大 / 小文字の区別:** パラメータ値（特にディレクトリ・パスおよびファイル名）に関しては、大 / 小文字によく注意することをお勧めします。これは特に、大 / 小文字が区別される（つまり、/u1/Oracle/ucm/contentserver/Vault と /u1/oracle/ucm/contentserver/vault が異なる）UNIX 環境でスクリプト・ファイルを使用する場合に重要です。Microsoft Windows では、パスおよびファイル名で大 / 小文字が区別されないため、これは問題になりません。

true/false タイプのパラメータの場合、大 / 小文字の区別は重要ではありません。このようなパラメータの値は、true、True、TRUE のいずれであっても問題ありません。
- **スラッシュ:** 特に指定のないかぎりディレクトリ・パスには必ずスラッシュ (/) を使用します。
- **パラメータの間違いまたは欠落:** インストーラにより無効なパラメータ値が検出されると、インストールは通常、（可能な場合）これらのパラメータのデフォルト値を使用して続行されます。たとえば、CreateDatabase パラメータの値が（false や no でなく）nein に設定されている場合、インストールは続行されますが、データベース表は自動的に作成されます（デフォルトの動作）。ただし、パラメータの欠落や間違いがソフトウェアの正常なインストールに重要な影響を及ぼす場合は、インストールが中断されます。たとえば、IntradocDir パラメータ（ターゲット・インストール・ディレクトリ）の値のパスに不正な文字が含まれている場合、インストーラはファイルをどこにもコピーできないため、インストールは中断されます。
- **ログ・ファイル:** インストーラによって、インストールごとにログ・ファイルが作成されます。このファイルは log.txt という名前で、[CS-Install]/install ディレクトリにあります（/u1/oracle/ucm/contentserver/install/log.txt など）。

- **システム変数:** いくつかのシステム変数を使用して、特定のコンテンツ・サーバーの場所を参照できます。
 - `${SourceDirectory}`: これは、Content Server ソフトウェアのインストール・ファイルが存在するディレクトリ（たとえば、`/u1/install/UCM/ContentServer/solaris`）を指します。この変数は、インストール・ディレクトリへの相対参照（たとえば、`${SourceDirectory}/../packages/solaris`）を作成する場合に使用できます。
 - `$SharedDir`: これは、コンテンツ・サーバーの共有ファイル（通常は Content Server インストール・ディレクトリの `Shared` サブディレクトリ）の場所を指します。
- **競合するパラメータ:** インストール・パラメータが競合する場合（たとえば、あるパラメータでマスター・インストールが指定され、別のパラメータでプロキシ・インストールが指定されている場合など）、インストール手順は中断されます。

スクリプト・ファイルのエントリ

`CreateDatabase=true|yes|false|no`

このエントリは、インストーラでデータベース表の作成を自動的に試行するかどうかを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、データベース表は自動的に作成されます。このパラメータが `false` または `no` に設定されている場合、ソフトウェアのインストール後にデータベース表を手動で作成する必要があります。

`DatabaseType=mssql2000|mssql|oracle|sybase|db2|custom_database|skip_database|
null_database`

このエントリは、コンテンツ・サーバーと関連して使用されるデータベースを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、データベースを手動で構成する必要があります。

DB2 を使用する場合、または SQL Server、Oracle または Sybase を手動で構成する場合は、パラメータ値を `null_database` に設定してください。この場合、Content Server ソフトウェアのインストール後に、データベースを手動で設定して構成する必要があります。

`DatabaseUnicodeFields=true|yes|false|no`

このエントリは、データベース内で Unicode テキスト・フィールドを使用するかどうかを指定します（データベースでサポートされている場合）。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、データベース・テキスト・フィールドは Unicode ではなく、ネイティブのデータベース・エンコーディングでエンコードされます。Content Server でアジア言語または双方向言語（日本語、韓国語、アラビア語およびヘブライ語など）のコンテンツを処理する必要がある場合、または将来的にそうなる場合には、一般的にデータベースの Unicode テキスト・フィールドが推奨されます。

`DBServerDatabase=[name]`

このエントリは、コンテンツ・サーバーと関連して使用されるデータベースの名前を指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、データベースを手動で構成する必要があります。

例: `DBServerDatabase=db_stellent`

`DBServerHost=[name]`

このエントリは、データベースを実行するホスト・コンピュータの名前を指定します。このパラメータに値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、データベースを手動で構成する必要があります。

例: `DBServerHost=db_host`

DBServerPort=[port]

このエントリは、データベースとの通信に使用されるポート番号を指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、データベースを手動で構成する必要があります。

例 : DBServerPort=1522

FileEncoding=UTF8| [empty]

このエントリは、コンテンツ・サーバー・インスタンスに対して UTF-8 ファイル・エンコーディングを使用するかどうかを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、UTF-8 エンコーディングは使用されず、指定されたシステム・ロケールのデフォルト・ファイル・エンコーディングが使用されます。

HttpRelativeWebRoot=[web_root]

このエントリは、Web サーバー・ルート・ディレクトリを相対 URL として指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、デフォルト (/idc/) が使用されます。パラメータ値には US-ASCII 文字のみを使用することをお勧めします。通常、コンテンツ・サーバーのログイン・ページにアクセスするには、`http://[HttpServerAddress]/[HttpRelativeWebRoot]` と入力します。

例 : HttpRelativeWebRoot=/oracle/ucm/contentserver/

HttpServerAddress=[address]

このエントリは、Web サーバーの HTTP アドレスを指定します。これは、Web サーバーを参照する HTML ページを生成するために使用されます。Web サーバーが 80 以外のポート上で実行されている場合は、必ずコロンとポート番号を追加してください。デフォルトは、現在のコンピュータ・ネットワーク名（使用可能な場合）です。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストールは中断されます。パラメータ値には US-ASCII 文字のみを使用することをお勧めします。

通常、コンテンツ・サーバーのログイン・ページにアクセスするには、`http://[HttpServerAddress]/[HttpRelativeWebRoot]` と入力します。

例 : HttpServerAddress=stellent.company.com:81

IDC_Name=[name]

このエントリは、コンテンツ・サーバー・インスタンスの一意の名前を指定します。

組織内に複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスをインストールする場合は、必ず各インスタンスに異なる名前を使用してください。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストールは中断されます。

例 : IDC_Name=SCS5

IdcAdminServerPort=[port]

このエントリは、管理サーバーとの通信に使用されるポートを定義します。同じコンピュータに複数のマスター・サーバー・インスタンスをインストールする場合は、必ず各インスタンスに異なる管理サーバー・ポートを使用してください。

プロキシ・サーバーは、関連付けられたマスター・コンテンツ・サーバーと管理サーバー・ポートを共有することに注意してください。デフォルトは 4440 です。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、デフォルトのポート番号が使用されます。

例 : IdcAdminServerPort=4440

`InstallerJdbcClasspath=[path]`

このエントリは、コンテンツ・サーバー・インスタンスで使用する JDBC クラスパスのフルパスを定義します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、選択されたデータベースの標準の JDBC ドライバがインストールされます（第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」を参照）。

例: `InstallerJdbcClasspath=ul/Jdbc_Classpath/jtds.jar`

`InstallerJvmPath=[path]`

このエントリは、Java 仮想マシン（JVM）のインストールに使用する Java 実行可能ファイルのフルパスを定義します。

例: `InstallerJvmPath=ul/JVM_Installer/jdk1.5.0_11/bin/java.exe`

`InstallJvm=default|current|custom`

このエントリは、Content Server ソフトウェアとともにインストールする Java 仮想マシン（JVM）を定義します。

- **default:** パラメータがこの値に設定されている場合、オペレーティング・システムのデフォルト JVM（第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」を参照）がコンテンツ・サーバーで使用するためにインストールされます。
- **current:** このオプションは、更新の場合のみに関連します。パラメータがこの値に設定されている場合、（マスター）コンテンツ・サーバーで現在使用されている JVM が引き続き使用されます。
- **custom:** パラメータがこの値に設定されている場合、ユーザー指定の JVM が使用されます。JvmPath パラメータで、コンテンツ・サーバーにより使用される java.exe 実行可能ファイルのパスを指定します。

このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、オペレーティング・システムのデフォルト JVM（第3章「インストール前のタスクおよび考慮事項」を参照）がインストールされます。

`InstallType=new|update|proxy`

このエントリは、インストールのタイプを指定します。次のオプションがサポートされています。

- **new:** このオプションを指定すると、新規のマスター・コンテンツ・サーバーがインストールされます。
- **update:** このオプションを指定すると、既存のマスター・コンテンツ・サーバーおよびそれに関連付けられたすべてのプロキシ・サーバーが更新されます。
- **proxy:** このオプションを指定すると、新規のプロキシ・サーバーがインストールされます。

`InstanceDescription=[description]`

このエントリは、コンテンツ・サーバーの長い説明を指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インスタンスの説明は空白になります（インストールは通常どおりに続行されます）。

例: `InstanceDescription=Content_Server_5`

`InstanceMenuLabel=[label]`

このエントリは、コンテンツ・サーバー・インスタンスの短いラベルを指定します。このラベルは、Web ページ上でこのインスタンスを識別するために使用されます。ラベルの最大文字数は 12 文字です。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インスタンスの説明は空白になります（インストールは通常どおりに続行されます）。

例: `InstanceMenuLabel=idc`

IntradocServerPort= [port]

このエントリは、Web サーバー・フィルタまたはその他のアプリケーションでコンテンツ・サーバー・インスタンスとの通信に使用するポートを指定します。

同じコンピュータに複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスをインストールする場合は、必ず各インスタンスに異なるサーバー・ポートを使用してください。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、デフォルトのポート番号が使用されます。デフォルトは 4444 です。

例 : IntradocServerPort=4445

JdbcClassPath= [path]

このエントリは、Java Database Connectivity (JDBC) に使用されるクラス・ファイルの場所を指定します。

例 : JdbcClasspath=\$SharedDir/classes/jtds.jar

JdbcDriverPackageSourceFile= [file_path]

このエントリは、コンテンツ・サーバーで使用される JDBC ドライバ・クラスのパスを指定します。複数のファイルを指定する必要がある場合、[Path1]/[File1];[Path2]/[File2]; のようにセミコロンを使用してファイルを区切ります。

例 : JdbcDriverPackageSourceFile=ul/jdbc/jdbc.jar

JdbcDriverPackageCopy=true|yes|false|no

このエントリは、JdbcDriverPackageSourceFile エントリで指定されているインストール・パッケージから JDBC ドライバを [CS-Install]/shared/class ディレクトリにコピーするかどうかを指定します。

例 : JdbcDriverPackageCopy=true

JdbcPassword= [password]

このエントリは、コンテンツ・サーバーが Java Database Connectivity (JDBC) を使用してデータベースにアクセスするときに使用するパスワードを指定します。

例 : JdbcPassword=idc

JdbcUser= [username]

このエントリは、コンテンツ・サーバーが Java Database Connectivity (JDBC) を使用してデータベースにアクセスするときに使用するユーザー名を指定します。

例 : JdbcUser=oracle

JvmPath= [path]

このエントリは、InstallJvm パラメータと関連して使用されます。このエントリは、コンテンツ・サーバーで使用されるカスタム Java 仮想マシン (JVM) の場所を指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、デフォルトの JVM が使用されます。

例 : JvmPath=/u1/jvm/java.exe

MailServer= [mail_server]

このエントリは、コンテンツ・サーバーの電子メールの処理に使用されるメール・サーバーの名前を指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、電子メール・サーバーは設定されません。

例 : MailServer=mail.company.com

Platform=solaris|hpux|aix|linux

このエントリは、Content Server ソフトウェアがインストールされるハードウェア・プラットフォームを指定します。

RunChecks=true|yes|false|no

このエントリは、インストーラによりインストール手順の開始前に多くのシステム・チェックを実行するかどうかを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストール前チェックが実行されます。

RunInstall=true|yes|false|no

このパラメータが false または no に設定されている場合、インストール手順は実行されません。インストール・チェックを実行するが実際のインストールは実行しない場合、この設定が便利です。

SearchIndexerEngineName=DATABASE.METADATA

このエントリは、Content Server で使用されるように設定する検索エンジン・オプションを指定します。次のオプションがサポートされています。

- **DATABASE.METADATA:** このオプションを指定すると、コンテンツ・サーバーはメタデータのみの検索用のデータベースを使用するように設定されます。全文検索および索引付けの機能は、Content Server ソフトウェアのインストール後に手動で追加しないかぎり、コンテンツ・サーバーで使用できません。

SocketHostAddressSecurityFilter=[IP_addresses]

このエントリは、Content Server へのアクセスを制限する着信接続アドレス・フィルタを指定します。指定された基準に一致する IP アドレスのホストのみが、コンテンツ・サーバーへのアクセス権を付与されます。デフォルトは 127.0.0.1 (localhost) ですが、任意の数の有効な IP アドレスを追加できます。複数の IP アドレスは、パイプ記号 (|) で区切って指定できます。また、ワイルドカード (0 文字または多数の文字には *、単一文字には ?) も使用できます。

例: SocketHostAddressSecurityFilter=127.0.0.1|163.192.10.*

SourceDirectory=[path]

このエントリは、Content Server のインストール・ファイルを格納するディレクトリを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストールは中断されます。

例: SourceDirectory=/u1/cs-install/UCM/ContentServer/solaris/

SysAdminAddress=[e-mail_address]

このエントリは、システム管理者の電子メール・アドレスを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、電子メール・アドレスは設定されません。

例: SysAdminAddress=admin@company.com

SystemLocale=[locale]

このエントリは、コンテンツ・サーバーのシステム・ロケールを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストーラでは、ターゲット・コンピュータのオペレーティング・システムのシステム・ロケールが使用されます。

ソフトウェア配布パッケージの /UCM/ContentServer/resources/std_locale.htm の LocaleConfig 表 (lcLocaleId 列) に、指定可能なシステム・ロケール値がリストされています。

例: SystemLocale=English-US

`SystemTimeZone=[time_zone]`

このエントリは、コンテンツ・サーバーのデフォルトのタイムゾーンを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストーラでは、ターゲット・コンピュータのオペレーティング・システムの現行タイムゾーンが使用されます。

ソフトウェア配布メディアの `/UCM/ContentServer/resources/std_locale.htm` の

`SystemTimeZones` 表 (`lcTimeZone` 列) に、指定可能なタイムゾーン値がリストされています。

例 : `SystemTimeZone=America`

`TargetDir=[path]`

このエントリは、**Content Server** のインストール・ディレクトリを指定します。このパラメータに値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストールは中断されます。

例 : `TargetDir=/ul/oracle/ucm/contentserver/`

`UserLocale=[locale]`

このエントリは、コンテンツ・サーバーのデフォルトのユーザー・ロケールを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストーラでは、ターゲット・コンピュータのオペレーティング・システムのユーザー・ロケールが使用されます。

ソフトウェア配布メディアの `/UCM/ContentServer/resources/std_locale.htm` の `LocaleConfig` 表 (`lcLocaleId` 列) に、指定可能なユーザー・ロケール値がリストされています。

例 : `UserLocale=English-US`

`VaultDir=[path]`

このエントリは、ネイティブ・ファイル・リポジトリのルート・ディレクトリのパスを設定します。このパラメータに値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストーラでは `[IntradocDir_Variable]/vault` が想定されます。

例 : `VaultDir=ul/oracle/ucm/contentserver/vault`

`WebBrowserPath=[path]`

これは、**Content Server** ヘルプ・システムの表示に使用される Web ブラウザ実行可能ファイルのパスです。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、スタンドアロン・アプリケーションで **Content Server** のヘルプ・システムは機能しません。

例 : `WebBrowserPath=/u1/netcape/netcape.exe`

`WeblayoutDir=[path]`

このエントリは、**Web** 表示可能ファイル・リポジトリのルート・ディレクトリのパスを設定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、インストーラでは `[IntradocDir_Variable]/weblayout` が想定されます。

例 : `WeblayoutDir=ul/oracle/ucm/contentserver/weblayout`

`WebServer=apache|nes6|manual`

このエントリは、コンテンツ・サーバーと関連して使用される **Web** サーバーを指定します。このパラメータに無効な値が含まれる場合、値が指定されていない場合、またはスクリプト・ファイルにこのパラメータが含まれていない場合、**Web** サーバーを手動で構成する必要があります。

Sun ONE を使用する場合は、`nes6` を使用します。

E.4 自動インストール用のスクリプト・ファイルの使用

スクリプト・ファイルを使用して、自動インストールを実行できます。これにより、管理者は、（インストール・プロセスの開始を除き）ユーザー操作なしで、まったく同一のインストール設定を使用して、Content Server ソフトウェアを複数のコンピュータにインストールして設定できます。

重要： Content Server ソフトウェアをインストールするためのスクリプト・ファイルを実行する前に、ターゲット・コンピュータがハードウェアおよびソフトウェアの前提条件をすべて満たしていることを確認します。たとえば、スクリプト・ファイル内に指定されている Web サーバーおよびデータベースがターゲット・コンピュータ上で実行されていることや、データベースが作成されていることなどです。そうでない場合、インストールが失敗することがあります。

自動インストールを実行するには、たとえば次のように、コマンドライン・パラメータとしてスクリプト・ファイルの名前を使用してインストーラを実行します。

```
sh ./setup.sh install_script.txt
```

インストーラによって、即時にインストール・スクリプトが分析され、（致命的なエラーが検出されないかぎり）インストール・プロセスが開始されます。

DB2 および SQL Server で（インストーラによって作成される自動生成ファイルとは対照的に）スクリプト・ファイルを手動で構成する場合、スクリプト・ファイルを自動インストールで使用するには、次のパラメータと値を指定する必要があります。

```
JdbcDriverPackageSourceFile=[source_file_location]  
JdbcDriver=[jdbc_driver]
```

E.5 スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド

インストーラでは通常、すべてのインストール・パラメータがスクリプト・ファイルで指定されているとおりに使用されます。ただし、実行時にスクリプト・ファイル内のパラメータ値をオーバーライドすることも可能です。これを行うには、コマンドラインに次の書式で1つ以上のパラメータを追加します。

```
--set- [parameter_name]=[value]
```

次に例を示します。

```
sh ./setup.sh --set-RunChecks=false --set-InstallJvm=false script.txt
```

注意： 必ず、パラメータ・オーバーライドの後にスクリプト・ファイル名を指定してください。

前述の例では、インストーラはファイル `script.txt` を使用してインストール・パラメータを取得し、(スクリプト・ファイル内に指定された値に関係なく) コマンドラインで指定された変数 `RunChecks` および `InstallJvm` の値を使用します。

これは、次のような多くの状況で役立ちます。

- 一部のインストール・パラメータは、コンテンツ・サーバー・インスタンスごとに一意である必要があります (たとえば、`IDC_Name` (インスタンス名) など)。この問題は、コマンドラインでこのパラメータを指定することで対応できます。
- データベース・パスワードが必要な場合、データベース・パスワードは暗号化されない形式でスクリプト・ファイルに格納されます。つまり、テキスト・ファイルを開いた人すべてに、パスワードが表示されます。これは、セキュリティ上望ましくないことがあります。その場合、スクリプト・ファイルからパスワード・エントリを削除し、
`--set-JdbcPassword` コマンドライン・パラメータを使用して、スクリプト・ファイルの起動時にパスワードを指定できます。

分離インストール

一般に、Web サーバーとコンテンツ・サーバーは同じ物理コンピュータにインストールされます。ただし、Web サーバーとは別のコンピュータにコンテンツ・サーバーをインストールすることも可能です。セキュリティを強化する必要がある特殊な状況では、このようにすると役立ちます。

注意：Web サーバーはコンテンツ・サーバーとは別個にインストールされるため、Web サーバーを手動で構成する必要があります。これらのタスクの実行後に Web サーバーを手動で設定する詳細な手順は、[付録 A「Web サーバーの設定」](#)を参照してください。

この項の内容は、次のとおりです。

- F-2 ページの「[メリットとデメリット](#)」
- F-2 ページの「[インストール手順](#)」
- F-4 ページの「[実装に関する考慮事項](#)」

F.1 メリットとデメリット

Web サーバーとコンテンツ・サーバーを分離する主なメリットは、セキュリティが向上することです。たとえば、Web サーバーを物理的に分離することで、ファイアウォールの外部に Web サーバーを置き、内部にコンテンツ・サーバーを置くことができます。

コンテンツ・サーバーのコンテンツ・リポジトリに認証されないアクセスが発生する危険性がある場合、完全に切り離された環境にすると、その問題に対応できます。

また、分離インストールを使用する場合、次のようなデメリットがあります。

- Content Server の Java プロセスにより配信する必要のないファイルへのアクセスのパフォーマンスが低下します。
- インストールおよび管理が複雑になります。
- 自動インストールができなくなります。
- この構成に対する Oracle の製品群サポートが完全ではありません（たとえば、Site Studio には互換性はありません）。

注意：実装に関する重要な考慮事項は、F-4 ページの「[実装に関する考慮事項](#)」を参照してください。

F.2 インストール手順

このアーキテクチャを実装する場合、Web サーバー・フィルタ・プラグインが使用可能です。これにより、Web サーバーをコンテンツ・サーバーから分離し、2 つのサーバー間の直接ソケット接続を保持できます。次の手順すべてを実行する必要があります。

- [RedirectUrls フィルタ・プラグインの入手](#)
- [Content Server の構成](#)
- [Web サーバー・システムの構成](#)

F.2.1 RedirectUrls フィルタ・プラグインの入手

必要なプラグインは、RedirectUrls.so という名前で、`[CS-Install]/shared/os/[OS_Name]/lib` ディレクトリ（`/u1/apps/shared/os/solaris/lib/` など）にあります。このフィルタ・プラグインを使用すると、Web サーバーとコンテンツ・サーバーの間のソケット接続が可能になります。フィルタによって、コンテンツ・サーバーの `weblayout/groups` ディレクトリの下のすべての URL が、コンテンツ・サーバーによって配信されるように転送されます。

F.2.2 Content Server の構成

コンテンツ・サーバー・システムで次の変更を行います。

1. 次の行を含むように `[Instance_Dir]/config/config.cfg` ファイルを編集します。

```
IntradocServerHostName=[Content_Server_Name]
IdcAdminServerHostName=[Content_Server_Name]
HttpServerAddress=[Web_Server_URL]
SocketHostAddressSecurityFilter=[Web_Server_IP]
```
2. 次の行を含むように `[Instance_Dir]/admin/bin/intradoc.cfg` ファイルを編集します。

```
SocketHostAddressSecurityFilter=[Web_Server_IP]
```

（存在する場合）
3. Content Server のインストールおよび構成が完了した後、コンテンツ・サーバー・コンピュータ上の Web サーバーを無効化します。
4. コンテンツ・サーバーを再起動します。

F.2.3 Web サーバー・システムの構成

Web サーバー・システムで次の変更を行います。

1. `[Instance_Dir]` ディレクトリ (`/u1/apps//ucm/contentserver` など) を作成します。
2. コンテンツ・サーバー・システムから次のディレクトリ (コンテンツ・サーバー・スタブ) をこのディレクトリにコピーします。
 - `[Instance_Dir]/data`
 - `[Instance_Dir]/idcplg`
 - `[Instance_Dir]/weblayout` (groups サブディレクトリなし)
3. `[Instance_Dir]/shared/os/[OS_Name]/lib` ディレクトリを作成します。
4. OS-specific RedirectUrls.so ファイル (F-2 ページの「[RedirectUrls フィルタ・プラグインの入手](#)」を参照) を、新たに作成したディレクトリに追加します。
5. コンテンツ・サーバー・システムから `IdcAuth.so` ファイルをコピーします。このファイルは、`[Instance_Dir]/shared/os/[OS_Name]/lib` にあります。
6. `[Instance_Dir]/data/users/SystemFilters.hda` ファイルを作成します。
7. テキスト・エディタで `SystemFilters.hda` ファイルを開き、次の行を追加します。

```
@Properties LocalData
EnableRedirectUrls=1
@end
@ResultSet IdcAuthPlugins
2
iapExportedSymbolName
iapFileNameRoot
RedirectUrls
RedirectUrls
@end
```

8. Web サーバーに仮想ディレクトリを作成します。[付録 A「Web サーバーの設定」](#) を参照してください。
9. 次の行を `httpd.conf` に追加します。

```
LoadModule IdcApacheAuth
```

重要： Content Server を介して Web サーバー構成を変更する場合、Web サーバー・システムではなく Content Server システム上の `SecurityInfo.hda` ファイルが変更されます。変更後は必ず、手動でこれらのファイルを同期化する必要があります。

F.3 実装に関する考慮事項

コンテンツ・サーバーと Web サーバーが切り離された環境を実装する場合は、次の考慮事項に注意してください。

- JSP の有効化
- 静的リクエストの HTTP キャッシング
- PDF バイト・ストリーミング
- コンテンツ・サーバーの変更が Web サーバーにプッシュされない

F.3.1 JSP の有効化

分離インストール（Web サーバーと Content Server が別々の物理マシンにインストールされる）において Java Server Pages（JSP）を使用する場合、コンテンツ・サーバー上で JSP を有効化した後に「JSP Server Web App Admin」ページから WAR ファイルを起動しようとする、次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
Content Server Access Denied
Access denied to Content Server managed resource
```

Web サーバーがコンテンツ・サーバーから物理的に分離されている場合、Content Server を適切に操作できるように、Content Server ディレクトリ構造の一部（スタブ）を Web サーバーに配置する必要があります（F-3 ページの「Web サーバー・システムの構成」を参照）。この構造には [CS-Install]/data/users ディレクトリが含まれ、このディレクトリには SecurityInfo.hda ファイルが含まれます。このファイルには、（特に）ロール情報と、JSP サポートに特有の構成変数が含まれます。コンテンツ・サーバー上で JSP が有効化されると、物理コンテンツ・サーバー上でこのファイルが自動的に変更されます。ただし、Web サーバーのスタブ上のバージョンは自動的に更新されないため、JSP 操作を適切に行えるように手動で変更する必要があります。

1. Web サーバーのスタブ・ディレクトリ内で [Instance_Dir]/data/users/SecurityInfo.hda ファイルを見つけ、このファイルをテキスト・エディタで開きます。

2. 次の変数を @Properties LocalData セクションに追加します。

```
IsJspServerEnabled=true
JspEnabledGroups=jsp
```

（使用環境に適用される変数を指定してください。）

3. 目的のセキュリティ構成に応じて、次の行を @ResultSet RoleDefinition セクションに追加します。

```
admin
jsp
15
sysmanager
jsp
1
contributor
jsp
1
guest
jsp
1
```

4. ファイルを保存して閉じます。
5. Web サーバーおよびコンテンツ・サーバーを再起動します。

F.3.2 静的リクエストの HTTP キャッシング

分離インストールでは、静的リクエストの HTTP キャッシングはサポートされません。つまり、イメージをコンテンツ・サーバーにチェックインして Web サイトを構築した場合、イメージはそのたびにダウンロードされるため、パフォーマンス問題が発生することがあります。この問題の対応策として、Web サーバーに weblayout ディレクトリの読取りを許可する（通常は許可されていない）ことができます。

F.3.3 PDF バイト・ストリーミング

分離インストールでは、PDF バイト・ストリーミングはサポートされません。Web サーバーに PDF ファイルを直接処理できる機能があれば、ファイル全体をダウンロードする前に PDF ファイルの一部を表示できます。対応付けを解除された Web サーバーを使用する場合、これは機能しません。この問題の対応策として、Web サーバーに weblayout ディレクトリの読取りを許可する（通常は許可されていない）ことができます。

F.3.4 コンテンツ・サーバーの変更が Web サーバーにプッシュされない

コンテンツ・サーバーの変更は、Web サーバーに自動的に伝播されません。

SecurityInfo.hda

すべてのローカル・ユーザー情報、ロール定義および Web サーバー構成は、コンテンツ・サーバーから `[Instance_Dir]/data/users/ SecurityInfo.hda` ファイルに公開されます。対応付けを解除された Web サーバーの場合、コンテンツ・サーバーは通常、Web サーバー上のスタブ・ディレクトリに書き込むことができません。関連する変更が行われるたびに、手動で

`SecurityInfo.hda` ファイルを移動する必要があります。このためサーバーのメンテナンスが複雑になりますが、`rsync` などのツールを使用してファイルの同期を保つことで、複雑さを緩和できます。

スキーマ・データ

Content Server でスキーマ・ディレクトリを公開する場合、ローカルの weblayout ディレクトリに公開します。対応付けを解除された Web サーバーで必要なファイルは、自動的に更新されません。これらのファイルを手動でコピーしないと、ユーザーに変更が表示されません。このためサーバーのメンテナンスが複雑になりますが、`rsync` などのツールを使用してファイルの同期を保つことで、複雑さを緩和できます。

Content Server のアンインストール

この項の内容は、次のとおりです。

- [ソフトウェアのアンインストール](#)

G.1 ソフトウェアのアンインストール

コンテンツ・サーバー・インスタンスをアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. コンテンツ・サーバー・インスタンスのディレクトリ（たとえば、`/u1/apps/cserver/idcm1/` など）を削除します。

重要：必ず、ディレクトリを削除する前に、コンテンツ・サーバーに関連して実行されているプロセスをすべて停止してください。そうしない場合、プロセスは目に見えない形で引き続き実行されますが、実行元のバイナリが存在しなくなるために孤立します。特に、**Content Server** ソフトウェアを更新する場合、これによって問題が発生することがあります。

2. コンテンツ・サーバー・インスタンスによって使用されるデータベース表を削除します。データベース管理者のみがこの処理を実行することをお勧めします。
3. コンテンツ・サーバー・インスタンスによって使用される Web サーバーを削除します。システム管理者のみがこの処理を実行することをお勧めします。
4. コンテンツ・サーバー・インスタンスを起動するための自動起動スクリプトにコマンドが含まれていた場合は、このコマンドを削除します。

索引

記号

`${SourceDirectory}` (スクリプト・ファイルのエントリ), E-4
`$SHAREDDIR` (スクリプト・ファイルのエントリ), E-4

数字

2 桁形式の年, 5-2

A

`ActiveDirectoryLdapComponent` コンポーネント, C-4
`AddDefaultCharset` (Apache の設定), 3-5
Apache
 `AddDefaultCharset`, 3-5
 インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-5
 手動構成, A-5
 正規名, A-8
 デバッグ, A-7
 プロキシ・インスタンス, A-7
 マスター・インスタンス, A-5
 ログ・ダンプ・ファイル, A-7
Apple Macintosh
 推奨 Web ブラウザ, 2-9
`ArchiverReplicationExceptions` コンポーネント, C-4

C

`CheckOutAndOpenInNative` コンポーネント, C-5
`CheckSCSHHealth` コンポーネント, C-5
`CIS_Helper` コンポーネント, C-5
`ComponentTool` コンポーネント, C-6
`ConfigMigrationUtility` コンポーネント, C-6
Content Server の起動, 7-2
Content Server の再起動, 7-3
Content Server の停止, 7-2
`ContentAccess` コンポーネント, C-6
`ContentFolios` コンポーネント, C-7
`CoreUserInterfaceLibrary` コンポーネント, C-7
`CoreWebDav` コンポーネント, C-7
CPU
 パフォーマンス, 2-4
`CreateDatabase`, E-4

D

`DatabaseType`, E-4
`DatabaseUnicodeFields`, E-4
DB2
 Content Server データベースの作成, B-17
 JDBC 設定, B-18
 JDBC ドライバ, 3-12, 3-14
 JDBC ドライバ・ファイル, B-17
 Net Search Extender, 3-12
 インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-12
 クラスパス, B-19
 コンテンツ・サーバーの再起動, B-20
 コンテンツ・サーバーのポータル・ページ, B-20
 サポートされているバージョン, 2-6
 手動構成, B-16
 データベースの大 / 小文字, B-20
 データベース表の作成, B-18
 データベース・フィールドの削除, 3-13
 ネクスト・キー・ロック, B-19
 ページ・サイズ, 3-12
`DBSearchContainsOpSupport` コンポーネント, C-8
`DBServerDatabase`, E-4
`DBServerHost`, E-4
`DBServerPort`, E-5

E

`EnableSearchSnippet` 構成変数, D-5
Enterprise Search および Web ルート・ディレクトリ, 3-4

F

`FCKEditor` コンポーネント, C-8
`FileEncoding`, E-5
`FileStoreProvider` コンポーネント, C-8
`Folders` コンポーネント, C-9
`FormEditor` コンポーネント, C-9

H

HP-UX
 サポートされているバージョン, 2-5
`HttpRelativeWebRoot`, E-5
`HttpServerAddress`, E-5
HTTP キャッシングおよび分離インストール, F-5

I

IBM AIX
サポートされているバージョン, 2-5

IBM HTTP Server
インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-6
サポートされているバージョン, 2-6
手動構成, A-8
正規名, A-11
デバッグ, A-10
プロキシ・インスタンス, A-10
マスター・インスタンス, A-9
ログ・ダンプ・ファイル, A-10

IBM JVM および Linux, 3-2

IDC_Name, E-5

IdcAdminServerPort, E-5

InstallerJdbcClasspath, E-6

InstallerJvmPath, E-6

InstallJvm, E-6

InstallType, E-6

InstanceDescription, E-6

InstanceMenuLabel, E-6

intradoc.cfg
Oracle, B-10, B-12

IntradocServerPort, E-7

IP アドレス・セキュリティ・フィルタ, 4-5

iTextComponent コンポーネント, C-10

J

Java Server Pages (JSP) および分離インストール, F-4

Java 仮想マシン (JVM)
IBM JVM および Linux, 3-2
Solaris パッチ, 3-3
インストール前の考慮事項, 3-2
要件, 2-6

Java ブラウザ・プラグイン, 2-7

JdbcClassPath, E-7

JdbcDriverPackageCopy, E-7

JdbcDriverPackageSourceFile, E-7

JdbcPassword, E-7

JdbcUser, E-7

JDBC 構成
DB2, B-18
Oracle, B-7
SQL Server, B-5
Sybase, B-15

JDBC 接続性および Sybase, 3-11

JDBC ドライバ, 3-6
Content Server で使用されるデフォルト, 3-13
DB2, 3-12, 3-14, B-17
Oracle, 3-9, 3-13
SQL Server, 3-8, 3-14
Sybase, 3-14

JDBC の接続性および SQL Server, 3-8

JavaScript エンジン, 2-8

JSP および分離インストール, F-4

JvmPath, E-7

JVM 要件, 2-6

L

LinkManager8 コンポーネント, C-10

Linux
IBM JVM, 3-2
インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-2
サポートされているバージョン, 2-5

Localization コンポーネント, C-10

M

Macintosh, 「Apple Macintosh」を参照, 2-9

magnus.conf ファイル
Sun Web サーバー, A-3

MailServer, E-7

Microsoft Java プラグイン, 2-7

Microsoft Windows
Content Server の起動, 7-2
Content Server の再起動, 7-3
Content Server の停止, 7-2
推奨 Web ブラウザ, 2-8

N

NativeOsUtils コンポーネント, C-11

Net Search Extender (DB2), 3-12

O

obj.conf ファイル
Sun Web サーバー, A-2

OCI ドライバ (Oracle), 3-9, B-9, B-11

Oracle
Content Server データベースの作成, B-7
intradoc.cfg, B-10, B-12
JDBC 設定, B-7
JDBC ドライバ, 3-9, 3-13, B-9, B-12
OCI ドライバ, 3-9, B-9, B-11
Oracle Client, B-9, B-11
tnsnames.ora, B-10
共有ライブラリ・ファイル, B-10
クラスパス, B-8
コンテンツ・サーバーの再起動, B-8
コンテンツ・サーバーのポータル・ページ, B-8
サポートされているバージョン, 2-6
全文検索 / 索引付け, D-4
データベース設定, B-11, B-13
データベースの検索および索引付け, D-3
データベース表の作成, B-7

Oracle Enterprise
サポートされているバージョン, 2-5

OracleQueryOptimizer コンポーネント, C-11

Oracle データベース
インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-9

P

PDF バイト・ストリーミングおよび分離インストール, F-5

Platform, E-8

PopUpCalendar コンポーネント, C-11

ProxyConnections8 コンポーネント, C-12

R

RAM 要件, 2-4

Red Hat

サポートされているバージョン, 2-5

RedirectUrls フィルタ・プラグイン, F-2

RunChecks, E-8

RunInstall, E-8

S

SearchIndexerEngineName, E-8

SecurityInfo.hda, F-5

SecurityProviders コンポーネント, C-12

--set- (スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド), E-11

\$SHAREDDIR, E-4

Snippet (Oracle データベース), D-4

SocketHostAddressSecurityFilter, E-8

Solaris

サポートされているバージョン, 2-5

SourceDirectory, E-8

SourceDirectory (スクリプト・ファイルのエントリ), E-4

SQL Server

Content Server データベースの作成, B-3

JDBC 設定, B-5

JDBC ドライバ, 3-8, 3-14

インストール後のタスクおよび考慮事項, 5-6

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-8

クラスパス, B-6

コンテンツ・サーバーの再起動, B-6

コンテンツ・サーバーのポータル・ページ, B-6

サポートされているバージョン, 2-6

全文検索 / 索引付け, D-5

データベースの検索および索引付け, D-3

データベース表の作成, B-4

SQL Server 用の jTDS ドライバ, 3-8, 3-14

sql_server15.0.sql スクリプト (Sybase), 3-11

Sun Solaris

JVM 用のパッチ, 3-3

アップロード・パフォーマンスの向上, 3-2

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-2

Sun Web サーバー

CGI ファイル名, A-4

HTTP 相対 CGI ルート, A-4

magnus.conf ファイル, A-3

obj.conf ファイル, A-2

インストール後のタスクおよび考慮事項, 5-6

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-5

構成ファイル, 5-6

手動構成, A-2

追加のドキュメント・ディレクトリ, A-2

フィルタ名, A-4

プロキシ・サーバー, A-4

SuSe

サポートされているバージョン, 2-5

Sybase

Content Server データベースの作成, B-13

JDBC 接続性, 3-11

JDBC 設定, B-15

JDBC ドライバ, 3-14

インストール後のタスクおよび考慮事項, 5-7

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-11

行ロック, 3-12, 5-7

クラスパス, B-15

コンテンツ・サーバーの再起動, B-16

コンテンツ・サーバーのポータル・ページ, B-16

サポートされているバージョン, 2-6

手動構成, B-13

データベース表の作成, B-14

SysAdminAddress, E-8

Sysmanager ロール, 7-2

SystemLocale, E-8

SystemTimeZone, E-9

T

TargetDir, E-9

ThreadedDiscussions コンポーネント, C-12

U

Unicode テキスト・フィールド, 3-7, 4-9, B-2

UNIX

Web ブラウザ, 2-9

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-2

オペレーティング・システムおよびバージョン, 2-5

UNIX コマンド

Content Server の起動, 7-2

Content Server の再起動, 7-3

Content Server の停止, 7-2

UserLocale, E-9

UserProfileSchemaLoader コンポーネント, C-12

V

VaultDir, E-9

Verity, 5-3

データベースの検索 / 索引付けへの移行, 6-8

Verity からデータベースの検索 / 索引付けへの移行, 6-8

Verity ロケール, 5-3

W

WebBrowserPath, E-9

WebDav コンポーネント, C-7

WeblayoutDir, E-9

WebServer, E-9

WebUrlMapPlugin コンポーネント, C-13

Web サーバー

Apache, 3-5

IBM HTTP Server, 3-6

Sun Web サーバー, 3-5, 5-6, A-2

インストール後のタスクおよび考慮事項, 5-5

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-4, 3-5

コンテンツ・サーバーとは別のコンピュータ, F-1

サポートされている製品およびバージョン, 2-6

Web ブラウザ

Apple Macintosh, 2-9

Java プラグイン, 2-7

JavaScript エンジン, 2-8

UNIX, 2-9

Windows, 2-8

Web ルートおよび Enterprise Search, 3-4

WsdGenerator コンポーネント, C-13

Y

YahooUserInterfaceLibrary コンポーネント, C-13

あ

アドレス・フィルタ, 4-5

い

インストール

インストール後のタスクおよび考慮事項, 5-1

インストールの更新 (コマンドライン), 2-13

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-1

概要, 2-12

コンポーネント, 4-9, 6-5, C-1, C-2

新規インストール (コマンドライン), 2-12

新規マスター・サーバー (コマンドライン), 4-2

新規マスター・サーバー (自動), 4-10

分離, F-1

無人, スクリプト・ファイルの使用, E-10

インストール後のタスクおよび考慮事項, 5-1

SQL Server, 5-6

Sybase, 5-7

Web サーバー, 5-5

各国語環境, 5-3

検索ソリューション, 5-5

タイムゾーン, 5-2

データベース, 5-6

ローカライズ・ユーザー・インタフェース, 5-4

ログ・ファイル, 5-2

インストール・スクリプト・ファイル, 「スクリプト・ファイル」を参照, E-1

インストールの更新

考慮事項, 6-2

サポートされている Content Server のバージョン, 6-2

プロキシ・サーバー, 6-7

インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-1

Apache, 3-5

Content Server の作業環境, 3-3

DB2, 3-12

IBM HTTP Server, 3-6

Java 仮想マシン (JVM), 3-2

JDBC ドライバ, 3-13

Linux オペレーティング・システム, 3-2

Oracle, 3-9

SQL Server, 3-8

Sun Solaris オペレーティング・システム, 3-2

Sun Web サーバー, 3-5

Sybase, 3-11

UNIX オペレーティング・システム, 3-2

Web サーバー, 3-4, 3-5

更新, 6-2

データベース, 3-6

マスター・サーバーおよびプロキシ・サーバーのユーザー ID, 3-15

インストール・ログ・ファイル, 5-2

う

ウイルス・スキャナ, 5-5

ウイルスのスキャン, 5-5

お

オペレーティング・システム

サポート対象, 2-5

か

各国語環境, 1-2, 5-3

管理サーバー

Content Server の起動, 7-2

Content Server の再起動, 7-3

Content Server の停止, 7-3

き

行ロックおよび Sybase, 3-12, 5-7

く

クラスタリング, 1-2

クラスパス

DB2, B-19

Oracle, B-8

SQL Server, B-6

Sybase, B-15

け

検索 Snippet (Oracle), D-4

検索エンジン, 2-10

データベース, 5-7, D-1

検索ソリューション, 5-5

こ

構成

Apache, A-5

DB2, B-16

IBM HTTP Server, A-8

Oracle, B-6

SQL Server, B-3

Sun Web サーバー, 5-6, A-2

Sybase, B-13

データベースの検索および索引付け, D-4

コマンドライン・インストール

インストールの更新, 2-13

自動インストール, 4-10, E-10

新規インストール, 2-12

新規マスター・サーバー, 4-2

スクリプト・ファイル, E-1

プロキシ・サーバーの更新, 6-7

コンテンツ・サーバー

Verity ロケール, 5-3

Web サーバーからの分離, F-1

各国語環境, 1-2, 5-3

起動, 7-2

クラスタリング, 1-2

コンポーネント, 4-9, 6-5

再起動, 7-3
システム・ロケール, 5-3
新規マスターのインストール (コマンドライン), 4-2
新規マスターのインストール (自動), 4-10
停止, 7-2
デフォルトのパスワード, 7-4
デフォルトのユーザー名, 7-4
認証, 4-3
ハードウェア要件, 2-2
プロキシの更新, 6-7
ローカライズ・ユーザー・インタフェース, 5-4
コンテンツ・サーバーと Web サーバーの分離, F-1
コンポーネント, 4-9, 6-5, C-1
 ActiveDirectoryLdapComponent, C-4
 ArchiverReplicationExceptions, C-4
 CheckOutAndOpenInNative, C-5
 CheckSCSHealth, C-5
 CIS_Helper, C-5
 ComponentTool, C-6
 ConfigMigrationUtility, C-6
 ContentAccess, C-6
 ContentFolios, C-7
 CoreUserInterfaceLibrary, C-7
 CoreWebDav, C-7
 DBSearchContainsOpSupport, C-8
 FCKEditor, C-8
 FileStoreProvider, C-8
 Folders, C-9
 FormEditor, C-9
 iTextComponent, C-10
 LinkManager8, C-10
 Localization, C-10
 NativeOsUtils, C-11
 OracleQueryOptimizer, C-11
 PopUpCalendar, C-11
 ProxyConnections8, C-12
 SecurityProviders, C-12
 ThreadedDiscussions, C-12
 UserProfileSchemaLoader, C-12
 WebDav, C-7
 WebUrlMapPlugin, C-13
 WsdGenerator, C-13
 YahooUserInterfaceLibrary, C-13
インストール状況, C-2

さ

作業環境, 3-3
サポートされている製品およびバージョン
 Java 仮想マシン (JVM), 3-2
 Web サーバー, 2-6
 オペレーティング・システム, 2-5
 検索エンジン, 2-10
 更新, 6-2
 データベース, 2-6
 電子メール・クライアント, 2-10
 電子メール・サーバー, 2-10

し

システム・ロケール, 5-3
システム・ロケール, 2 桁形式の年, 5-2
実装に関する考慮事項, F-4
自動インストール
 実行, 4-11
 新規マスター・サーバー, 4-10
 スクリプト・ファイル, 4-10, E-10
 スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド, E-11
手動構成
 Apache, A-5
 DB2, B-16
 IBM HTTP Server, A-8
 Sun Web サーバー, A-2
 Sybase, B-13
新規インストール
 マスター・サーバー (コマンドライン), 4-2
 マスター・サーバー (自動), 4-10

す

スキーマ・データ, F-5
スクリプト・ファイル, E-2
 エントリ, E-3
 エントリのオーバーライド, E-11
 大 / 小文字の区別, E-3
 構造, E-2
 コメント, E-2
 作成, 4-10
 自動インストール, 4-10, E-10
 スラッシュ, E-3
 パラメータ, E-2
 変数, E-4
 例, E-2
 ログ・ファイル, E-3
スクリプト・ファイル内のエントリ, E-3
スクリプト・ファイル内の大 / 小文字の区別, E-3
スクリプト・ファイル内のコメント, E-2
スクリプト・ファイル内のスラッシュ, E-3
スクリプト・ファイル内のパラメータ, E-2
スクリプト・ファイル内の変数, E-4
スクリプト・ファイルのエントリ
 \${SourceDirectory}, E-4
 \$SHARED DIR, E-4
 CreateDatabase, E-4
 DatabaseType, E-4
 DatabaseUnicodeFields, E-4
 DBServerDatabase, E-4
 DBServerHost, E-4
 DBServerPort, E-5
 FileEncoding, E-5
 HttpRelativeWebRoot, E-5
 HttpServerAddress, E-5
 IDC_Name, E-5
 IdcAdminServerPort, E-5
 InstallerJdbcClasspath, E-6
 InstallerJvmPath, E-6
 InstallJvm, E-6
 InstallType, E-6
 InstanceDescription, E-6
 InstanceMenuLabel, E-6

IntradocServerPort, E-7
JdbcClassPath, E-7
JdbcDriverPackageCopy, E-7
JdbcDriverPackageSourceFile, E-7
JdbcPassword, E-7
JdbcUser, E-7
JvmPath, E-7
MailServer, E-7
Platform, E-8
RunChecks, E-8
RunInstall, E-8
SearchIndexerEngineName, E-8
SocketHostAddressSecurityFilter, E-8
SourceDirectory, E-8
SysAdminAddress, E-8
SystemLocale, E-8
SystemTimeZone, E-9
TargetDir, E-9
UserLocale, E-9
VaultDir, E-9
WebBrowserPath, E-9
WeblayoutDir, E-9
WebServer, E-9
スクリプト・ファイルのエントリのオーバーライド,
E-11
スクリプト・ファイルの構造, E-2
スクリプト・ファイルの作成, 4-10

せ

正規名
Apache, A-8
IBM HTTP Server, A-11
全文検索および索引付け, 5-7
Oracle, D-4
SQL Server, D-5

そ

ソフトウェアのアンインストール, G-2
ソフトウェア配布パッケージ, 2-11
ソフトウェア要件, 2-5
HP-UX, 2-5
IBM AIX, 2-5
Java 仮想マシン (JVM), 2-6
Linux, 2-5
Oracle Enterprise, 2-5
Red Hat, 2-5
Sun Solaris, 2-5
SuSe, 2-5
Web サーバー, 2-6
検索エンジン, 2-10
データベース, 2-6
電子メール・クライアント, 2-10
電子メール・サーバー, 2-10

た

タイムゾーン, 5-2
多言語環境, 5-3, 5-4

ち

着信接続のアドレス・フィルタ, 4-5
着信接続のフィルタ, 4-5

て

データベース
DB2, 3-12, B-17
Oracle, 3-9, B-7
SQL Server, 3-8, 5-6, B-3
Sybase, 3-11, 5-7, B-13
Unicode テキスト・フィールド, 3-7
インストール後のタスクおよび考慮事項, 5-6
インストール前のタスクおよび考慮事項, 3-6
サポートされている製品およびバージョン, 2-6
スクリプト, 3-7, B-2
スクリプト実行の順序, B-2
全文索引付けの設定, 5-7
場所, 2-7
ライセンス, 2-7
データベース構成用のスクリプト
場所, 3-7
データベース設定
Oracle, B-11, B-13
データベース・テキスト・フィールドのエンコーディン
グ, 4-9
データベースの大 / 小文字 (DB2), B-20
データベースの大 / 小文字の保存 (DB2), B-20
データベースの検索および索引付け
Oracle, D-3
SQL Server, D-3
Verity からの移行, 6-8
構成, D-4
考慮事項, D-2
データベースのテキスト・フィールド, B-2
データベースの場所, 2-7
データベース表
DB2, B-18
Oracle, B-7
SQL Server, B-4
Sybase, B-14
データベース・フィールド・エンコーディング, 4-9
データベース・フィールドの削除 (DB2), 3-13
データベース用スクリプト, B-2
データベース・ライセンス, 2-7
データベースを使用した索引付け, 「データベースの検
索および索引付け」を参照, D-4
テキスト・フィールド, Unicode, 3-7
デバッグ
Apache, A-7
IBM HTTP Server, A-10
デフォルトのパスワード, 7-4
デフォルトのユーザー名, 7-4
電子メール・クライアント, 2-10
電子メール・サーバー, 2-10

と

ドキュメント, 2-11
ドキュメント・ディレクトリ
Sun Web サーバー, A-2

に

認証, 4-3

ね

ネクスト・キー・ロック (DB2), B-19

は

ハードウェア要件, 2-2

CPU, 2-4

RAM, 2-4

配布パッケージ, 2-11

パスワード, Content Server のデフォルト, 7-4

パフォーマンスの見積り, 2-4

ひ

日付書式

2桁形式の年, 5-2

ふ

フィルタ名

Sun Web サーバー, A-4

ブラウザ, 「Web ブラウザ」を参照, 2-8

プロキシ・コンテンツ・サーバー, 3-3

Apache の設定, A-7

IBM HTTP Server の設定, A-10

Sun Web サーバーの設定, A-4

更新, 6-7

ユーザー ID, 3-15

プロキシ認証, 4-3

プロセッサ (CPU)

パフォーマンス, 2-4

分離インストール, F-1, F-4

Content Server の構成, F-2

HTTP キャッシング, F-5

Java Server Pages (JSP), F-4

PDF バイト・ストリーミング, F-5

RedirectUrls フィルタ・プラグイン, F-2

コンテンツ・サーバーの変更, F-5

へ

ページ・サイズ (DB2), 3-12

ほ

ポータル・ページ, 再構築, B-6, B-8

ま

マスター・コンテンツ・サーバー

Apache の設定, A-5

IBM HTTP Server の設定, A-9

新規インストール (コマンドライン), 4-2

新規のインストール (自動), 4-10

ユーザー ID, 3-15

マスター・サーバーおよびプロキシ・サーバーのユーザー ID, 3-15

め

メモリー使用量, 2-4

メモリー要件, 2-4

ゆ

ユーザー・インタフェース

ローカライズ, 5-4

ユーザー名

Content Server のデフォルト, 7-4

よ

要件

JVM, 2-6

ソフトウェア, 2-5

ハードウェア, 2-2

り

リリース・ノート, 1-2

れ

連結解除された Web サーバー, 「分離インストール」を参照, F-1

ろ

ローカライズ・ユーザー・インタフェース, 5-4

ローカル・ホスト (127.0.0.1), 4-5

ロール

sysmanager, 7-2

ログ・ダンプ・ファイル

Apache, A-7

IBM HTTP Server, A-10

ログ・ファイル

インストール, 5-2

スクリプト・ファイル, E-3

ロケール

Verity, 5-3

